

---

# 闇色の二重奏

まーや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇色の一重奏

### 【Zコード】

Z0544X

### 【作者名】

まーや

### 【あらすじ】

望んだのは平穏で平凡な一生だった。夢は小学校の教師になること。それなのに気が付いたら全く知らない場所で、目の前には金髪碧眼美女が一人。しかも僕の母親と来た。いやいやいや。僕の名前は【橋本誠也】で決して【ダット】なんて名前ではなくて 唐突に異世界に放り込まれ、混乱する青年（？）の成長記。一人称で不定期更新。

## いきなりな急展開

頭の周囲、で脈が打っている感覚といつのがわかるだろつか。よくよく考えてみると気持ちが悪いが、こめかみの辺りがピクピクする状態によく似ている。それに合わせて頭が痛い、と後頭部をさすればこぶが出来ていた。

そりゃそうだ。

なんたって、僕の背中には堅い床。  
理由は推して知るべし。  
当然転げて頭を打つたからといつ簡単で単純なことだった。  
そして。

「やだ、ちょっと。大丈夫？」

僕をのぞき込むのは金髪碧眼美女。

お互の息が触れ合う程度の距離に顔をつき合わせている。しかも、彼女が僕の上に被さった状態で。

うわあ。何この状態とか思っていたら、何気なくヤバイ状態なことに気がついた。

彼女のワンピースの隙間から微妙に胸の谷間が見えている。かなり唐突ではあつたけれど、これって男としては鼻の下を伸ばしてもオッケーなシチュエーション。だよな。

更に言えば、フラグっぽいよな。これ。

しかし生憎とマジマジと見て頬を平手で叩かれるなんて趣味はないので。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からビートで頂けませんで  
しょうか?」

とりあえず、そこから視線を逸らせて紳士的対応にしてみました。  
まあ、こんな美女に対してもしつけに胸の谷間見てました。なん

てとても格好がいいとは思えないし。

あ、でもちらつと見えたな。でも、バレたら印象悪くなりそうな  
のでそうならないようスルーする選択を取る。

「あれ？」

なんでか不思議そうな顔されたけど。

「どうして敬語なの？」

あれ、それが原因？ って、いいからとりあえず退いて欲しい。  
とお願いしたらすんなり退いてくれた。

よし。これでひとまず大丈夫、と。

では、改めて状況確認しようか。

体を起こして立ち上がる。とりあえず一番痛いのは頭痛。疼いて  
いるという感じに痛い。あとは……うん。お尻とか背中もちよつと  
痛い。

多分受け身も取れないままがつたり倒れてしまったんだろう。

先程の状態から見ておそらく僕は彼女にぶつかり、そして押し倒  
された。と。

うん。なんていうかダブルで美味しいシチュエーションだったよ  
うだ。

まあ、その分体のダメージも大きかったようだけど。  
そんなことを考えていると。

「ねえ、大丈夫？ やっぱり頭打ったところが痛むの？」

本気で心配そうな顔をして腰を屈める金髪碧眼美女がいた。  
おっと。うつかり思考の世界に行きかけていた。

「あ、大丈夫です」

僕は金髪碧眼美女を見上げて……ん？

見上げて？

あれ。なんかおかしい。

頭の中で、警鐘が鳴る。といつのさいにいつことを指すんだろう  
か。

違和感にふと周囲を眺めて、僕は肩の辺りにあるテーブルに気が

付いた。そのテーブルはかなり大きく、備え付けてある椅子もまたそれに合わせて大きい。

そう。僕を見つめる金髪碧眼美女がぴたり丁度と思える大きさで。

「なにこれ、巨人の国？」

思わず洩らしたのはどこかのおどぎ話を思い出したからだつたが。

「ちょっと。ダット！？」

金髪碧眼美女は蒼白になつた。

あれ。ちょっと待つて。僕なにかした？

「や、やっぱりさつき頭売つたのが原因なのかしら。び、どうしまじゅう。お医者様？ そう。お医者様呼ばないと駄目かしら？」  
なにやら慌ただしくなつて参りましたが、彼女がどうしてそんなに慌てるのかさっぱりです。

多分おそれく、いや、絶対。僕に原因があることは間違いないけど。

いや、それにしても妙だ。

どうしてこの金髪碧眼美女はこんなにも僕のことを探るんだろう。

他人なのに。

「い、いえ。まずあの人と言つべきなのかしら。ああああ、どうしたらっ」

「あの」

控えめに声をかけてみる。が、聞こえていない様子。

仕方がないので、蒼白になつた頭を抱えてオロオロしたじめた金髪碧眼美女のワンピース。その裾を引っ張つてみた。

「あーの一ー

少し大きめの声で。

そうしたらようやく彼女は気が付いたみたいで、僕の方を向いてくれた。少し涙目になつて『いるのがいたたまれないけど。でも疑問をちゃんと明らかにするのが先だ。』

けど、思えぼいのとをかうべし考えて発言するべきだったのかも  
しない。

それでも、このときわれしか考えられなかつたんだから仕方な  
い。

「お姉さん、誰？」

ええ、浅はかでした。よもややうなるとは思つてもみませうでし  
た。

完全なる予想外の展開が僕を待つていてた。

結論から言つと。

お医者様を呼ばれました。  
わいじ。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけど

白衣は着ていないけど、医者らしく中年の小父さんにじく当たり  
前の質問をされたので返答したら、金髪碧眼美女に泣かれました。

泣かれる覚えないのに、びりょく。

その考えが間違いだとば、今の僕には知りよづがなかつた。

## 状況整理

ぶつちやけて言ひと。

一、どうも金髪碧眼美女は僕の母親らしいです。

二、でもって、僕は今十歳を迎えたばかり。

三、名前はダット。ダット・クリークス。

四、出身地はジードリクス王国のカーライルという町。ちなみに今いるのも「」。

五、ってことは日本ではないわけで、じゃあ何処だつてことになるわけですが。

六、……………何処？

それを言つたら、また金髪碧眼美女に泣かれることになるから言わないけど。

でも、僕だつて混乱中だ。

気が付いたら金髪碧眼美女と一緒に床に倒れてたみたいだし、なんでか周りの物は全部大きいし、よくよく見たら全然全く知らない場所だし。

「うーん。記憶喪失、だと思つんですけどね」

そう言つて唸つているのは僕を見ててくれた医者だった。

「全く違う人間だと言われたのは初めてですよ。ええ。本当に。普

通は名前も年齢もわからない状態のはずなんですが……」「うん。その意見には賛成だよ。お医者様。

普通の記憶喪失ならね。

でも、僕の場合はおそらく違つ。

自分でもよくわからぬけど、おかしいとは思うけれど、自分の顔を手鏡で見せられれば、そこまでされればわかつてしまつ。髪の色こそ黒だが、顔だちは正に金髪碧眼美女を幼くしたようなあどけなさを宿した少年そのもの。

平凡な黒髪黒目は一体何処へ行つてしまつたのか。

というぐらゐの変わりようだつた。

もちろん声だつて変声期前の子どもなわけで。つまりこれは。

「生まれ変わつたとか、そういうオチ？」

それともどつかの少年に取り憑いて体でも奪つたか。うん。後者だつたら物凄い罪悪感ありまくりだ。つていうか、僕、それだと死んだことになるのでは……？

「いやいや待て待て」

頭を振つて考え方直す。

そもそもどうしてこうなつた？

僕はこの場所にいるところの自覚が出来る前はビリビリしたのだらうが。

まずはそこからだ。

といつこといで、こいつなる前の記憶を引っ張り出すことにした。

まず、僕の名前は橋本誠也。年は二十歳。職業は大学生。要するに、学生だつたわけだけど。

将来の夢は小学校教師。

地味で、平凡で、当たり前の生活がしたいと望んでいた。

他の連中は逆玉で金持ちになる海外でスロット当ててやるとか、冗談風味にでかい口叩いてたけど、就職が世知辛いこのご時世。そんなギャンブルめいた危ういことをする勇気も志も持たない僕には遠い話だった。

それを「意氣地なし」だの「タマなし」だの揶揄されることもあつたけど、それなりに楽しい学生生活を送っていた。

まあ、大学行く条件に学費の半分は自分で出す。つて約束してたからバイトもいろいろしてたけど。

そこそこ充実した毎日だったんじゃないかと思う。

そう。至つて平凡な大学生活をしていたはずだったんだけど。

「お、いたい。 ょう。 橋本」

講義終了後にやつってきたのは、今時のピアスやらファッショングを包んだ女子からも人気の高い男。

名前は神谷修平。

いくつか僕と同じ講義を取つていて、隣に座ることも少なくない。今のところは友人未満のよく話をする知人である。

その容姿の、とくちゃらんぽらんに見えるが、実は結構真面目で講義をさぼっているのを見たことがない。のに、遊びにも手を抜かない器用な男。というのが僕から見た彼の評価だ。

「あ、神谷。 どした？」

気が付けば毎回違う女子が隣にいる。そんな彼に相応しく今日も今日とて見知らぬ女子が一人側に立っていた。

今日日珍しく髪を染めていない黒髪女子である。しかも、今まで神谷というこの男が連れ歩いていたコンサバ系統の女子ではない。

「宗監替えした？」

思わずそう問いを発してしまつほど、彼の好みには見えなかつた。全身を黒で埋め尽くし、おおよそ地味めな独自ファッション。顔は美人だが、ちょっと目がきつい。

うーん。黒でゴシックロリータだつたか。

そんな連中がうろついているのは見たことあるが、その辺とはまた一線を画した雰囲気がある女子だ。

「あー、違う違う。この人は法学部の伏見先輩。お前に用があるんだと」「

「僕?」

先輩で、僕に用とは一体なんだ。

まさか告白?

いや待て。

僕は彼女を知らない。というかここで期待はいかんだろう。意識して実は違いましたじゃ、痛い。痛すぎる。

「じゃ、紹介終了。つてことで。オレはお暇する。後で成果を報告しろよー」

神谷の方はどこかおもろがつてさつと退場。

アイツ、今度合つたらシメテヤル。

結局残されたのは僕とその伏見先輩という女子だけ……ではない。現在の場所は講義終了後の教室である。当然周囲には人の目が。流石にここで告白とかはないはずだ。よほどの物好きなら別だけど。とか考えていると伏見先輩が僕がいる方向に動いた。

「やっぱり、あなただわ」

切れ長の瞳が僕を捉える。

正直に言つていいいだろうか。

僕も彼女と同じ目の色のはずなんだけど、異様に怖い。なんとかわからないけど、ホントに。マジで。

目が据わっているわけでもない、楽しんでいるわけでもない。えて言うなら、他の奴らにあるような感情が見えないとしつづべきか。そんな彼女の目に捉えられて動けない僕の目の前に伏見先輩は立つ。

そして。

「気をつけて。あなた、さらわれるかも」  
予想外の言葉は発せられた。

「特に雨の日は危険。出かけない方が身のためよ  
あまりにも唐突すぎてその後は声が出なかつた。  
というか、なにそれ。

予測の範疇にない斜め上の《告白》は状況を飲み込もうと混乱す  
る以外、僕の全ての反応を奪つた。

「じゃあ、忠告はしたわ。無駄かもしれないけど  
用は済んだ。とばかりに僕に背を向けると去つていいく先輩。  
呼び止め、問い合わせる間もない。

「……何アレ」

とりあえず、周囲の講義仲間に問いかけてみたけれど。

「俺らが知るわけないじゃん」

はい。その通り。

だけど、後になつて思えばこれがきっかけというか原因だつたん  
ではなかろうか。

僕の記憶が途切れているのはこの翌日。  
彼女が言つ雨が降つた日だった。

## 天気予報

奇妙な先輩に出会つた翌日の天気予報は曇り。

ちなみに降水確率は午前中は三十パーセント。午後は五十パーセント。

家を出るときに「傘を持つていきなさい」と母親に持たされたわけだけども、僕の心境は複雑だった。

家を出て空を見上げる。

雲は多いが、晴れ間も見える六月独特の天気だろう。要は梅雨。今日の講義は教授のご都合で午前中のみ。

例の先輩に言われたからというか、なんというか。気分的に行きたくない状態だったが、学業は疎かにしないと密かに立てた誓いもある。

伊達に小学校、中学校、高校と皆勤賞を取つてきたわけじゃない。それにここまでこう来ると大学もやってやろう、って気にならないだろうか。

目指せ、大学も皆勤賞！

……うん。こう、流れ的にね。

ともかく、現状大学を休むという行為をするつもりはなかつたし、夕方にはバイトが入つていて、家を出ないわけにはいかない。

それに、午前中ぐらいは雨大丈夫っぽかつたし。

っていうか、なんで僕あの先輩の言つこと気にしてるんだろう。

「いやいや、あんないきなりオカルトっぽい電波な話……」

実際にあるわけない。

あの先輩の目は怖かつたけど。

そんなわけで、大学に行って、講義を受けて、午後は適当に時間

を潰して、夕方にバイトに行つて。

その間、雨は降りませんでした。

おしまい。

ああ。ホントにこれでおしまいだつたら、よかつた。  
よかつたんだけど、そつはならない。  
ならなかつたからこそ、僕は奇妙なことになつたわけ。  
雨はバイトの後にやつてきた。

「土砂降り……」

朝から晩まで降るはずだつた量が全部一度にやつてきたんじやない  
か……？と思えるほどに大きな雨粒が凄い音を立て降り注いでいる。

正直、ビニールハウスとか穴が空いてもおかしくないんじやない  
かつてくらいに。

その証拠に。

傘を差して一歩外に出た途端、その重量が一倍以上に増えた。  
普通なら「トントントン」と程度の雨音なのに今は「ドドドドドドドド」とまるで滝のような音がする。

雷も光つては鳴り、光つては鳴り。

昔、光つてから三秒以内に音がしたら物凄い近い証拠だつて聞いた気がするけど……うん。

空気がビリビリと震えてるし轟音だから耳も痛い。

しかも光つてからいつ鳴るかわからないわけで、構えていてもドキリとする。

いや、別に怖いとかそういうわけじゃないけど。  
いつ来るかわからない驚きというのが厄介つてだけで。  
しかも、気温のせいなのか歩く場所歩く場所モヤだらけ。  
視界が悪すぎる。

この状態で歩くのは危険だらう。とにかく近くのコンビニへ。

横断歩道も目の前で足早に駆け抜けて……滑った。

しかも道路の真ん中で。

頭に物凄い衝撃を受けたのは覚えている。

実のところそれが最後の記憶であり、現在に繋がる記憶、だったりした。

「うあー」

ベッドの上で悶える。

なんとも情けない最期ではなかろうか。  
いや、あれで本当に死んだのなら。という注釈がつくけども。  
この状態を見るに、あの伏見先輩の言つたことが見事に的中した  
っぽい。

微妙に違つけど。

それともあれはただの偶然だったのか。

「ダット」

金髪碧眼美女がそんな僕を戸惑いながら見つめている。

あ、ヤバイ。泣きそうな顔だ。

「えつと。よくわからないんですけど。あなたが僕のお母さん？」

「……っ！」

あ、泣いた。

「どうしてこんなことにつ。ああっ。でもわたしが悪いんだわ。慌ててたから、ダットが部屋に入ってきてたことにも気付かずにぶつかつてつ！『ごめんなさいダット！』

大泣きして、ベッドの上の僕にしがみつく。  
つてか、痛い。イタ、痛いってば！  
この人、凄く力が強い。

胸の辺りが彼女の腕で見事に締め付けられて息が出来ない。

「ちょ、はなし……」

死ぬ。死ねる。息がつ。

「あー、コホン。おかあさん。息子さんが苦しがっていますので、その辺りで」

ありがとう。お医者様。

あなたのおかげで死なずにすみました。

肩を叩かれた金髪碧眼美女ははつと我に返つて離してくれた。「えー、とりあえず。記憶がない以外は特に問題ないようですね。まあ、記憶がおかしいというのは……まだ頭を打ったばかりですから混乱しているだけかもせんし。何日か様子を見てみましょう。時間の経過で記憶が戻る場合もありますし」

「ほ、本当ですか?」

「ええ。もちろんこのままという場合もあり得ますが」

金髪碧眼美女の目に再び涙が浮かぶ。

いや、まあ。なんとなく気持ちはわかるけど、対応に困るのでとりあえず泣くのは止めてもらいたい。

「痛み止めの薬は処方しますので、ひとまずそれで経過を。あとは……そうですね。普段と同じ生活をさせてあげてください。ふとしたことでも何か思い出すきつかけになるでしょうから」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

その会話を最後に医者が色々と道具を片づけて出て行く。

金髪碧眼美女もそれを追つたので、現在部屋には自分一人きり。  
「…………はー。なんじゃこれー」

未だに痛む頭を抱えて唸る。

どう考へても普通じやない。

自分の部屋だと言われて連れてこられたこの場所。子供用のベッドとか勉強机っぽいのとかいろいろあるけど、どう考へても【橋本誠也】のものではない。

そして、ベッドが置いてある場所から見える窓の外も見慣れた四

角いビルなど存在しない。

あるのはいつかテレビの旅番組で見たようなヨーロッパで見かける風景に酷似していて、まるでジージャのテーマパークのようだ。

「わけがわからん」

なにがどうしてこうなったのか。

いや、多分原因はあの雨の日にすつころんと頭を打ったからなんだろうが。

なにをどうしたら自分は十歳で、ダット・クリークスなんて別人になっているのか。

しかも聞いたことない国で、町で、服を見てみたら完全に昔風味。これで混乱するなという方が無理というもの。

僕、これからどうなるんでしょうか。

誰ともなしに、いきなり放り出された場所に問いかける。今はそれしか出来ないのが少し寂しくて悲しかった。

実のところ。

僕が気が付いていないだけで、あとでびっくりすることがまだいくつありました。

中でも、なぜ最初に気付かなかつたのかと思ったのは言葉。普通に聞いて普通に喋つて、それで理解できていたから全然まったく気が付いてなかつたんだけど、実は金髪碧眼美女とか僕が喋つていたのは日本語じやなかつた。

金髪碧眼美女で日本語が流暢に喋れるとか、そんな人間が早々いるはずもない。

それに気が付いたのは、僕がというかダットが読んでいたらしい本を見せられた時。

それこそ文字通り、目が点になつた。  
漢字でもなく、ひらがなでもなく、カタカナでもなく、アルファベットでもない。

強いて言うなら……ハングル語？ を崩してさらに細かくしたような字が書いてあつた。

うーん。わかりづらいか。

例を出すなら、中国の簡略化した漢字を日本の漢字に変換した。

とでも言えばいいのか。

ともかくそんな感じで、文法は英語に近い。

完全に見たことない文字だが、しっかりと脳内で読めているのはたぶんこの体がそれを覚えているからなのだと思う。

しかし、それ以上に困惑したのは読んだ本のタイトルだった。

「【魔法基礎読本】」

物凄く嘘くさいと思つたのは僕だけだろうか。

魔法なんて代物は空想の世界の產物だつてことは常識。

子供向けに絵でわかりやすく説明されていて読み物としては面白かつたけど……とりあえず、適当に田を通じてその辺に放置。

何かを期待する田でお母様に見られましたが。ええ、何もありませんとも。

そのあと涙目になつてたけどね。

ああ、そうだ。

母親がいるつていうことは、父親もいるつていうことで。

僕、ダットが頭を打つて記憶喪失になつたという知らせを受けて家に帰ってきた彼は、厳つい顔で、何故か鎧つぽいものに身を包んだ熊みたいな黒髪の大男。

それを見た瞬間凍り付くしかなかつた僕は、肩を掴まれ。

「ダット。父さんだ。わかるか？」

ひげ面の彼に迫られました。

厳つい顔にひげ面は、かなり迫力がある。まさに泣く子も黙るうかという状態。

いや、でも知らないものは知らないわけで。

「わかりません」

素直に言つたらこの人にも泣かれました。

涙する大男なんて怖すぎる。つか引く。

まあ、原因は言わずもがな僕なわけだけど。罪悪感もあるんだけど。でもここで嘘付くわけにもいかないし。

とか思つてたら金髪碧眼美女も混ざつて泣き始めた。

流石に何か言わなきや、と思つて「『ごめん』って謝つたんだけど。これが失敗だつた。

感極まつた一人に同時に抱きすくめられて体がみしりと軋みましたよ。ええ。軽く意識が遠退いたとも。

二人とも力が強すぎる。殺す気か。

それはさておき。

新しい情報も含め、もう一度現状を把握するために整理する。まず、僕の名前はダット・クリークス。

どうにも泣き上戸っぽい金髪碧眼美女が母親で名前はキーラ。

厳めしいひげ面の大男が父親のガリオ。

母親の方は専業主婦で、父親の方は聞いたら町の自警団の副団長だった。

「自警団ってなに？」

と思わず聞いたら、それも忘れたのかと意氣消沈されたが一応説明してくれた。

その内容は、少しばかり信じがたいものだったけど。

「自警団ってのはな。町を守る雄志の集まりだ。仕事は町の治安を維持することと、町の外にいる凶暴な魔物から町を守ること」

うん。前半は納得した。

けど後半部分の魔物って何だ魔物って。

「何！？ 魔物のことも忘れたのか？」

すみません。忘れたんじゃなくて、わからないんですね。とは流石に言えない。

「魔物はな、危険なんだ。人間が自分の縄張りにやつてくりや、容赦なく襲う。逆に言えば、縄張りにさえ入らなきゃ安全つてことになるんだが一概にそうとは言えねえ。はぐれたり、食料がなかつたりすりや、人間の住む場所にやつてきて人間も襲う。魔物つてのはそういうやつらだ。姿形もいろいろでな。地を駆ける奴もいれば、空を飛ぶ奴もいる。水の中にもいるらしいが……オレは見たことがねえ。普通の人間にや、相手は無理だ。ちゃんと鍛えた奴か、魔法使える奴が何人かで組んでやらねえと死人が出る。中には一人でやる奴もいるが、まあそりや特別な人間だな」

えーと。

まとめるとつまり、ここには見た目通り日本ではあり得ないわけで。

しかも地球と基本的な部分が違つていて。

日本で言つならいわゆるファンタジー系なアレつてこと。

おまけに魔法といつ言葉まで話に出てきたということは、放置した例の【魔法基礎読本】は実際に役に立つ代物だった、と。なんかゲームとかでよくある展開になつてきた気がする。

「うわあ」

そう考えたらちょっと鳥肌が立つた。

もちろんあり得ないだろ、という方向。

いや、心も少しは躍つたけどね。

それでも平凡で平穏な日々を満喫したがっていた人間としては勘弁してください、な展開だ。

かといって自分の身を顧みれば、すでにそれが回避できる状況でもないのは明らか。

「つまりはここで生きていくしかない、と」

僕の容姿はすでに【橋本誠也】ではあり得ない。

目の前で心配そうな顔つきの両親の子供。【ダット】でしかないわけで。

未だ納得いかない部分はあるものの、そういうもののなのだと受け入れなくては生きていけそうになかった。

ただ、この一人にはなんだか申し訳がないような気がしてならなければ。

「なんとなくわかつた、かな」

「そ、そう?」「

「二人がお父さんとお母さんで、僕がその子供。お母さんは専業主婦で、お父さんは自警団の副団長。町の外は危険な魔物がたくさんいる」

まずは、ここまでわかればなんとかなる。

あとは徐々に色々覚えていけば、この世界でも生きていくだろう。

そのための努力は多分必要だけど。

でもその前に。

「ダットー！」

「ちゃんと想い出してね」

「どうやらこの両親には抱きつき癖があるらしい。」

これを改めてもうわなれば、知識を得る前に死にそつだつた。

## 1. 都合主義な夢空間 僕とぼくへ

とんでもない一日だった。

転んで頭を打つて田が覚めたら異世界なんて、漫画の世界だけだ  
と思っていたことが実際に起こるなんて誰が思つものか。  
僕自身が望んだ平穏で平凡な毎日がいきなり消え去ってしまうな  
んて悲しすぎる。

だからせめて夢の中だけでは平穏で平凡であつて欲しかった。  
欲しかったなんだけども。

「こんなにちは」

「どこに立つているのかわからなこよつた真つ白な夢空間。  
そこでの僕はちやんと二十歳の【橋本誠也】で。けれど、田の前  
には十歳の少しおつとり顔の【ダット】が立つていて。

「あれ？」

なんでこんなこと。

いや待て、整理しよう。

これは果たして本当に夢か。

「夢、だよ。ぼくらは跟つてる」

「うかうか。

じゃあ、田の前にいるのは。

「ぼくはダット。おにこさんも、そつ

「いやいや。僕はちが……ん？」

あれ、今僕声に出してたかな。

「ううん。出してなによ。でも、ぼくはおにこちゃんと回じものだか

ら。考えることは全部わかる

「わあ。それってヤバイ。

全部筒抜け。隠し事不可能。妄想も……いや駄目だな。  
相手は十歳。危険すぎる。

「うん。でもどっちもぼくだからあんまり関係ない、かな」  
それはそうかもしれないが、つて。

「待て待て待て」

今、聞き捨てならないことを聞いたような気がする。  
ダット少年よ。まず聞こう。

「君は誰かな?」

「ダットだよ。正確には今のおにいさんが忘れてる、この世界に生まれついた【ダット】の十年間の記憶、だけど」  
はい、爆弾発言来ました。

つていうか待つて。何ソレ。

「……わからなくは、ないはずだけど」

ダット少年はきょとんと僕を見上げる。

「おにいさんもなんとなく気が付いているはず

「何を」

「だつて、いろいろ考えてたでしょ。自分はあの大雨の日に転んで死んで、生まれ変わったんじゃないのかとか、死んで違う世界の【ダット】に憑依しちゃったんじゃないのか。つて」

「あ……」

そう。確かにそれは考えた。

本物のダットはどこへ行つたのか。もしかして追いついたのかも。  
とか。

あまりにもオカルトじみた発想だけど、実際そうだとしたら本人にもその両親にも謝つても謝りきれない罪を犯したことになる。  
そりや罪悪感でいっぱいにもなるわー。

しかし、目の前には【ダット】と名乗る少年がいて。

「実はね。どっちも正解と言えば正解

「……はー?」

一度田のトンデモ発言をしてくれた。

「本当に死んじやつたのかはぼくにはよくわからないけど、確かにぼくは生まれて十年間ここで過ごした。向こうの世界の記憶はなかつたけど。でもね、ずっと違和感を感じた。きっとそれがおにいさんだつたんだね」

ダット少年はそう言つて僕を指示す。

「どうしても、この世界が不自然に見えて仕方なかつた。この世界は自分がいる場所じゃないって思つてた。お父さんとお母さんも好きだし、友だちだつているけど。でも自分だけ取り残されてる感じがして。疎外感つていうのかな。こういうの難しい言葉知つてるね。疎外感。十歳なのに。

思わず心の中で茶々を入れてしまつたが、ダット少年見事に無視。あ、うん。疎外感感じたよ。今。

でも、ダット少年の次の言葉に遊んでいる場合ではないことに気が付く。

「ずっとやう考えてきて、考えて続けて。そしたらこいつなつたんだ。わかる?」

彼が押されたのは自分の後頭部。

その姿に、僕ははつと我に返つた。  
まさか。

「頭を打つて、思い出した?」

「正解」

ダット少年が笑う。

【橋本誠也】だった過去をね。それで思い出したんだ。でも打ち所が悪かつたせいで【ダット】の十年間が飛んじやつたみたい

だからあの医者の言つた記憶喪失も正解なのだとダット少年は言つ。

「それが、僕?」

「うん」

まさになんてこつた。だ。

けれどこれで少し納得もいった。

つまり。

「最初に言つたように、ぼくはおにいさんで、おにいさんぼく。ぼくは【橋本誠也】の記憶が戻つたことで違和感の理由がわかつてすつきりしたし、多分おにいさんもどうして自分が【ダット】のかこれではつきりしたんじゃない?」

……確かに、そういうことなら大部分の疑問が解消される。が、それでも納得いかない部分についてはどうだろ?」

例えば。

「ここの日本じゃないよな」

「うん。ここのジードリクス王国のカーライル。二ホンって国は聞いたことない」

「どう見ても生活水準が二十一世紀とは思えないんだけど」

「向こうにあつたものはほとんどないって思った方がいいかも。キ

カイとか。その代わり魔法があるよ」

その時点で紛れもなく別世界判定チェック付けないと駄目よなあ。やつぱり。

「魔物もいるし。その認識でいいと思う」

でも、僕が一番に疑問なのはソコじゃない。

「普通、生まれ変わるって言つたら同じ世界だね」「そう。コレだ。

輪廻転生とかそういう話は、宗教というか、昔話というか、日本でも色々あるし珍しくない。

だけど、こんないきなり異世界で生まれ変わるとか思わない。

まあ、そもそもが普通こんな記憶があつて生まれ変わつてるとかいう 자체があり得ない状態なんだからさ。

「受け容れられないって思つてる?」

ダット少年が少し困った顔で僕を見上げる。

う、そんな悲しげな目で見るのはやめてほしい。

「な、納得いかないだけだよ。それだけだから気にするな」

つていうか、なんで僕。自分で自分を慰めるような真似しないと  
いけないんだわ。

「でもそれ、明らかに拒否してるよね」

あ、突っ込まれた。

「やっぱり、向こうの世界の方がよかつた？ 帰りたいの？」

「それ、未練があるかどうかってことか？」

「うん」

はつきり聞いてくるなあ。ダット少年。

「まあ、普通に平凡に生きられたら満足だつて思つてたし。その目標に達する前に死んだのはちょっと微妙」

せめて、彼女作つて結婚して子供と遊ぶ……ぐらいのことははしたかった。

考えていることが筒抜けだから、ダット少年に呆れられたけど。「ちょっとつていうか、未練がいっぱいあるみたいにみえる。贅沢つるわー。それぐらい夢見てもいいだらうが。

「……悪いとは言わないけど。でも死んでるから、意味ないね」

おー。何気なく発言に棘あるな。ダット少年。

「だつて、今この世界で生きてるのはほんくだもの」

「う、そうだった」

言つまでもなく【橋本誠也】はすでに死んだ身。主導権が【ダット】にあるのは当然のことだと今さらながらに気が付いた。

ダット少年。僕が悪かった。

現状を否定するのは、自分を否定する」とに等しいとやつと氣付く。

「でも、おにいさんもぼくだから。気持ちはちゃんとわかってる。だから、おにいさんの希望通りにはいかないかもしねいけど。ぼくもちゃんとぼくが生きたいように生きるよ」

それが前世である僕へ向けて出来るる唯一のことだから。

最後の言葉は口には出ていなかつたけれど、ちゃんと云わつてきた。

まあ、ダット少年が眞つまつに彼も僕だから出来ぬ筋道なわけだけど。

「あ、そろそろ起きないと。おとつかことおかあさん心配かけすぎたから。あやまちなきや」

ダット少年が僕に向かつて手を伸ばす。

「……そだな。僕、思いつきり失礼なこと言つたし

誰、とか。敬語で喋るとか。

あれは正直あの時点でも泣かせやきたとかよつて呟いてる。  
「こはやはや、わけんと謝らなことこけない。

「行こうか」

僕の手が、差し出されたダット少年に触れ。  
夢の世界は消失した。

## 謝罪と決意

日が昇り、朝日が差し込む部屋の中。

「「めんなさい」」

包帯を巻いた僕が頭を下げたこと、やつと両親は驚いたことだ  
るべ。

朝の「おはよう」「やあこまわ」の直後である。やじド誰が息子の謝  
罪を聞くと思うだろ？

うん。きっと僕がその立場でも驚くと思ひ。

ごめんな、ホント。混乱させて。

でも、やつとこれから話すことは更に一人を混乱させるに違いな  
い。

だからこれは、それを含めての謝罪だ。

まだあまり動かない方がいいとベッドの上に座る僕に、一人は困  
惑した顔で話しかけてきた。

「だ、ダット。どうして謝るの？」

「そうだぞ。なんていきなり」

あ、なんかまた母さんが泣きそうな顔をしていく。

昨日の今日だもんな。更におかしくなったんではと心配されて  
も仕方ないかも。

これは早くフォローした方がよむやつだ。

「違うよ。その、ちゃんと思い出したんだ。僕が父さんと母さんの  
子供だったこと。だから」

「え……？」

「心配かけて」「めんなさい」

ぽかん、とただ僕を見つめる一人にもう一度頭を下げる。

両親が息を飲む音が聞こえた。そして、数瞬の間呼吸音も消える。

まるで時間が止まつたかのような感覚。

ふう、とまるで呼吸を忘れていたかのように息を吐き出したのは母さんだった。

「え、あ。思い、出したの？」

「じゃあ……？」

「うん。記憶喪失はおしまい」

下げていた頭を上げてにこりと笑つてみせれば母さんの目に涙が溢れた。そのまま父さんに向き直り、一人は顔を見合わせる。父さんは……少し厳しい表情だったけど。多分それが、次の行動に繋がつたんだろう。

お互の顔を見て安心したのか、母さんが今にも抱きついてきそうな勢いで僕の方に体ごと向き直る。けれど。

「待て。キーラ」

父さんがそれを止めた。

その時の顔は厳つい印象に似合ひと言つては失礼だが警戒感に満ちていて。

「喜ぶのはまだ早い。ちょっとは疑え」

母さんを諫めていた。

流石は自警団に勤めていることだけはある。気付いたかな。

でも母さんはと言えば、なぜ止められるのかわからない様子で父さんを見上げている。

「ガリオ？」

「見た目に騙されるな。どうもおかしい」

鋭く僕を睨みつけた父さんは母さんを自分の体の後ろに回す。その目は得体の知れない何かを感じ取つて見えた。

まあ、中身がちょっと変わっちゃつてるから、この反応は正常と言えば正常なんだろう。

むしろ疑わなかつた母さんが軽率だったわけだけど。でも、動搖

してゐる様子だつたし、この辺はやつぱり夫婦だから父さんがフォロ  
ーしてゐるわけだけど。

「剣を持つてくるべきだつたか」

「ちょっと！？」

でも待つて。それは物騒だから待つて！

自警団の一員らしい発言ではあるけれど、それはまだ早いから！

「ガリオ！」

ほら、お母さまもびっくりしてますから。また泣きやうになつて  
るから！

せめて話を聞け、と僕は慌てて口を開いた。

「父さーん、僕魔物じやないよ？」

「ふん。証明が出来ると？」

冗談半分に言つたソレに、即座に返答した所を見るとどうやら僕  
は魔物か何かだと思われてるっぽい。

失礼な。前世でも人間やつてたんだ。と言いたかったけど、現時  
点でそれを言つのは無謀っぽい。

それならそれで、別の方法を取るまでだ。

僕が【ダツト】であるという証明。

決定的な証拠を突きつけてやる。

「十日くらいい前だつけ。旅の傭兵の色っぽいお姉さんにチューされ  
てたよね。確か」

効果は抜群だつた。

一瞬の間の後。

「え……？」

母さんが父さんの背後から「今の発言はなに？」と目を何度も瞬  
かせながら顔を出す。

父さんは、僕が発言した瞬間にみつともなく口を開けて固まつ  
ていたが、すぐに我に返ると。

「お、おい待て」

と、慌てだした。

母さんに対する後ろめたさが、そうさせたに違いない。

何を言つてゐるんだと言わんばかりに父さんが僕を見ているけれど、証明しろと言つたのはあなたですよ。

だから、僕と父さんしか知らないことやつなことを言つのが一番なんです。申し訳ありませんが、大人しくトドメを刺されてください。

母さんに。

「僕が見てるの知つて、慌てて離れてたけど。母さんに内緒だつて飴買つてくれなかつたつけ？」

「わ、馬鹿。ダツト！？」

「…………ガリオ？」

うん。この言葉がこの世界にあるのか謎だけビ。この時の母さんの顔は幽鬼のようだつただけ言つておひつ。

合掌。

すっかり話が逸れてしまつたわけだけれど。

父さんが本来彼より弱いはずの母さんに打ち負かされる光景を見終わると、ようやく落ち着いて話が出来そうな雰囲気になつてきた。

「まず、父さんが気になつてることだけビ」

警戒心がまだ完全に抜けたわけではない」とは、父さんの引き結んだ脣からも見て取れた。

母さんはその隣で自分の腕と父さんの腕を組み合わせて不安そうに僕を見ていた。

「たぶん、僕の口調が変わつたから警戒してるんだよね」

前世の記憶が戻る前。

彼ら二人を呼ぶときは「おとうさん、おかあさん」と呼んでいた。しかもこんな風にしつかりとした口調で話したことはなかつたから、父さんがそれに警戒感を露わにしても何らおかしくない。

外から見れば、それこそ人が変わつた。別人になつたと言われるような状態だ。

たぶんそれで剣を取ろうとしたんだろう。  
もしものことを考えて。

### 「【魔物憑き】」

僕が呟いた言葉にびっくり、と母さんが反応する。父さんの眉が動いたのも僕の目はしつかりと捉えていた。

「かもしれないって思つたんだよね」

「……そうなれば、殺すしかないからな」

だろうと思った。

【魔物憑き】とは文字通り魔物に取り憑かれた人間のことを指す。この世界には幽霊のような肉体を持たない魔物も存在していて、武器は用を為さず、魔法でしか消滅させられない。

しかもその食料は人間や魔物の【生氣】。そしてそれを奪われた生き物は、例え一時生き延びようとも必ず死に至る。

そんな魔物が人間に憑くとなるとどうなるか、逸話は山ほどある。

例えば村一つ滅ぼされたとか、一国の王様がそれで殺されたとか、それで危うく戦争になりかけたとかだ。

子どもを脅かしたりする教訓とかにも使われる所以僕も他にいくつかは知っている。ちょっとトラウマになるくらいには。

ちなみに、取り憑かれた人間は見た目はみんなと同じだから、気付かれにくい。

ただ、人が変わったようになるので近しい人間なら妙だとは感じるそうだ。

父さんが僕に対して警戒感を持つた一番の理由はこれだろう。間違いなく。

「でも僕死んでないし」

心臓は動いているし、体も温かい。

【魔物憑き】になつた人間は真っ先に【生氣】を奪われて死者となるから、ここはしつかり否定しておかなければいけないところだ。

はい、と手を伸ばすと父さんがなにやら慎重に構えた。うん。警戒するのもわかるけどや。

「昨日思いつきり抱きしめておいてそれはないんじゃないの？」

「それこそ死にかけるくらいまでやられたのに今更だつてば。む…… そうだったか？」

「ああもつ、白々しいつ。

それでもまだ油断ならないと思つてこのかゆつくり差し出された。ごつごつした手。それを僕は思いきり力を入れて掴んだ。ほらあつたかい。

僕が睨むと難しい顔をされた。

そうだらうね。じゃあ、なんでだつて感じになるよね。

「僕がこうなつた理由、これから話すよ」

多分【魔物憑き】の方がまだ理解しやすい話だらうけど。ひとつひとつ丁寧に話してもいいけど、それだと時間がかかりすぎる。

わからないといひは聞こてもらえればいいわけだし、信じてもらえないときは……あ、どうしよう。

そこまで考えてなかつた。

「ダツト?」

急に考え込んだ僕の耳に母さんの不安げな声が届く。まいつたな。昨日からこんなのはばつかりだ。ちょっと嫌気がさす。家族なのに。

「ああ、うん。とつあえず聞いてもらつてそれからだね」

「後のことば後のこと。

僕はそつして口を開いた。

「僕はね。前世の記憶があるんだ」と

謝罪と決意（後書き）

10 / 8 少し修正かけました。

前世では「こととは違つ理の場所で生きていたこと。頭を打つて死んだらしいこと。

そしてまたこの世界で頭をぶつけたそれを思い出したこと。全てを話し終えて両親が取った行動は。

「はあ」

何故かため息だつた。しかもダブルで。  
え、何で？

そこでどうしてため息がでるの。しかもさも呆れたよつて。僕が意を決して話したつていうのに、この反応はどう取つていいのかこちらも困る。

しかも第一声は。

「なんだか、心配して損をした気分なのはなぜかしら」「あれだけ気を遣つて来た原因が「コレとはなあ」

……ナンデスカ。ソレ。

「え、と。父さん。母さん？」

なんとなく理由を聞くのが怖いけど、聞かないと多分話が進まない。

恐る恐る問い合わせる。

「今のは、わかつてて言つてる?」

自分の子供が実は別世界の人間の生まれ変わりでした。つていう結構ハードな話だったはずだけど。

一人は夫婦らしくお互に通じ合つた絶妙なコンビネーションで。

「そうね。正直なところ、まだ戸惑つているんだけど

「ああ。信じられんと思つところもないわけじゃない。だがなあ」「ねえ」

顔を見合させて、またため息を吐いた。

ねえ。ちょっと待つて。だから何なの、そのため息は。

そんな僕の心の声はどうやら顔に出ていたらしい。

母さんは自分の頬に手を当てて、父さんは肩を落としつつ、なん

とも言えない表情でこう言った。

「だって、ね。前世なんて言つからでつきり女性を巡つて命を懸けた決闘があったとか」

「戦場で華々しく散つたとかそういう話じゃないかと期待してたんだが」

「あれ？」

「ちょっと待つて。何ソレ、って。

「「雨の日に滑つて転んで頭打つたじやなあ（ねえ）」「

見事に揃つたハーモニー。これぞ夫婦の絆がなせる技か。  
イヤ、違う。激しく違う。

ソレ、なんか考えるトコ違わぬないですか？  
さつき僕が話したのはもつと重大な事だつたはずですが。

「「うちのナはそんに間抜けだつたのかと思つと……はあ」

いや、だから、つてまたため息吐いた上にハモつてゐる。  
すつごい秘密を暴露しました。つて気分だつたのに。心無し。  
言いたいことはわかるんだよ。すごく。

雨で、水たまりで、滑つて転んだのが原因なんて、そりや僕だつて呆れる。

そんな死に方が間抜けだつてことぐらい嫌とこうへりい承知して  
る。

でもさ、まさか僕が前世持ちだつたつていう事実より、死んだ原  
因の方に食いつくとは思わないし。

しかもその間抜けたを実の両親に面と向かって言われるのも結構凹む。

……気持ち悪がられるよりは、マシなんだけれど。

「とりあえず、お前の言いたいことはわかった

ちょっと泣きたくなつてきたといひで、落胆の表情を隠さずに父さんが声をかけてくる。

「まあ『魔物憑き』じゃないならそれでいい。実際は二十歳も過ぎてるとかも……その話しなら納得できなここともない。異世界から来たらしい」というのも、信じがたいが多分本当なんだろう」

「え？」

「お前、時々寝言で俺たちの知らない言葉を呟いてたからな。起きてるときもぼーっとしてる時とか話しかけたら使ってたる。俺が傭兵として旅をしていた時でもあんな言葉を使う人間はいなかつた」「え、僕そんなことしてたんだ？」記憶にないけど。

それは初耳。と目を丸くするとほん、と頭を撫でられた。

「多分無意識に、だつたんだろうが。記憶がなくても、ちゃんと心にはそれが残つてたんだな」「

父さんの言う通りかもしれない。

この世界で生まれてからの十年の間に感じていた違和感。

それが僕自身の前世。異世界のことだつたわけだから、無意識にそつちの言葉を使っても不思議じやない。

今だからわかることだけだ。

でもそうか日本語か。長らく使ってないし、使う予定もないだろうけど。でも寝言でも喋つてたつてことはもしかして使える?

思い立つたまゝに、口を開く。

『ぼくーが、使ててたの、てこーいう言葉だた?』

あ、意外とはつきり発音できた。

微妙におかしいけどそれは発音の仕方に慣れてないからだらう。

舌の使い方とか違うし、外国人が喋つてるみたいだ。

実際今はそんなんだけだ。

今言つたそれを今度はこちらの言葉で父さんに聞いてみる。

「うーん。まあ、そんな感じか」

寝言でしか聞いてないし、意味も意味もわからないからあまり自信がないらしい。

だけど、この世界で生きるなら使わない言語なわけだし、特にわからなくても問題はないは……「ぐうー」……す。

おつと、これは。

「 「 「あ」 「」

うつかり親子三人の声がハモつた。  
視線の中心にいるのは、僕でのお腹。

「……お腹空いた」

まあ、朝ご飯も食べずに話しこんでいればこうこうことも起るわな。

恥ずかしいけど。

「あらあらあら。大変。すぐ支度するわね。あ、ガリオ。今日は自警団の仕事は？」

「あー、一応休むかもしれないとは言つてあるが、ダットがこんな感じなら行つてよさそうだなあ」

あつという間に日常会話に立ち戻ってしまった。

「僕、手伝おうか？」

あまりにもいつも通り過ぎて思わず申し出てしまったが。

「「怪我人は大人しく寝る！」」

怒られてしまった。

そうだった。頭打つて記憶喪失になつてたんだった。

微妙に痛む後頭部を撫で、苦笑する。

両親が去り、すっかり静かになつた部屋の中。

「よかつた

ベッドに横になつた途端安堵のため息が出て、僕は口を開じた。

そのまま瞼まで瞑ってしまったのはさういふ愛敬である。

## 家族と安堵（後書き）

次は閑話（母視点）です。

わたしの息子のダットはちよつと他の子どもたちとは違っている。ひとことぐううと、ぱーっとしていることが多いおつとり系な子ども。人と喋ることが得意ではないけれど、それでも子ども同士で遊んでいるときはちゃんと喋るし笑いもする。

そんな子どもだ。

でも、ここまでなら普通の範疇に入るかもしない。わたしの言う他の子どもたちとの違いは別にある。

例えば、彼が一人でいる時。

ふとした瞬間に、中空を見上げて何かを呟く。すぐ側でそれを聞いたことはないけれど、唇の動きを見ればそれがわたしが知らない言葉だとこうのはすぐにわかった。

そして、そういう時のダットはとても子どもとは思えない切なげな表情を浮かべている。

ここではないどこかの事を語つていろいろ話す遠田からでも感じ取れた。

そんなとき、わたしあつに思つてしまつ。

いつか、この子がどこか遠くへ行つてしまつのではないか。と。

そんな恐怖が、いつもわたしの胸の奥底に渦巻いていた。

ダットが物心ついたときからそんな子どもだったから、わたしはいつもその姿を追つていた。

田が離せなくて、ダットが子どもではない田をする度に抱きしめるようになった。

ダットに友だちが出来たのは四歳を過ぎてしばらくしてからだ。

特異な子どもだったから、その辺りは不安だつたけれどダットが

自分からわたしに「友だちができた」と語ってくれた時にはとても嬉しかったのを覚えている。  
それから、だろうか。

ダットが一人で空を見上げる」とは減つた。

けれどそれが全部なくなることはなくて。

印象的だったのは、ダットの五歳の誕生日の翌日だった。

その日は大雨で、雷も鳴って家から出るには危険なため、ダットとふたりで自宅に籠もつていた。

ダットは意外と性格が据わっているらしく、雷を怖がらない。

むしろ興味があるようで、窓の前で光を放つ空を見上げていた。

「ダットは雷が好き?」

それは何気ない問いかけだった。

その後、わたしは後悔することになる。

ダットは振り返つてにこりと笑うと、まるで雷を思って出すよつこいつ言ったのだ。

「うん。 なつかしい」

この時のダットも、五歳の子どもとは思えないような顔をしていて、わたしがただ「やつ」と呴いて抱きしめていたのはこのときからだと思う。

ダットがわたしの子供だと云ふことを強く刻みつけるように抱きしめ続けた。

七歳を過ぎた頃からは恥ずかしいとすぐに逃げられてしまつよつになつたけれど。

夫であるガリオも、ダットの奇妙さを間近で知つていてわたくしの行為を咎めることはなかった。

むしろ、わたしど同じように積極的にダットと触れ合おうとして

い。

自警団の副団長をしているガリオは夜中近くに帰つてくることも珍しくない。けれどダットをとても愛していく、帰つてくると必ずダットの部屋に寝顔を見に行く。

そしてたまにダットが寝言で彼の知らない言葉を呟くのを何度も聞いているそうだ。

ガリオはわたしと結婚する前、旅の傭兵だった。いくつも国を渡つていろんな国の言葉を知つていて、ダットが寝言で呟くその言葉はどれにも当てはまらないとか。

一体どんな夢を見ているのか。

不思議に思つてそつとは言わず、何度かダットに夢のことを聞いてみたけれど覚えてないと首を振られた。

そして、十歳を迎えて事件は起についた。

家の中で、ダットとわたしは不注意からいつかりぶつかつてしまつたのだ。

その結果、ダットは後頭部を強打。

わたしはダットの体の上に馬乗り状態。

ダットの目は中空を見つめており、焦点が合つていらない状態だつたから慌ててしまつた。

「やだ、ちょっと。大丈夫?」

声をかけ、顔を近づけてのぞき込むとなぜか慌てて顔を逸らされた。

そして複雑そうな顔で。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からビckettで頂けませんでしょうか?」

やたらと一寧にお願いられる。

わたしはいつもとまったく違つて言葉遣いに戸惑つた。

「どうして敬語なの?」

その時はよもやあんな言葉を投げかけられるとは思つてもいなかつた。

「お姉さん、誰？」

頭が真っ白になつた。

そこから先はよく覚えていなければ、ダットをベッドに押し込んで、お医者さまを呼んで、更にガリオへ伝言を頼んで。

その果ては。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけど」

息子の口から飛び出したのは知らない名前、あり得ない年齢、そして聞いたこともない土地の名称。

頭が真っ白になつて、わたしは泣いた。

お医者さまの診断は記憶喪失。

それにもしても、奇妙な名前を名乗っていたようだつたけれど。お医者さまにもそれはわからないと言われた。

でも、わたしやガリオのことはすっかり忘れてしまつているし、自分の名前や出身地のことも全部聞いたことのない別の名称になつていたので、そうなると記憶喪失だと診断するしかないとのこと。正直、母親なのによく知らない人間扱いされるのは辛い。

しかも、自警団から帰ってきたガリオにも同じような反応をするのだ。

まるで別人になつたみたいだつた。

本当に、どうしていいかわからない。

頭に包帯を巻いた痛々しい姿。そして記憶の喪失。

涙を堪えることなど出来ずに、泣いた。

お医者さまは、頭を打つて一時的に混乱しているだけかもしけないと何日か様子を見るように言つて帰つていつた。

こつ思い出すかもわからないけれど、出来るだけいつも通りの生活。

お医者さまの指示従おつ、とわたしもガリオもその夜誓つた。

けれど、翌日。事態は急展開を迎える。

そう。思いも寄らない方向に。

朝起きて、夫婦でダットの部屋に入った途端いきなり頭を下げられ謝られた。

「「めんなさい」

なぜそんな風になるのかわからなくて、ガリオと顔を見合わせる。「だ、ダット。どうして謝るの？」

「そうだぞ。なんていきなり」

なんだか嫌な予感して、緩くなつた涙腺から滴が落ちかける。するとダットが慌てて。

「違うよ。その、ちゃんと想い出したんだ。僕が父さんと母さんの子供だつてこと。だから」「え？」

それは思つてもみない喜ぶべきことで「心配かけて」「めんなさい」と再び頭を下げるダットが信じられなくて、思わず問いを発していた。

「え、あ。思い、出したの？」

「じゃあ……？」

「うん。記憶喪失はおしまい

きつぱりと断言されたその言葉にガリオと一人、顔を見合わせる。記憶喪失の終わり。

それはまさしくわたしが望んでいたダットが戻ってきたということがわかった。

わたしは喜びから今度こそ涙がこぼれ落ちさせた。  
これで全部元通りなのだとと思うと体が自然に動いた。ダットを抱きしめたくて、行動に移そうとしたその時。

「待て。キーラ」

ガリオがわたしの前に立ちふさがった。

「喜ぶのはまだ早い。ちょっとは疑え」

「ガリオ？」

彼が一体何を言っているのかわからずに、わたしはただガリオを見上げるしかなかった。

「……見た目に騙されるなよ。どうもおかしい」

そう言うとわたしの視界から、ダットを隠してしまった。

なに？ どういうことなの？

ガリオは冗談でこういうことをする人ではない。

それがわかるから余計に混乱した。

「剣を持つてくるべきだったか」

「ちょっと！？」

「ガリオ！」

物々しい雰囲気を纏い始めた夫をわたしは信じられない思いで見つめた。

何が起こっているのか理解できない。ただ、夫が子どもに剣を向けようとしたことだけはわかる。

その口調は冗談でなく、本気だ。

「父さん、僕魔物じゃないよ」

「ふん。証明が出来ると？」

状況を飲み込めないわたし一人を置いて、一人は向き合い言葉を交わす。それも最も最悪な方向に、だ。

魔物。

この世界で最も危険で最悪な存在。

どうしてここで魔物なんて名称がでるのだろう。

待つて。ガリオ。それはどういうこと？

答えを知っているのに、それを出す「」ことが出来ないのはそれを考  
えたくないから。

そんな殺伐とした空間に風を入れたのはダットだった。

「十日くらい前だけ」

笑いを含んだ明るい声が部屋を巡る。

「旅の傭兵の色っぽいお姉さんにチューされてたよね。確か」

「え……？」

空気が変わった。

ダットが見上げているのはガリオで、ガリオの気配が戸惑つたも  
のに変化した。

「お、おい待て」

ガリオが慌てて首を振る。

わたしはふと、ガリオを見上げる。顔色がおかしい。  
何かおかしい。

たつた今ダットの口からもたらされた情報にわたしは疑問を覚え  
た。

旅の傭兵の色っぽいお姉さん？ しかもチュー。

何ソレ。わたし知らないんだけど。

「僕が見てるの知って、慌てて離れてたけど。母さんに内緒だつて  
飴買ってくれなかつたつけ？」

「わ、馬鹿。ダット！？」

ガリオの態度が明らかにおかしい。

「…………ガリオ？」

「どういづことかしら。説明が欲しいわ。

旅の傭兵の色っぽいお姉さんと何を話してたのか教えて？

そんな気持ちを込めてガリオを見上げたら、泣く子も黙る厳つい

大男が面白いくらい顔面蒼白になっていた。

ええ。もちろんしつかり説明を聞かせてもらいました。

昔取つた杵柄で助言したらお礼にキスされたとか。

それをダットが目撃して、内緒にするようお願いした?

ふふふふ。

素直に言えば少し嫉妬するくらいで済んだのに、息子に秘密にするようお願いするなんて何かやましいことがあつたとしか思えない。当然その辺りもきつちり説明させました。

話が思い切り脱線したことに気が付いたのは、ガリオが愛玩用の獣のように部屋の隅で縮み上がってから。

そしてこの件がもしかしたらダットがわたしたちを気遣つて出した話題だったのかも知れないと思つたのは、全ての話を聞き終わつてからだつた。

その後も話は続いた。

ガリオはどうやらダットを【魔物憑き】ではないかと疑つてかかつていたようで、わたしはそれを聞いた途端背筋が凍つた。

【魔物憑き】の逸話は搜せばいくらでも出でくる悲劇の話だ。

そうなつた時点で憑かれた人間は死ぬ。

そしてその体は【精氣】を求める魔物によつて操られ、その身を滅ぼされるまで彷徨い続ける。

ダットの記憶喪失がもしその結果だつたら?

それを考へると肝が冷えたが、ガリオが確認して違うと知れた。よかつた、と胸をなで下ろしたのも束の間。

ダットの口から漏れた言葉の数々は一概には信じがたいものばかりだった。

「僕はね。前世の記憶があるんだ」

「一体何を言つていいのか最初はまったくわからなかつた。  
多分、ガリオも同じだったはず。」

「前世？」

「あ、そういうの。こっちではわかるのかな」

「それは生まれ変わり、というやつか？ 人は死ぬと、ある場所へ招かれ、そしてまた人となる。確かにどこかの国でそんな概念があると昔聞いた覚えがある」

「流石父さん。うん。そういう認識で間違いないよ  
父と息子で話が繋がつて流れていく。」

その話ならわたしも知つていて。以前ガリオがわたしにも話してくれたことのある話題だ。でも残念ながらこの国にはそういう概念は存在しない。

少なくとも死者は死者であり甦ることはない。とされている。  
死んだら終わり。

これが常識で、例外があるとすればきちんと埋葬されなかつた死体の主は実態のない魔物になるという程度のもの。

だから、ガリオからその話を聞かされてもピンと来なかつたのを覚えている。

それなのに、今ここで息子のダットが自分はソレだと言つ。

「そう簡単には信じられないとは思うけど。僕は昔【橋本誠也】といふ名前の人間だった。年だって二十歳になつたばかりで、勉強してて将来は教師になるつもりだった。でも、死んでしまって。気が付いたら僕は父さんと母さんの子どもだつたんだ」

わたしはその話にただ口を開けているしか出来なかつたのだけれど。ガリオはちゃんとダットの話を聞いてくれていた。

「つまり、お前はその前世の記憶がある、と？」

「うん。そう。僕は【ダット】以外にもう一つ【橋本誠也】つてい

う記憶を持つてる。最もそつちの方は完全に過去の話で、今はちゃんと父さんと母さんの息子の【ダット】だよ。前世の記憶戻っちゃつたからしゃべり方はこんなだけど

あ、と思わず声に出す。

そこでやつとわたしはダットが今までのダットではないところに気が付くことが出来た。

本当ならもつと早く気付いてもいいはずだったのに。

いや、本当は気付いていた。

今ダットの話の中に出てきた名前は、ダットが記憶喪失になつた直後に出でてきた名前だ。

困惑して、混乱して、泣いてばかりだつたために判断力が鈍つていたのだろう。

ようやく繋がった。

冷静になってよくよく見てみれば、以前と違う表情なのはすぐに気付けたはずなのに。

大人のように見えて子どものような顔にもなる。不思議な雰囲気がダットの周囲には満ちていた。

それは以前からダットがしていた表情にもよく似ていて、わたしはそうかと頷いた。

ダットが他の子どもたちと違つっていた理由はこれだつたのだ。

「まさかこんな風に記憶が戻るとは思つてなかつた」

少しだけ目を伏せて微笑むその顔は、大人の顔。

ダットの言つことが全て真実なら、一体彼はどんな人生を送つてきたのだろう。そしてなぜ死んだのだろう。

そう考えたら、聞かずにはいられなかつた。

「以前いたところは、どんなところだったの？」

「あ、多分こことは全く違う世界かな」

ダットは少し懐かしそうに語り出した。

「全く違う世界？」

「そう。魔法なんて存在しないし、魔物もない。そんな世界だつ

たよ

なんてことだらう。

全く予想していなかつた言葉が飛び出して、わたしもガリオも声が出せなかつた。

魔法も魔物もわたしたちひとつてはとても身近で危険なものだ。  
それが、ない。

だとしたらそこは安全に暮らせるいい場所だといつてにならな  
いだらうか。

そんなところにいたのに、ダットは二十歳という若さで死んだと  
言った。

一体どんな状況だつたのだらう。

病気だつたのか、それともそんな平和な世界でも殺伐とした殺し  
合いが存在していてそれに参加していたのか。考えればきりがない。  
ダットの話は続く。

「代わりに機械つていう、魔法の代わりみたいな便利なものがあつ  
たんだ。人間の手助けをしてくれる道具つてところかな。そういう  
のを作る専門職もあつたりして」

それは道具を作る職人さんみたいなものかしい。

そう尋ねると似たようなものだと頷かれた。

「でも、さつきも言つたけど僕はその中で教師になりたくて勉強し  
てたんだ。だけど多分、運が悪かつたんだと思う。学費を稼ぐため  
にバイトしてたんだけど。帰りが大雨で、雷も凄く鳴つてた。傘を  
差しても全身が濡れるくらいに降つてたから、雨宿りして帰ろうと  
思つて道を歩いてたら、転けちゃつて」

ははは、と恥ずかしそうにダットは笑う。

そして全く持つてわたしたちが思いも寄らない言葉を言い放つた。

「多分、その時頭を打つて死んだんだと思つんだ」

それは完全に、予想の斜め上からの言葉だつた。

頭を打つて死んだ？

わたしは呆然とし、ガリオもまた呆気にとられた顔で固まっていた。

「けれどダットはそれには気が付いていない様子で。

「だから結局教師にはなれなかつたんだけど。次に気が付いたらこの姿だつたんだ。頭を打つて死んだのに、今度は頭を打つて記憶が戻るなんて。そこは偶然なんだろうとは思うけどちょっと驚いた」

それはそうかもしれないけれど。

なんだか神妙に聞いていたわたしたちが馬鹿に思えてきて、少し頭が痛くなつた。

まさか、死んだ理由がそんなことだったなんて。

「「はあ」」

示し合わせたかのように、ガリオとわたしのため息がかち合ひ。なんてことだらう。

そこでようやくダットは戸惑つたようにわたしたちを交互に見た。これはわかつていらない態度に違ひない。

その様子が年相応の子どもに見えるので、それに少し安心しつつも。

「なんだか、心配して損をした気分なのはなぜかしら」

「あれだけ気を遣つて来た原因がコレとはなあ」

遠くを眺め、何かに思いをはせる切ない姿。

アレを見て散々やきもきしていたといふのに、死んだといふ理由が『転けて頭を打つたら』なんて拍子抜けもいいところだ。

「え、と。父さん。母さん？」

恐る恐る、といった感じにダットが声をかけてくる。

まるで、ついさっき見たばかりのガリオのようなその態度にわたしは思わず「流石は父子」と少しばかり見当外れな感想をつけた。

「今のは、わかつてて言つてる?」

ダットの言いたいことはわかる。これでも母親だもの。例え「前世の記憶が戻りました」なんてことがあっても息子の不安げな表情は以前とそう変わらない。

ダットが打ち明けた話の内容だけ、決して軽いものではないことも頭ではわかってる。

でも。

「そうね。正直などいふ、まだ戸惑っているんだけど」

「ああ。信じられんと思つところもないわけじゃない。だがなあ」

「ねえ」

その最も重要な部分がうつかり『転けて頭を打った』では格好がつかない。

ガリオと顔を見合わせ、お互いに頷き合ひ。

「だつて、ね。前世なんて言うからてつきり女性を巡つて命を懸けた決闘があつたとか」

「戦場で華々しく散つたとかそういう話じやないかと期待してたんだが」

「「雨の日に滑つて転んで頭打つたじゃなあ（ねえ）」」

語尾は違つたけど、見事にわたしたちのぼやきは重なつた。  
そしてそれは続く。

「「うちの子はそんなに間抜けだったのかと思つと……はあ」

もちろん最後のため息まで一緒。

ダットはなんだか落ち込んでいる様子だつたけれど、仕方ないわよね。これがわたしたちが感じた正直な感想なんだから。

あれだけ不安で仕方がなかつたのに、今はなんだかおかしくて仕方ない。

そこにダットのお腹の無視が鳴つて、自然と笑みが浮かんだ。

そうしてわたしたちはダットの部屋を出た。

ダットの部屋は二階。

わたしは朝食の準備のため、一階の台所へ。ガリオも自警団用の装備は一階に用意してあるので一緒に階段を下る。

けれど、和やかに済ませられたのはここまでだった。

いつもの生活が戻ってきたような気がしていたけれど、あることに気が付いたのだ。

にわかには信じがたい話を聞いて、でも嘘とは思えなくて、その中身にちょっと拍子抜けして。

それを真実と認めるなら、多分わたしたちには覚悟が必要になる。

「ねえ。ガリオ」

「うん？」

「大丈夫、よね。あの子」

明らかに他の人間とは違う。その特殊さを背負つてわたしたちの息子はこれからこの世界で生きて行かなくてはならない。

ダットはただでさえ他の子どもたちとは一線を画した雰囲気を持つていてる子どもだった。

他の子どもたちもそれは察していたようで、ダットの友人と言える存在は現在でもたった一人だけ。

それも子どもらしい部分があつたからこそその関係が保てていたわけだ。「記憶を取り戻した」というあの状態は、その一人の友人すら遠ざけてしまうかもしれない。

けれど、それだけならまだいい。

ガリオが疑つたように『魔物憑き』だと思われる可能性もある。もしそう呼ばれたとき、わたしはちゃんとダットを守れるだろうか。

以前のダットに対してでさえ抱きしめる以外のことは出来なかつたのに、実際にそうなつてしまつたとき、わたしにはそう出来る自信がなかつた。

「……キーラ。オレたちが出来ることは今までと同じだ。あの子の

側で、あの子を支える。それだけぞ」

「でも」

「大丈夫だ。あの子だってわかっている。それに、オレたちがその理解者になればあの子の負担はきっと軽くしてやれるさ。そう信じよう」

ガリオの鍛えられた大きな手が伸びて、頬に触れる。

「大丈夫だ」

髪に覆われた厳ついと評される顔に笑みが浮かぶ。そのままわたしの顔の位置にガリオの瞳が降りてきて、わたしは静かに目を閉じた。

どうか、ダットに祝福がありますように。

唇に愛しいその人を感じて、わたしはただそう願った。

## 魔法の勉強をしてみた、の巻

両親に自分の秘密を暴露した翌日。

最低でもあと三日間は安静に。

往診にやつてきた医者はそう言つて去つていった。

頭の包帯は……まだ取っちゃ駄目だとか。

まあ、痛みもまだあるし、大きなこぶがまだまだ存在感を露わにしている状態だつたりするから仕方ないかもしれない。

それに下手に動くと母さんに泣かれるし。

一度、寝てばかりじや体が鈍ると言つたら盛大に怒られた。

お願いだから安静に、と母さんに涙を浮かべられたら逆らえない。

そんな僕に出来ることはベッドの上で大人しく本を読むことぐらいで、だつたらと手にしたのは記憶喪失中に一度目を通した【魔法基礎読本】だった。

魔法に関する基礎的な知識や、初步的な魔法が、あくまでも子ども向けの挿絵つきで書かれている代物だ。

あの時は適当に読み物として貞を捲つただけで、まさか覚えられるとは思わなかつた。

だからちょっと感慨深くなるのも当然で。

もし僕がゲーム一気質だつたりしたならばきっと狂喜乱舞していたと思う。

ま、生憎そこまでもないんだけど。

苦笑いを浮かべつつ、興味半分で表紙を開く。

一度は目を通しているので目次を飛ばし、早速【魔法を使うのに必要な物】と書いてある頁を開いた。

そこには魔法を使うのに必要とされるものが絵付きで二三つ書かれている。

一つ目は【人の身に宿る魔力】。

これは空氣中に存在する【魔素】と呼ばれる目に見えない粒子が人間の体内に入ることによって、発生するものらしい。

まずそれありき、なので魔法を使おうとする者が最初にするのはこの魔素を体内に取り込む練習だ。

が、ここで要注意。

魔法を使用するためにはそのための適正が必要で、これがないと最初の一歩も踏み出せない。

僕が住むカーライルという町では十歳になると無償でその判定をしてもらえることになっていて、その判定で適正があると判断されれば【魔法基礎読本】が自動的に貸し出され、魔法の練習をすることが許される。

つまり今この本を読んでいる僕には魔法使いになる適正があるってわけだ。

二つ目。

次に必要とされるのは魔力とは切っても切れない関係にある【魔素】と呼ばれるもの。

これに関しては前述した通りで【魔力の元】として知られている。空氣中に大量に存在しているので呼吸するだけで少量ずつ体内に取り込まれ、適正がある人間ならば自動的に魔力に変換されるそうだ。

ちなみに適正がない人間の場合は、魔素は魔素のまま体外に排出されるとか。

これはうちの両親が該当する。  
そして三つ目。

最後の一つは【魔導具】。

魔素が結晶化した石【魔鉱石】に制御を示す【紋章】を刻みつけ加工したもので、魔法の方向性や威力を定めることを容易にし、魔法が使いやすくなる魔法のための補助器具だ。

ただし。

あくまでもこれは補助器具であり、実は【魔導具】がなくても魔法は発動する。

じゃあ、どうして【魔導具】が必要、とかれているのかといつと。

魔法の成功率を上げ、魔法の失敗や暴走、暴発を防ぐため。

これに尽きる。

ゲームだとカーソルで設定してあつさり魔法は発動するけれど、現実はそうはいかないみたいだ。

使う魔法に込める魔力を決め、方向性を定め、そして制御する。この工程を経て、更に必要な【呪文】を加えることで魔法というものは形を為す。

だからそれらを愈ると魔法そのものが不安定なものとなり、発動しない場合もあるが時に暴走や暴発という結果にも繋がる。とのこと。

特に魔法を覚えたての初心者は危険で、うっかり魔法のさじ加減を間違えたために危うく死にかけた。なんて話もあるらしい。

【魔導具】はそれを防ぐためにあると言つても過言ぢゃない。

まあ、魔法使つて大怪我なんて洒落にならないから「【魔導具】なんて必要ない」って言つような強者はいないと思うけど。多分。僕もそんなのは「めんだから、【魔導具】はちゃんと持つている。」といつか、この【魔法基礎読本】を貸し出された時点で両親が首飾りの形のものを買ってくれた。

今のところまだ使用する予定はないので、勉強机の引き出しの中にしまっている。

「ダット。いい?」

母さんの僕を呼ぶ声と扉を叩く音が重なる。

「なに、母さん」

本を開いたまま返事をすると、扉が開いて母さんが少し困ったような顔を覗かせた。

「ライナちゃんとエイリクスくんがお見舞いに来てくれるけど。  
どうする？」

それは【ダット】の幼馴染み兼友人の名で。

「あー」

母さんの表情は曇りがちだ。

理由もわかる。

僕が前世を思い出しちゃつてるから、引き合わせるのに不安があるんだろうなあ。

その心配も当然のことだ。

僕はもう前の僕じゃない。

だから、以前の僕を知る人はいきなり変わってしまった僕に戸惑うだろうし、下手をしたら父さんが最初に感じたように【魔物憑き】だと怖がられるかもしれない。

だったら前の僕のように振る舞えればいいとも思うけど、それだとどこかでボロが出て結局は駄目になりそうな予感がある。

そうやって相手を混乱させるより、最初から堂々としていた方が僕も気が楽になるというものだ。

流石に父さんや母さんに話したような内容をそのまま言つわけにはいかないから、多少ごまかしたりはすると思うけど。

「まだ具合が悪いから、って言つて帰つてもらひ?」

「ううん。それはいいよ。会う

「でも……」

「どうせ、このままつと会わないわけにもいかないでしょ。適当に合わせてこまかすよ。だから平気」

賽は投げられた。

なんて格好つけても仕方ないんだけど、気持ち的にはそんな感じだ。

「心配してくれてありがとう」

お礼を言つと「無理しないでね」と抱きしめられた。

「うん」

ふわりと薫る花のような匂いが、心を落ち着かせてくれる。

「じゃあ、行くわね」

待ち人がいるからか、母さんの抱擁はすぐに終わった。

静かに扉が閉まり、僕は一つ深呼吸する。

あとはもうなるようになれ、だ。

騒がしくなるだろうこの部屋の近い未来。それを思つて僕は顔を

引き締めた。

「よひ、ダット。来てやつたぞ！」

格好つけ氣味の少年の声と共にその扉は勢いよく開かれた。  
天井へ向けて真つ直ぐ向いた赤い髪が跳ねる。

四方を白っぽい煉瓦に囲まれた室内が一気に鮮やかさを増し、続  
けてこれまた華やかな銀髪の癖つ毛の束が二つ。色を添えた。

「ちよつ。このばかエリク！ ダットは病人なんだから、静かにし  
ないとだめなのよ！」

赤と銀。

その二つは賑やかに僕の元へやつてきた。  
更にその後ろには金色が控えていて、彼女は苦笑すると「あまり  
騒がないようにね」と注意だけして去つていった。

ごめん、母さん。この一人にそれは無理。

「ダット。あたま打つてきおくそーしつとか聞いたけどヘイキか？」  
母さんがいなくなつた途端、赤い髪のエイリクス、通称エリクが  
ベッドの上に乗り上げてきた。しかも自分で聞いておいて返事も聞  
かないうちに。

「お、ホータイまいてんの？ どこ打つたつて？」

更に質問を重ねてくるので落ち着かない。

それを咎めるのは銀の髪の少女。ライナの役目。

「ちよつとエリク。病人のベッドに登らないの！ ダットがゆつく  
り休めないでしょ」

エリクの襟首を掴むとそのまま引っ張り、床に引きずり落とす。

二人は同じくらいの体格なので、難なくそれは成功した。

「いでつ

鈍い音と共に、エリクがお尻から床に落ちる。

一応マットを敷いてるけどその下は石だから、痛いだろ？なあ。

「な、なにすんだよ。」のぼーりょく女！

お尻をさすりながらエリクがライナを睨みつける。

「あんたがダットのベッドに座るからでしょ。ダットは病人。ベッドの上で騒ぐなら帰んなさい」

ぎるり、とライナもまた目を細くする。

いつも通りの展開。

僕は、僕を放り出して睨み合ひを始めてしまった二人を見てこいつりため息を吐く。

どうしてかこの二人、非常に仲が悪い。

顔を合わせると何かにつけて言い合ひになる言ひなれば、犬猿の仲。

だつたら一緒にいなければいいのだけれど、気がついたら一緒にいる。

そしてひたすらこれの繰り返し。

「別にいいだろ。それぐらい」

「よくない！ あんたつてばいつもそうやってダットを振り回してるじゃない」

「あー？ おまえだつてそーだろ。ダットがおとなしいからってあねき風吹かせてさあ。だからダットがつよくなれねーんだよ！」

「はあ？ なに言つてんのよ。ダットはエリクみたいにガキ大将じやないの。あんたみたいになれるわけないでしょ」

「だからつて女に守られるのがふつーじゃねえだろつ。だーかーら、オレがきたえてやろううつとしてるんじやん」

「あんたの鍛えるは危ないのばつかでしょ。ダットにケガさせる気！？」

「ケガぐらいどーだつていいつての。父ちゃんが子どものつちせそれが男の勲章だつて言つてたぞ」

「それはあんたの家の場合でしょ。ダットはねえ、あんたみたいに

丈夫じゃないんだから！」

僕が口を挟む間もない。

「だから、丈夫になるためにいつもさそつてやってんだ。男がひょろひょろじやカツコつかねーだろ」

「あのね。男がみんなあんたみたいな人間なわけないじゃない。ダットはキーラおばさんに似て細いの。センサイなんだって、うちのお母さんが言つてたわ。だから」

「は？　だからなんなわけ。おまえこそ女のくせにいつも人をボコボコなぐりやがつて」

「なつ。それはあんたがいつも失礼なこと言つからでしょ！」

「バカ言つなつ。ホントのこと言つてるだけだろーが！」

終わりそうないな。この口喧嘩。

根つこのとこ原因が僕なだけに、僕が止めるのが筋なんだろうけど。下手に割り込むのもキケンな気がするんだよね。だからって放置しておくるのもその後が怖いんだけど。

ほら、だつてもう一人とも握り拳作つてるし。

今にもお互い飛びかかりそうな雰囲気……

「それが失礼だつて言つてるのよ！」

思つた側からライナの腕が飛び跳ねた。

あ、ヤバイ。実力行使

が、救いの主はいるものである。

ノックもなしに部屋の扉が勢いよく開き。

「ライナちゃん！　エイリクスくん！」

エリクの脳天にライナの拳が打ち付けられるはずだつた所に、鋭く切り込んできたのはウチのお母さま。

思わずエリクもライナもそして僕も、開け放たれた扉の向こう側を凝視した。

その目を見て、僕の脳裏を過ぎたのは【鬼】といつも這樣。

あー、なんかヤバイ。目が据わってる。

いつもここにこしてゐるか、泣きそうにしてるかどつちかの印象が  
強いけど、実は一家最強の看板を背負つのはこの人だ。

力自慢で厳つい顔の父でさえ、簡単に尻に敷いてしまう。  
今の彼女の顔は、父を尻に敷く時に見せるものに近い。

そう。先日の時のような、である。

「……あ。キーラ、おば、さん？」

ライナが腕を振り上げたまま固まり、エリクもなんだか扉の方向  
を振り向いたまま静止。

多分だけど、普段と違つ母さんに驚いているんだと思つ。

「ふふふ。ライナちゃん。エイリクスくん」

にこ、と母さんが笑う。

ただし田は笑つてないけど。

ここにエフェクトなんてものがあつたら、きっと母さんの背後か  
らは黒い何かが出ていたに違いない。

それぐらいに怖い。怖すぎる。

母さんの視線が向けられていらない息子の僕から見ても迫力ありすぎ  
ぎだった。

「わたし、ちつきなんて言つたかしら？」

びくつ、と一人の肩が震える。

「ダットは今、ケガをしていて安静にしていなくちゃダメなのよ？  
だから……」

母さんが一步、部屋の中に踏み入つた瞬間だった。  
みしり。

僕は確かに床板が軋む音を聞いた。

それはまるで死刑宣告の前触れのようで。

「「「」」」めんなさい……」

..... そうなるよな。

正義（？）の女神さまに少年少女は平伏するのでした。

## あらためまして幼馴染み

嵐が去った。

いや、まだ幾分は残っているけど、少なくとも直前よりはずっとマシな状態だと思う。

最初に来た時よりも幾分縮んだのではないかと思える赤と銀の二人は、母さんが用意したイスに大人しく座っていた。

居心地が悪そうに見えるのは多分母さんのせいだ。

母さんが部屋を出て行ってから、ずっと落ち着かない様子でちらちらと扉の方向を横目で見てている。また騒いだら即、あの状態の母さんが出てくるとも思つていいんだろう。

「え、ど。一人とも？」

だんまりが続いたので、僕の方から話しかけると。

「お、おう！」

「な、なに？」

おっかなびっくりで返事をされた。

……トラウマになつてなきゃこいいけど。

そんなことを考えつつ、僕は改めて一人に話しかける。

「そんなに怯えなくても、普通に話をするだけなら母さんも怒らないよ？」

「けど、な」

やはり気になるようで、エリクがまた扉に視線を送る。

「どうしたの？ いつもならこいつ、だからなんだ。って顔なのに」

「ばつ。おまえ。おばさん相当怒つてじやん。父ちゃんにしぼられるよか」えーよ

「やうよつ。キーラおばさんがあんなに怖いなんてはじめてだわつ

エリクが焦つた表情で、ライナもまたそれに準じた様子で声を出

す。

「うーん。確かにそうだけど、静かにしてれば平気じゃないかな」  
さつきのは完全に行きすぎていたと判断されたために起きたこと  
だから、普通にしていればあとは何も言われないはず。

なんだけど。

「ごめんね、ダット。このバカのせいで騒いだりしたから」

「ああ？ 誰がバカだつて？」

何かとかみ合わない二人が一緒にいる以上それは無理かもしけな  
い。

エリクの目が鋭くなり、それに合わせてライナの目もまた細くな  
る。既に一人の瞳には剣呑さが見え隠れしており、一触即発の状態  
と言えた。

まったく。せっかく消えた火をまた付けるなんて。

流石にもう一度あれをやると今度こそ母は【鬼】と化し、実力行  
使に出るだろう。

そうなったとき、果たしてこの一人が再起できるかどうか疑問だ。

「あー、もうつ。そこまで！」

呆れと諦めの感情を絡めたため息が、言葉と同時に飛び出していく。

「エリクもライナも、僕そっちのけで喧嘩しない。そもそも目的  
からズレすぎだろ」

一人が目を丸くして僕を見た。

多分いつもだつたらしない言動に驚いているんだろうけど、まづ  
は喧嘩の再発は防ぐのが優先事項だ。

「ここには僕しかいないからいいけど、もし病院とかだったらさつ  
きので追い出されてるよ。もう少し時と場合を考えて行動できない  
？」

そもそもなんでそんな仲が悪いのに一緒に見舞いに行くのか、  
そこがわからない。

母さんじゃないけど、呆れたくなるというのだ。

喧嘩をするために僕の来たのではないと信じたいが……  
そんな二人を交互に睨むように見れば。

「ダット……？」

「おまえ？」

共に奇妙なモノを見たと言わんばかりの顔で硬直していた。  
うん。まあそうだろうね。

以前の【ダット（僕）】はこんな時オロオロと一人を見るのが精一杯で、一人が自然と喧嘩をやめるまでドキドキしながら待つてるのが常だった。

人見知りも激しくて、人の顔を見るのも苦手で。

そんな内向的な性格の代表みたいな人間が、いきなり喧嘩に割つて入つて説教までし始めれば驚くのも当然だ。

「どうしよう。ダットが変」

どこか青ざめたライナの独白が耳に届く。

「ちょっと、まさかエリクのせい？」

頭を抱えるライナに、エリクが「じょうだんじやない」と応じた。

二人は顔を付き合わせて小声で口論し始める。

「なんでもまたオレのせいになんだよ。おまえのせいじやねーの？」

「ちょ、バカ言わないでよ。そんなわけないじゃない」

「じゃ、頭打つたせいだろ。きおくそーしつらしいし。それでおかしくなったんじやね？」

ちらりと僕の方に寄せられる視線が二つ。

色々と勝手に想像しているだろうことが、その様子からも見て取れる。

「でも、だからっておかしいわよ。ダットよ。あのダットがよ。あんなしゃべり方するなんて絶対に変」

「あー、まあ そうかもだけどよ。前に父ちゃんがきおくそーしつでせーかく変わつたりすることもあるって言つてたぞ」

「でも変でしょ。あんな別人みたいなしゃべり方つ。どう考えたつてダットじゃないわ」

君たち。全部聞えてるんですけど？

「二人とも」

声をかけたらびくつ、と一人が肩を震わせた。ゆっくりと一つの顔が同時に僕の方を向く。

何か見てはいけないものを見てしまったという雰囲気に、僕は再びため息をついた。

「言いたい放題してるけど、僕の話を聞く気ある？」

「え」

「あ」

なんとも間抜けな顔で固まる一人。

「簡単に、だけど説明するよ。僕の性格がどうして変わったのか知りたいんでしょ」

この二人相手ならまどろっこしく考えるよりもはっきり喋った方が伝わりやすい。

ただ、やはり前世うんぬんは伏せるのは決定だ。

完全におかしい人に見られるだろうし、説明してもうまく伝わるかわからない。

父さんや母さんに話せたのは、ごまかすのは難しいっていうのももちろんあつたんだけど、一番の理由は彼らが大人で両親だったから。

でも今日の前にいるのは【ダット】よりも一つ、二つ年上なだけの少年少女なわけで、彼らに両親にしたのと同じ説明をしたところで理解されるかどうか……

ひとまずは彼らが納得できるような言い訳があれば、それで大丈夫だろ？

僕の提案を受けたエリクとライナが顔を見合わせるところにちなく頷いた。

それを確認すると僕は当たり障りのないように言葉を選んで形にする。

「僕の性格が変わった理由はエリクが言つてた通り、かな」

「それって、きおくそーしつになつたからつてことか？」

「多分ね。でも、記憶喪失はもうよくなつたし、記憶の混乱もないよ。ただ、記憶喪失だったときの性格がそのまま残っちゃつたみたいなんだ」

「……そんなこと、あるの？」

ライナが真っ直ぐ疑惑の眼を僕に向ける。

彼女は頭がいいから、下手な言い訳では説得できない。けれど、強引に押し通すことが出来れば多少の疑問は残つてもなんとかなるはず。

「僕にもそのあたりのことはよくわからない。気がついたらこうだつたしね。それ以外に説明のしようがないんだ。僕だつてまさかこんなことになるとは思わなかつたし」

そもそも生まれ変わりなんでものが実際に起つことは予想外だし、予定外だ。

しかも異世界なんていう全く別の次元に来てしまつなんて、僕にも理解不能な出来事でしかない。

だから何かを見極めようといつ表情のライナの視線は非常に困る。「あやしい」

「おま……ライナ。ダットがそつ言つてんだからそつなんだろ。別にいいじゃん」

一方のエリクはそんなライナを面倒くさそうに見て肩を落とす。「ダットはダットだろ」

「そうかもしけないけど」

納得いかない顔で、僕を見たライナは「もついい」とそっぽを向いた。

その後は僕を窺うように見ては目を逸らし、会話にもあまり加わらず。おかげで追い出されるような騒ぎはなかつたのだけれど。

面倒なことになりそうな予感に、僕はこつそりため息をついた。

## 魔法の道は一日にしてならぬ！

実のところ、この世界での文字普及率はあまり高くない。らしい。小さな村では村長以外誰も文字の読み書きが出来ないなんてことも珍しくないし、下手をすると誰も文字を知らないという日本では考えられないような村もあるみたいだ。

とはいって、村や町の規模が大きくなればそもそも言つていられない。大きな町では文字看板もあるし、無償で文字を教えて貰える場所もいくつかは存在していて、必要ならそこで学び、それ以上のことを学びたいなら国や領主が運営する学校へ行くというの主流とのこと。それには一般庶民が目の飛び出るような金銭が関わってくるから、余程のことがない限り日常生活を送れる程度の文字や簡単な計算を学んで終わり、といつ感じらしきけど。

ただ、やはりそれは地域事情によって若干異なるようで。カーライルはこの近隣を治める領主の方針もあって、識字率が他の町より高い。

領主が独自に無償の学校を開設していて、誰でも自由に文字や学問を学べるようにしているからだ。

理由は色々とあるようだけれど、一番の理由は魔法。

カーライルの西方には未だ人間が踏み入り難い魔物の領域が存在していて、町の外壁を一步出ればそこはもう危険地帯。町の周辺にはそれほど危険な魔物の縄張りはないが、西方にある山脈に近づけば近づくほど危険度は増していく。一応は境界線として砦が設けられているが、あくまでも境界線だ。完全に魔物の侵入を防げるわけでもなく、それを軽く飛び越えてやつてくる魔物もいる為、油断は出来ない。

しかも、武具のみで倒せる魔物だけではないので魔法の需要は高かつたりするのだけれど、実際に魔法を使える人材はそう多くない。国によつて差はあるが、ジードリクス王国での魔法使いの割合は三人に一人程度。充分に補える人数に見えるが、それを戦場に立てるくらいまで昇華できる人間はほんの一握りしかいない。

だからこそ、早期にそういう人材を確保できるようにカーライルでは十歳になる子どもに対して魔法使いの素養があるか判定を行い、適正があれば魔法使いとしての指導を行うことにしているらしい。

ちなみに、僕に貸し出された【魔法基礎読本】はこここの備品で、用が済めば返却することになつてている。

まあ、【魔法基礎読本】だけではなくて他の教科書類もそうなんだけど。

経費節減というか、リサイクルというか、紙の供給量があまり多くないのも要因か。

現在学校に通う生徒数は一百人弱。完全に自由登校なので日々によつて人数は異なる。

年齢層は大抵が五歳から十四歳だつたが、それ以外でも五十代の孫がいるという人間が字を覚えたいと通つていて、魔法の基本を抑えたいという旅人が来たりする。

教室もそれぞれ大体の年齢層別になつていて、覚えたい事柄のみを選択して勉強することも可能なので大人から子どもまで様々な年齢の人間が同じ教室に座ることもあつた。

【基礎魔法学】の授業はまさにその代表格と言えるかもしけれない。

学業復帰初日。

学校の敷地内に設けられた訓練場。まるで体育館のような広さの場所に【魔法基礎読本】を手にした子どもと大人、四十人程度が集まつてゐる。

当然その中に僕も含まれてゐるわけだけど。

その中心にいるのは本を持たない三人の大人たちで、それぞれが

【魔導具】を手にした魔法使い兼教師。

「はーい。じゃあ、今日の授業を始めるわよ」

最初の声かけをしたのは金髪碧眼の女性だった。緑色のワンピースの上にショールを羽織った姿がとても絵になつていて、明るく、人懐っこい性格なので、大人から子どもまで人気がある教師だつた。「まずは魔素を集める訓練ね。それから組み分けして、それぞれに合った練習をするから。わたしとフェイ儿先生。サイラ先生に見てもらつて合格が出るまで待機してください」

並んで、という指示に従つて生徒が三列にまつすぐ並ぶ。一列ずつ一人の教師が見るためだ。

子どもは素直だから素早い。あつという間に並んでしまう。  
僕も遅れない程度にそれに習つた。

一方、そんな子どもたちの中に混ざるほかない数人の大人たちの行動はゆっくりだつた。しかも体格が違うからそれが目立つ。更に魔法を学びたいのは山々だが、子どもの中に混ざるのはちょっと。という顔を隠さないので子どもに敬遠される。そしてまた目立つ。悪目立ちしてゐる感じか。

まあ、そんな大人ばかりじゃないわけだけど。

並ぶのが遅れた大人は一番後ろに回るので時間がかかつたが、順番的には前からだし、教師陣はその辺り慣れているので問題ない。「魔素を集める段階では【魔導具】を意識する必要はないわ。ただ、息をしつかり吸つて吐く。自分の周囲にある空気を意識して。目に見えないからわかり辛いけれど、ちゃんと感じられるはずよ。それを自分の中へ引き込むよう想像するの」

初心者向けの説明をしながら、教師たちは前から後ろへ一人一人の状態を見していく。

慣れない人間には無理だが、長年魔法に携わってきた彼らのような教師だと見ただけで魔素や魔力の流れが見えるらしい。

ただ、それにも才能が必要らしいけど。

「ラウチさんは、もう少し肩の力を抜いてみて。今の状態は取り込

むじやなくて弾くになっちゃつてるから。アーヴィルくんはひょりと慌てすぎかな。もう少ししゃつくりと。それだと魔法を使うときこそ失敗しやすくなるよ。自分をちゃんと制御できなきゃ駄目。スーリくんは……うん。流石だね。前よりずっとよくなつてる。この調子で頑張って」

的確にそれぞれの注意点を見いだし、指摘していく。  
後ろの方に陣取つた僕まではまだかかりそうだったが、僕がこの授業で実技を受けるのは今日が初めて。  
頭を打つて休んでいた間に何度も本を読み返したもの、実践はまだだつた。

ほんとうにベッドから動かないまま数日を過ぎたわけだから、ちよつとはそういうのをしてもよかつたんだろうけど。  
ていうか、試したけどさ。

魔素を集めて魔力に変換つてのが全くわからなかつたんですね。これが。

誰かに聞こえにもうちの両親は魔法使えないし。  
こんな感じで魔法を使えるようになるんだろうか。ってホントに思つたし。

胸にさげた【魔導具】を見下ろすとついついため息が出てしまつ。でも、ここで悩んでいても仕方ない。

「はい、次」

顔を上げると金髪碧眼の教師の姿がそこにあつた。  
おつと。もう順番が来たのか。

思つたよりも早く順番が回つてきらしく僕は慌ててしまつたが、  
彼女の方はそんな僕を笑顔で見下ろす。  
それは母の笑みによく似ていて。

「ダット。待つてたわよ」

「シェリナ叔母さん」

実際、母さんの妹なわけなんだけも。

母さんよりも五つ年下だという彼女はまだ二十三歳と若い。十五

歳の時から別の国の魔法学校に留学、三年前に帰ってきた実力者で、現在は自警団とこの学校の教師を掛け持ちしている。

「元気そうね」

右手の人差し指に指輪型の【魔導具】をはめた彼女は視線を僕の位置に合わせると頭をそつと撫でてきた。

「頭を打ったって聞いてちょっと心配していたんだけれど」

「あ、うん。心配かけてごめんなさい」

「あら、いいのよ。わたしこそお見舞いにいけなかつたんだもの。

謝らなきや」

「そんなことは……」

なんて授業とは関係ないことを話していくと近くを通った黒髪の男性教師、フェイエル先生に睨まれた。

「シェリナ先生。授業中です」

物凄く生真面目で有名な教師で、しかも神経質。眼鏡かけたら絶対に似合つタイプだけど、生憎この先生は裸眼。受け持ちの授業がないときは領主館で秘書的なことをしているらしい。

うん。やっぱり眼鏡があつたら完璧だと思う。

でも、怒らせると面倒なことになりそうな感じ。

その辺りは叔母さんもわかっているのかすぐさま謝罪。

「あ、そうですよね。ごめんなさい」

「公私混同は困ります。そういうことは授業の合間にしてくれださい」

「うわあ。超真面目だし。

フェイエル先生はこれ見よがしに嘆息して、自分が受け持つ生徒たちに向き直った。

正直、付き合いにくい先生もある。

僕と叔母さんの間に氣まずい沈黙が降りたが、それはそれ。

「え、と。じゃあダットくん。この訓練は今日が初めてよね。わからないうことは多いと思うけどその辺りのことはちゃんと教えるから、聞きたいことがあつたら言ってね」

叔母さんも教師として生徒に教える身だ。切り替えは早かつた。  
僕はそれに頷いて、説明を聞いていく。

「IJの訓練場には、通常の状態よりも魔素が集まりやすいように【紋章】を敷いているの。だから魔素を感じ取ることが苦手な子でも、比較的簡単に魔素を魔力に変換できるようになっているわ。IJIまではいい?」

「はい」

「魔素は目では見えないものなのよ。魔力もそう。でもそれを感じ取ることは出来るの。魔法を使う人間はみんなの能力を持っているわ。普段は無意識にだけれど、魔素を魔力に換えているの。でも魔法を使うにはそれを意識的にしなくてはいけない。だからまず、あなたにはそれを感じてもらうわね。わたしが見本を見せるから、よく見ていて」

叔母さんはそう言うと僕から少し離れた場所に立った。

他の生徒も気になるのか、僕と同じように叔母さんを見つめている。

「はい。これが通常の状態。魔素を取り込む前ね。そして……」  
叔母さんはリラックスした表情で肩の力を抜くと両手を胸の位置に当てて息を吸い込む。

一瞬、空気が震えたのはわかったが。

「これが魔素を取り込んだ状態ね。この時点で魔素は魔力に変換されるわ」

さつきと何ら変わらない状態で言われて、僕は目を瞬かせた。  
「ごめんなさい。さっぱりわかりませんでした。

それが顔に出ていたらしい。

僕の表情に気がついた叔母さんが唸る。

「もつとわかりやすくするなら、魔法を使つた方がいいかしら」「そう言つと少し考えた様子で「これはもう少し後になると思つただけれど」と右手にはめた【魔導具】を示した。

「いい? 一度しかやらないわよ

やつらと叔母さんは右手を前に差し出した。

【汚れしは墮ちし我が身。歪みしは我が心。我望む。我願う。淨化の風を吹かせたまえ】

今度はわかつた。

叔母さんが呪文を口にする度に空気が震え、叔母さんの方へ引っ張られる。そして呪文が終わった瞬間、叔母さんを中心にして風が起きた。

「暴風とは言わないが、思わず構えずにはいられない程度の勢いで。  
「わっ！？」  
「きやっ！」

何人かの生徒が驚いたように悲鳴を上げる。

ちょっと魔法が大きすぎたらしい。バランスを崩して倒れかけた生徒もいるようだ。

うん。僕から見てもこれはやりすぎだと思つ。  
叔母さんも予想外だったみたいでちょっと慌ててるし。  
そして。

「ショリナ先生！」

またもや声を挙げたのはフェイル先生だった。額に青筋が立つて、いるように見えるのは多分気のせいじゃない。風が収まるや否や、すかすかと叔母さんに近づきひとこと。

「やりすぎです！」

「うつ。でも、これが一番初心者の子にはわかりやす  
「どうしても、こちらにもひとことあつていよいよです。生徒にケ  
ガでもさせたらどうするんですか！」

完全に怒つてゐる。

縮こまつて言い訳する叔母さんが最後まで言い終わらないうちこ  
彼女を叱り飛ばした。

「大体あなたはいつも大雑把すぎるんです。あなたの魔法に対する

知覚が優れていることは認めますが、だからと言つて感覚だけで魔法を使うことが危険だというのは常識でしょう。それを生徒にきちんと教えるのも私たちの仕事なんですよ！」

「あ、う。は、はい。「ごめんなさい」

青筋を立てて怒りを露わにするフェイル先生に、叔母さんがちょっと涙目になつて萎れた。

まあ、確かに叔母さん今のはちょっと不味かつたかも。

フェイル先生が言うことも一理ある。

学校で教師をするということは、よそぞまの子どもを預かるということに他ならない。

子ども同士の喧嘩ならともかく、授業中にケガをさせたとあっては教師としての面目が立たないし、責任問題にもなりうるのだ。

フェイル先生はそれを指摘したに過ぎない。

一応僕も【橋本誠也】だった頃は教師を目指してた身だし、それぐらいはわかる。

フェイル先生はしばらく叔母さんを睨んだ後、彼女の処遇について通告した。

「もう結構です。止められなかつたこぢらにも落ち度はありますから。ただ、この件はしっかりと学長に報告させていただきます」

「えつ！？」

「せいぜい叱られて反省してください。あ、減給は免れないでしょうね。きっと書類もいろいろと書かれるとは思いますが、自業自得です」

「ちょ、フェイル先生っ！」

「クビになりたいですか？」

それを言われれば、もう黙るしかないだろうなあ。

叔母さんは涙目をぐつと堪えて「わかりました」と頑垂れた。

「では、授業を再開しましょう」

叔母さんを叱つたことですつきりしたのか、フェイル先生の表情はいつもの真面目なものに戻っていた。

が。

「あ、それと」

言い忘れたと言わんばかりに叔母さんを見てこう言つた。

「これから先、ダットくんは私が見ます。あなたに任せていたらとんでもないことになりそうですか？」

これには叔母さん完全に撃沈。

僕に教えられるつて判定が出たときに物凄く喜んでたから、これは何よりの罰だろう。

抗議しようにもフェイエル先生の方が先輩になるので、立場的には叔母さんが弱い。

「というわけで、ダットくん。よろしくお願ひします」

生真面目なこの顔は絶対に今言つたことを実行するに違いない。多分僕が叔母さんがいいと言つても無駄だ。

「え、と。じゃあ。お願いします」

「ごめん。叔母さん。僕じゃ逆らうの無理。

追い打ちをかけられて膝をつく叔母さんに、周囲の生徒が「哀れだ」と呴いていたのは聞かなかつたことにした。

「で、どうだつたわけ？ 初めての魔法」

一般的の授業を受けるための教室で絡んできたのはエリクだった。エリクは魔法の素養がないため、午前中いつぱい取られていた【基礎魔法学】の授業は受けていない。本人は別にそれを気にしてはないようだが、興味だけはあるらしい。

「どう……つて。別に。午前中いっぱいと魔素を集める練習してただけだよ」

叔母さんの魔法によつて一時は大変だったが、その後は普通に授業は進められた。と言つても実技なので最終的には初心者、中級者、上級者と分かれてそれぞれ出来ることをしただけだ。

僕はフェイル先生の指導を受けて、叔母さんの魔法で感じ取れた魔素が引き寄せられるあの感覚を再現するため、初心者ゾーンで四苦八苦しただけで授業が終わつたけど。

フェイル先生に言わせれば、「最初の最初はそんなもの」で、あと何度も繰り返すうちに覚えるそのなので、『気長にやりなさい』と言は繰り返し練習あるのみのこと。

何度も繰り返すうちに覚えるそのなので、『気長にやりなさい』と言われた。

「ふーん。魔法つて面倒だな」

昼食に持つてきた弁当を机の上に出すと、エリクが横に陣取つた。  
「そりやね。しつかり制御しないと暴走して危ないわけだし。簡単にはいかないよ」

そう答えた僕の脳裏に浮かんだのは自動車だった。

あれもしつかり前を見据えて運転しなければ事故に繋がる代物だからこそルールあり、免許が必要だった。

それと同じで魔法はそう簡単に得られるようなものじゃない。

僕はこの最初の実技授業でそれを実感されられた。

「ま、そりやビーでもいいんだけどさ」

じゃあ聞くな。と言いたくなるような台詞を吐いたエリクが背後を振り返る。

「あいつ。ビーさんの？」

「いや、どうするって聞かれても」

エリクのように振り向かずともわかる、とある視線。

朝からずっと感じるそれに僕は肩をすくめた。

「ライナのヤツ。わかりやすすぎだつての」

そう。視線の主はエリクの言つ通りの人物のものだ。ほんの少し視界を動かし、その端から見えたのは昼食らしいパンを銜えた銀髪少女の姿。しかも睨むようにこちらを窺つている。

「朝、おはようって声かけたら逃げられるし。そのくせこっちを窺つてるし。凄くわかりやすいんだけど、ちょっとやりづらいね」

「ま、そんだけセーカク変わつてりやな。こないだ見舞い行つた日の帰りがけ、あいつおまえの正体暴いてやるつて叫んでたぞ」

「あー、どうも納得してないっぽいな。とは思つてたんだけど。やっぱりそつなるんだ」

実は【基礎魔法学】の間も彼女の視線は感じていた。

ライナも僕と同じで魔法を使う素養を持つていて、彼女の方がそれに関しては一年先輩だ。

僕が前世の記憶を取り戻す前までは「あたしがちゃんと教えてあげるから大丈夫よ！」と息巻いていたのだが……

「すっかり警戒されちゃつたなあ」

「そのうち飽きるんじゃね？」

エリクは気楽にそつ言つと自分の弁当を食べ始めた。  
だといいけど。

ジャガイモに似た芋を蒸かしただけの味氣ない代物にフォークを突き刺し、僕はその問題をひとまず忘れることにした。

午後の授業はジードリクスに関わる【歴史】の話で始まった。

ジードリクス王国は元々すぐ北に位置するラグドリアという帝国の領土で、かつては魔物が横行する未踏の地だったそうだ。

それを人が住めるように開拓した人間こそ、ジードリクスの初代女王ルリア・ジードリクス。

【救世の聖女】とも呼ばれる人物だった。

そしてその女王をその横で助けた人物がダードリー・ウィットトカイ・シド。

二人もまた【双黒の比翼】という二つ名を得ている。

それが約一百年前のこと。

ジードリクス王国を愛する人間であれば、誰でも知っている英雄物語である。

教壇に立つ年配の茶髪の女性 カリイナ先生と言ひ がよく通る声で三十人ほど集まつた子どもたちに語りかける。

「北の帝国ラグドリア。彼ら三人は元々帝国の民でした。今でこそかの国は平定を取り戻し、民も穏やかに暮らしていますが、その当時は権力者が弱い者を虐げることが当たり前の状態だったようです。ルリア・ジードリクス。後の建国の女王は元々帝国貴族の娘でした。彼女が残した手記にはその当時のことが鮮明に記されています。あえてここでは語りませんが、教科書には載つてるので、興味がある人はそちらを読んでくださいね」

カリイナ先生はそう言って途中の内容をスルーした。

それも仕方ないというかなんというか。

僕は手元の教科書の抜粋されたその部分を読んで苦笑いを浮かべた。

『平民は奴隸として売買され、粗相をすれば斬り捨てられる。ある夜会では老若男女が地下で賭けをしていた。奴隸同士を闘わせ、殺

し合わせるのだ。親子、兄弟、姉妹。負けた方に訪れるのは死。そこから逃れるために相手を殺す。時には自ら命を絶つ者もいた。帝国の都は煌びやかだったが、その裏では魔物よりも非情な世界が広がっていた』

この教室にいるのは大体が九歳から十一歳までの中間層。  
低年齢層の子どもにはちょっと刺激が強い内容だ。

読まずに済ませる気持ちもわかる。

もう少し年上 十二歳から十四歳程度 になると踏み込んだ授業もあるらしいが。

日本だったら絶対にあり得ない内容だが、この辺は異世界だからなのか、それとも文化の違いだからなのか。

そのあたりのことは置いておいて、有名な建国の女王とその仲間についての説明は続く。

「彼女は、十五歳になると行動を起こしました。帝国を変えるために動き出したのです。けれど周囲の賛同は得られず、窮地に陥ります。反逆の罪を被せられ投獄されたのです。そこで出会ったのがダードリー・ウイットでした。彼もまた現状に意義を唱えた帝国貴族の子息。一人は絞首刑になるはずでしたが、幸運なことに義賊によって助けられます。名はカイ・シド。これが英雄三人の邂逅でした」  
「ここから先三人は様々な苦難に遭遇し、立ち向かっていくことになる。」

脱出先で出会った奴隸扱いの者たちを救出して帝国南部の同じ志を持つ貴族の元へ逃がしたり、助けられずに処刑される場面に出会つたり、悔いている彼らと師匠となる魔法使いと出会つたり、人間の言葉を理解する魔物に遭遇したり。

様々な偶然と巡り合わせと彼らの行動力の結果がジードリクス王國という国を作り上げた。

「元々魔物の領域であつたこの地の開拓は、決して容易ではなかつたといいます。戦える人間も少なく、死者もまた多く出たそうですが、彼らは諦めずに少しずつ人が生きていける環境を整えていきま

した。そして同じ頃、帝国内でも変化が起こります。帝国の現状に不満を持った地方貴族達が連携して動き始めたのです。その先頭に立つた人物が後の新生ラグドリア皇帝ルジュア・ルアール・ラグドリアでした

「実はこのルジュアという皇帝、元々帝国の第三皇子でルリア・ジードリクスとは友人で幼馴染みだつたらしい。

思想もよく似ていてそのせいで彼は地方に左遷。ルリアたちが追われた後、密かにその跡を追つて支援などをしていたそうだ。ルリアたちの元には続々と奴隸扱いをされていた人間が集まつていた。中には脱走兵などもいたらしい。更には魔物と闘うということもあります。傭兵なども雇うこととなり、気がつけば帝国の一箇師団にも負けないくらいの戦力が出来上がつていた。

そうして。

「ルジュア皇帝とルリア女王は同時に立ち上がりました。女王は帝國からの独立を宣言。帝国はそれを認めず、最大戦力で軍を送りました。この間、帝都の守りは手薄になります。ルジュア皇帝はその隙を持つて帝都を占領しました。この知らせを受けた軍はすぐに取つて引き返しますが、元々民にはよく思われていなかつた彼らはこれによつて瓦解。敗走することになつたのです」

やがて、帝国内での肅正が終わりを見せる頃。

ルジュア皇帝は改めてルリア女王に独立を認めるとの声明を発表。

よき隣国であることを約定にて制定した。

別に帝國がちゃんと皇帝によつて肅正されたんだから独立しなくてもいいんじゃない?とも思つところもあるが、それは奴隸として扱われてきた人々の心身上のこともあり独立という方向で決着したそうだ。

と、大体おおまかな国の成り立ちはこんなものだろうか。

実際はもつといろんな意図が絡まつてたんだろうけど、過去のことは過去の人間にしかわからない。

未来にいる人間としては、残された証拠からそれを想像するしかないわけだしね。

「というわけで」

カリイナ先生はここにこと笑みを浮かべながら指を一本立てた。「この話はみなさんもよく知っていることだと思いますが、今日の課題はこの建国にまつわることについて感想文を書くこととします」と言ふ……？

僕は思わず、手元にある見た目黒板ミニチュアサイズのそれに目を落とした。紙の供給量が少ないこの国でのノート代わりになるもので、対になつた木の棒で文字を書く仕様になつていて。

少量の【魔鉛石】と両方に特殊な細工の【紋章】が刻まれていて、【紋章】同士を触れ合わせることで文字が消える。という仕掛けの【魔道具】で便利なのだけれど、所詮は黒板。感想文を書くほどのスペースはない……んですけど。

同じ教室にいる四十人弱の子どもたちも普段なら絶対にすることのないことを言われて戸惑つている様子だった。

そんな僕たちの反応をカリイナ先生は微笑むことで制すと、一体いつこの教室に持ち込んだのやら。普段用いることのないはずの紙の用紙を教卓の上に持ち出す。

そして次には。

「紙も書く道具も揃えていますから、安心してください」「でん、とペンやらインクやらが入っているらしい箱を取り出した。……いや、だからそれ何処から出てきたの？」

確かに授業が始まる前にはそこには何もなかつたはずなんですが。というか、カリイナ先生教室に入ってきたとき、教科書以外のものは持つてなくなかつたですっけ。僕の見間違い……？」

いろいろ突つ込みたいのは山々だったが、カリイナ先生は続きを話す。

「実は学長が、皆さんの口頭の成果を見たいということで気まぐれに提案してくれやがりまして。普段は触ることのないものに触

れてみるのも一興だとこのようなことと相成りました」

ふう、と息を吐くカリイナ先生。その表情がどこか疲れて見えるのは見間違いないだろう。一部棘付き発言も含まれていた。

ていうか今、野郎言葉入つてましたよね。

いつも落ち着いた雰囲気を崩さない穏やかな彼女の意外な一面を垣間見てしまった僕を含めた生徒たちは、それぞれ隣の席同士で顔を見合せた。

そんな微妙な空気が流れる中、前の方の席に座っていた生徒が手を挙げて発言する。

「せんせー。それって試験つてことですか？」

それは年に一度紙を使ったテストが行われるためのことだつたが、前回のテストは半年前にあつたばかりだからそれはないはず。

予想通りというかなんというか。

「いいえ。今回これは違います。あくまでも学長の提案で行われる突発的事故、とでも思つてください」

カリイナ先生は首を振つて否定した。

やつぱりなんだか、発言内容がおかしいけど。

学長となにかあつたんだろうか。ここは学長はちょっと変わつてることで有名だし、その関連……かも。

「まあ、それは横に置いておくとして。課題の件です」

氣を取り直したカリイナ先生は閉じた教科書を持ち上げる。

「教科書に載つていることだけを題材にしてもよいですし、もう少し詳しいところを書きたければ書庫へ行つて調べてもらつても構いません。建国に関わることならなんでも結構です。ただし、提出は

今日中にお願いしますね」

つまり、この後はほぼ自習状態となるわけで。

「わからない字などがあれば質問に応じますよ」

という言葉を最後にその場がわつとうさくなつた。

友だち同士でどうするか相談を始めたのだ。が、残念なことに僕の側にはそれを相談する相手がない。

ヒリクは年齢が二つ上なので十一歳から十四歳までの上級生の教室に回されているし、同じ教室にいるライナは僕の事を警戒して近づいてこない。

その他の子どもたちも、僕との接点があまりないため相談相手になりようがなかつた。

さて。ではどうするか。

少し考えてみたものの、決断は早かつた。

## 歴史の勉強、感想文（後書き）

補足。

【魔導具】 魔法使いのみが扱える道具。 魔法補助器具。 魔法を制御し導くため道具。

【魔道具】 魔法使い以外でも扱える魔鉱石を使用した道具。 日常生活等で使用。

カリイナ先生の許可をもらい、ミーチュア黒板もどきを抱えて向かつた先は学校内に作られた書庫の入り口。

重厚な扉を開けて入室したその瞬間にやつてくるのは古い本独特のかび臭さ。それに合わせて貸し出しのカウンターに座っていた金髪の女性が僕の姿に気付いて声をかけてきた。

「ダツト……？」

「こんにちは。ショリナ叔母さん」

午前中に会つたばかりの叔母が驚いたように立ち上がり、その肩口で切りそろえられた金髪が舞う。

彼女の表情が気まずそつなのは、僕がサボりでここに来たと思ったからか、それとも朝のことがあつたからか。

「え、どうして？ なんで……？」

「授業で感想文を書きなさいって言われたから。その資料探しに来ただ。今日中に提出って言われたから。多分他にも何人かは来ると思うよ」

「感想文？」

僕が抱えたミニチュア黒板もどきを叔母さんが不思議そうに見下ろす。

「試験、じゃないわよね」

「うん。学長の指示だつて。カリイナ先生が紙を用意したからそれに書いて提出しなさいって」

「え。学長、の？」

「カリイナ先生は学長の気まぐれだと、言つてたけど」

「あー、学長の気まぐれか

叔母さんが苦笑いを浮かべた。

「でも、それにしてはまともね。いつもなら【全生徒対抗魔法の宝探し】とか【農仕掛けの陣地取り合戦】とかそういうのを企画して持つてくるのに

「あー、あつたね」

領主さまの友だちが開発したとかいう新作【魔道具】景品にしたり、学校中いろんな農仕掛けで、先生たちが丸一日片づけに奔走したり。

他にも突発的に【自警団に負けるな障害物捕り物競争】とか【難問百解いたらこれで君も天才に】などなど自警団を巻き込んだり、たいして意味のないクイズ大会をしてみたり。

しかもそれは魔物が町に襲撃をかけてくるのと同じぐらいの頻度でやつてくる。

教師陣もノリの良い人間はいいのだが、後始末が毎度大変なのでどちらかというと不評だった。

カリイナ先生が奇妙な言動をしてしまったのも、多分その大変さからなんだろうなあ。と考えることにする。

まあ、今回のこれは単に感想文を書けというだけなわけだし、それならそうおかしなことにはならないはず。

叔母さんも言うだけ言ってみたもののたいして深い意味はないだろうと判断したようだ。

話題はすぐに課題の中身に戻る。

「それで感想文って、なんの感想文を書くの？」

「ジードリクス王国の成り立ちについて。それについてならなんでもいいって」

「あり。じゃあちょっと奥の方になるわね。でも、ダットくらいの子が読めるような本は少ないわよ」

「え、そうなの？」

「ええ。資料になりそうなものは難しく書いているものがほとんどだもの。子ども向けとなると……やっぱり簡単で装飾された話が多

いから」

「そうは言いつつも、捜してくれる気はあるのか、叔母さんはカウンターから出てきてくれた。

自分の受け持ちの魔法系授業がないときは書庫が定位置の彼女だ。どこにどんな本があるかは把握しているはずだから、読みたい本を探すなら任せることだ。

「それを覗くとやはり難しいかな。あまり子供にはあまり見せたくないような描画が入ってるのも多いし」

「え、駄目？」

「駄目じゃないけど。感想文を書くだけならあの教科書だけでも出来ると思うわよ。おすすめはできないなあ」

となると、教室に逆戻りするのが正解ってことだろうか。

「もう少し上の子達たちなら読めそうなものもあるんだけど。ちょっと違う切り口で感想を書いてみたいって思うなら、わたしが選んで口頭で教えるのもありだけど。どうする？」

どうする、って言われても。

一応叔母さんも魔法系の授業の担当だけど教師なわけだし、それだと他の教師の授業に割り込む形になるのはないだろうか。

……ちょっと微妙だ。

「え、と。叔母さん。とりあえず、本があるところに案内して。本は僕が選ぶから、読んでほしくないような本だつたら言つてくれる？ そうしたら別にするから」

そう言つたら、叔母さんはちょっと驚いた様子で目を瞬かせた。

「あーあ。本当に姉さんの言つたとおりなのね」

誰に向かつて言つでもなく、彼女は呟く。

「叔母さん？」

「姉さんから聞いたわよ。記憶喪失になつたら一気に性格が大人になつちやつて困つてるつて」

「えー？」

「その通りね。態度が全然子どもらじくないし、しゃべり方も前と

違うし。利口すぎるわ。まるっきり別人ね」

……母さん。一体何を叔母さんに喋ったんだら？。

少し不安だつたけれど、心配性な母さんに比べるとこの叔母さんは樂観的思考の持ち主で。

「まあでも、姉さんが大丈夫だつて言つてたし。わたしだつて魔物とそういうじゃないものとの区別はつくわ。だから心配しなくても平気よ」

「え、あ。はい」

心配するまでもなく、叔母さんは自分の中でいろんな事に決着を付けたみたいだ。

けれど。

「ただ、油断はしないこと」

少し安心した顔の僕に、彼女は忠告を付け足した。

「いくら家族があなたをちゃんとあなただつて認めて、赤の他人は簡単にはいかないわよ。明らかに、あなたの変化は異常だもの。気を付けなさいね」

「はい」

そこは言われずとも、と言いたいところだが素直に受け取る。

心配して言つてくれてるわけだし。

猫を被る、のは無理にしてもある程度隠すべき所は隠すつもりではある。

最初はそこまでする必要はないと思つていたんだけど、その辺りは今朝父さんに散々言い念められた。

「出来るだけ気を付けるつもりです」

にこりと笑つてそう返答すると。

「だったらその喋り方はしないほうが賢明ね」

もつと子どもらしくしなさい、と額を弾かれた。

軽くだけど、痛いよ叔母さん。

少しだけ恨みの念を込めて睨めば「「めん」「めん」と彼女は笑つ

た。

「じゃ、時間がなくなるといけないからさつと捜しましょ。」  
まだある程度余裕はあるけれど、感想文の提出は今日中だ。時間は限られている。

僕は歩き出した叔母さんの背中を追つて、少し小走りになつた。基本書庫は大声厳禁。それは異世界でも同じで、叔母さんと僕の足音が薄暗い書庫の中に響く。

明かりは小さな天窓から入る僅かな太陽の光と、かるりうじて文字が読める程度に調整された光を発する【魔道具】のみ。

貴重な本を出来るだけ痛まないようにするための処置ではあるが、足下まではしつかり照らしてはくれない。しかも床は石畳。たまに出っ張りがあつたりするので注意して歩かなければいけなかつた。

「あ、そうだ」

やや下向きの視線で追いかけていた叔母さんが横目で僕を振り返る。

暗がりの中でも見えるその田はちよつと悪戯っぽく輝いていて、僕はなんだか嫌な予感を覚えた。

実際その予感は外れてはいなくて。

「ライナちゃんと早く仲直りしなさいよ」

僕はため息を吐いた。

まあ、叔母さんも僕やエリクやライナのことによく知っている人の一人だし。

今朝の【基礎魔法学】の授業で一緒にいなかつたところも見ているのだから、何かあつたと思つて当然ではある。

「……失敗した？」

なんとなく予想はついてるぞ。と大人特有の余裕の笑みがちょっと気に入らないけど、その通りなので反論はしない。

「なんか変な疑惑持たれてる」

多分、父さんの時と同じような【魔物憑き】疑惑だらうけど。

「お見舞いに来たとき、ちょっと説明したんだけど納得できなかつたみたいで」

「あー。急なダットの変化についていけなかつたわけだ」

「はい。的確なご指摘ありがとうございます。」

「なるほどね。それであんな警戒した目をしてたんだ」

「ええ。まあ。朝からあんな感じで、すつごに視線感じてやうづらいつたら」「

しかもその様子を周囲にばつちり見られているのだ。

本当ならいつも一緒にいる【ダット（僕）】とライナが別々に、しかも一方的に睨んで睨まれての光景は全員が奇異に思つて当たり前の光景だ。

それが好奇の目を生み、じろじろと朝からちよつと鬱陶しい視線も混ざつていた。

前世の僕のモットーは平凡で平穏のはず……だつたんだけど、どこでどうおかしくなつたのか疑問だ。

叔母さんは楽しそうにそんな僕のしかめつ面を見下ろしている。「ま、仕方ないわね。あの子はお姫様を守る凄腕戦士よ。今まで守つてた相手がいきなり別人みたいになつたんじや、すぐには信じられないで無理もないわ」

「叔母さん。その例えちょっとヤダ」

「ここで騎士という言葉が出てこないのは騎士といつ職種がこの国にないからだけど。でも。

「……お姫様つて」

僕は男。男ですよ。

「ふふ。遠くから見てたらそういう見えるわよ。ここに通い出してからはずつとそうじやない。ダットを虜めようとする子を片つ端からやつつけてたのは主にライナちゃんよ。ヒリクくんもたまに手を出しうたみたけどね」

それは僕も知つていて。

自分に自信がなかつたから、からかつてくる相手に何も言い返せずに黙つていることしかできなくて。そんな時は大抵ライナやエリクが駆けつけて来ていたことを思い出す。

それだけじゃない。

【ダット（僕）】が一人の時に絡んできた数人が後でケガをしていて、ライナも似たようなケガしていたこともあった。

それは守られていたということに違いないだろう。

実際に【ダット（僕）】はそう感じていたし、同時に申し訳ないとも思っていた。

「そんなライナちゃんだからきっと今のダットが不安なんじゃないかしら。今まで彼女が守ってきたダットが急にいなくなつたわけでしょう。家族でさえ別人みたいに思えるんだもの。だから納得がいかなくて、疑つてるんだと思うわよ」

「だから、あんな態度を？」

「少なくとも、わたしはそう感じたわね」

そう叔母さんは言って立ち止まる。

一瞬目的地に着いたのかとも思つたが、違つた。

「あのね、ダット」

振り返った叔母さんが、腰を落とし僕の視線に自分の視線を合わせる。

「きっと、ライナちゃんは急に大人になつたダットがダットだつて認識できただけだと思うわ」

「え？」

「今、あなたに起きている変化は本来長い年月をかけて起こるべきだったものよ。人は最初は未熟な子どもだけれど、やがて成熟した大人へと変わっていく。あなたはどういう理屈かはわからないけれど、その工程を全て通り越して大人の態度を取るようになつてしまつた。それが周囲にどれだけ動搖を与えると思う？ わたしから見ても、あなたはまるつきり前のあなたとは違う別人に見えるわ。ふとした動作、癖なんかが、以前のダットと同じだと気付かなければきっとそう断言していたわね。ダット。彼女は子どもよ。大人の視点で、わたしと同じようには見ることができないの。それを忘れて大人の言葉を押しつけるのは駄目。理屈じゃなくて、ちゃんと心で

ライナちゃんと向き合つ。それが子どもらしじつて」と。感謝の気持ちだつたり、気に入らないからつて怒つたり。ちゃんとその感情を言葉にしなくちゃ伝わらないわよ

だから、と叔母さんは最後に笑つて。

「ライナちゃんと友だちでしょ。受け容れられなかつたのなら仕方ない、なんて氣取つたことは考えずにどーんと自分の気持ちをぶつけてきなさい」

【魔導具】である指輪を身につけた指が、僕の背後を示す。

つられて振り返つてみれば、一つ、二つ向こうの本棚の影。そこには見覚えのある銀色の髪の束が一本見え隠れしていく。

「ばればれ？」

うん。隠れてるつもりで、隠れられてないな。

「かわいいわよね。ほんとこ

叔母さんは楽しいと嬉しいの両方を含めた表情でうんうんと頷いている。

青春だね。とでも思つてゐるのかもしれない。

「……今、授業中だよ。一応」

「あらー。真面目ね。でも、じつこのまきつかけが肝心。ほら、行つてきなさい」

しつしつ、と犬を追い払つかのような仕草をされて、僕は大きく嘆息した。

多分この様子だと資料になる本の所まで案内してもらえやうにな  
い。

「行つてくる」

僕はそうして来た道を逆に戻つていき、銀色の髪が揺れていますの場所で顔を覗かせて声をかけたら。

「ライ」「さやーつ！」「

……逃げられた。

なんでそつなる。



## 避難誘導訓練です

いや、いきなり声をかけたのが悪かった。のだと思つ。けどや。

書庫でこいつそり（実はばればれだつたけど）僕をつけていたライナに声をかけた瞬間に悲鳴あげて逃げられるつて……結構傷ついたんだけど。

それがいけなかつたのか、あれから僕が話しかけようとするたびにライナは逃げる逃げる。

ちょっとでも、僕がライナに近づこうと行動を起こした瞬間に視界から消えるとか。そりやないだらうって感じだ。

そのくせ、授業中とか僕の方をじーっと睨んでるし。

逃げたのを追いかけて捕まえるのも有りなんだらうけど。これにはちょっと問題が。

僕の体はライナよりも背が低くて運動が得意な方じやないし、逆にライナは運動が得意。とくれば、結果はもつわかりきつている。鍛えれば別かも知れないけど、今すぐは無理無理。

それならライナの家まで行つて話をつけよう、としたら「会いたくない」とまた拒否される始末。

そんなわけで、翌日、翌々日と経過してしまい。

なんでだろうね。ライナを追いかけるうちに「僕ストーカーか？」とかちよつと落ち込んださ。

「……エリク。アレ、捕まえられる？」

今、僕らは青空教室よろしく自警団の団員に囲まれて学校の校庭にいる。教室に関係なく集められた子どもたちの数はおよそ一百名。要するに全校生徒だ。

僕とエリクはその真ん中辺りに陣取つて体育座りをしていた。ラ

イナはその後方。こちらを伺える位置にいる。まつたくもつてやりづらい。

周囲の好奇の視線も、ライナを追いかけることもいい加減面倒になってきたので、正直僕の機嫌はよろしくない。多分、今まで【ダット】(僕)【がしたことのない目になつて)いるはずだ。

「いや、無理」

エリクは即答だった。

「あいつ最近、風魔法おぼえたる。俺じやつかまえられねーよ

「ああ。そつか。【疾風走行】ね」

そういうえば、僕が頭を打つ前にライナが自慢していたつけ。確かに【魔法基礎読本】にも掲載されている、早く走れるようになる魔法だつたはず。

元々の彼女の身体能力も合わせると、いくら体力に自信のあるエリクでだつて無理だ。

「どうか、この【疾風走行】。【魔法基礎読本】の中でも難しい部類に入る補助魔法だつて話なんだけど。

普通そこまで行くのつて一年とか三年かかるらしいのに、あの幼馴染みは一年での本の中身をほぼマスターしてしまつたらしい。初步の初歩。薪に火を付けるとか、風を吹かせるとか、それでさえ半年かかってしまう人間もいるのに。これぞ才能というやつか。「あいつ、そのうち王都とか帝国の方の魔法学校に行くんじゃね?」「そうかもね」

飛び抜けた才能がある生徒は領主が推薦状を書く。本人の希望にもよるが、それにより大きな専門の学校に行くことができるのだ。実はシェリナ叔母さんもそのクチで、王都の魔法学校に二年。そこから魔法が盛んな他国へ三年留学させてもらつていた。

その割にこんなところで教師やつてるのがどうにも疑問ではあるんだけど。

「よし。いいかーよく聞けー。これから魔物に出てわしたときに対処法を教えるぞ」

落ち着かない子どもたちに對して、授業の先生役となつた自警団の団員が声を張り上げる。

自警団の緑色の詰め襟制服を着崩した彼には、見覚えがある。確か父さんと同年代だつたはずだ。彼は生徒の注目の的となつても特に萎縮することもなく話を続けた。

「地を駆ける魔物は素早いことが多い。子どもの足で逃げるのは難しいだろう。建物の中に避難することが出来るだけの時間がある場合は、それでいい。だが、それが無理だつたときは木に登るか、魔物の大きさでは入つてこられないような場所に入り込むのが有効だ。この近辺の魔物は体が人間よりもデカイのが大多数だからな。空を飛ぶやつらの場合は……障害物が有効だ。建物の影の隙間になんかでもいい。とにかくやつらの入り込めないような隙間に隠れる。今日はそのあたりを考慮して、避難できる場所の確認も行う。住んでいる場所によつても違うので、それぞれに分かれてもらつ」

そうして彼は生徒を囲む自警団の団員たちの名を呼んだ。

「ドゥークとウェルズは北区。ルイザとカーシュは西区。ナンとフアリスは中央。キリエとゴルドは東区。リアとメイレルは南区を担当する。それぞれ住んでいいる地区を回つてもらう予定だ。他にもめぼしい場所には団員を配置してあるので聞きたいことがあればその都度質問を。毎度のことではあるが、この確認は君たちの安全を確保するための重要なものだ。こざといつとき、きちんと対応できるようしつかり確認してほしい。以上だ」

説明が終ると同時に、それぞれ担当する地区的団員が「北地区はこつちねー」「真ん中はここー」と声を上げ始める。  
僕もエリクも、そしてライナも東部地区になるのでキリエさんとゴルドさんペアの所になる。

集まつた人数は大体三十人くらいか。

「おし、坊主ども。集まつたな！」

赤髪を短く刈っている陽気な男性がゴルドさん。

「はぐれないようについてきてくださいね」

少し長めの茶髪を後ろで一つに縛っている男性がキリエさんだ。

二人とも二十代半ばで、キリエさんは妻帯者。もつすぐ子どもが

生まれると父さんが言っていたのを覚えている。

どちらもカーライル東部に家があるので、この人選になったのだ  
う。

一人を先頭にして、まず向かったのは学校内の避難に適した場所、  
だった。

校舎内は省き、校庭内の用具入れや、緊急時に入れる地下壕などの  
場所。木に登るならどんな木がいいか。登り方。登るるときの注  
意事項なども実践を交えて教えてもらつ。

木登りに関しては……まあ、運動神経よくなきや難しいし、ある  
程度身長がないと厳しいだう。といふことで、僕はその選択肢を  
除外した。

続いて向かつたのは、学校の外。学校自体はやや北区寄りだけど  
一応中央の範疇に入つていて。そこから東。王都へ向かう街道が整  
備されているので、大通りがある場所を目指して進んでいく。

「東地区は……北区みたいに農場があるわけじゃねえしな。ほとん  
ど家屋ばつかだ。基本的に家の中に逃げ込めば問題ねえ。それでも  
駄目な時は……この辺だな」

家と家の隙間。大人一人が通るのも難しいようなその場所をゴル  
ドさんが示す。

「俺たちじゃ無理だが子どもなら入り込める。でかい魔物なら、入  
つてこられねえから丁度良い。実際十年つくらい前にこいつ所に  
逃げたおかげで助かつたのもいるから、しつかり覚えておけよ」

「はーい」

比較的素直な子どもたちの返事がいくつも重なる。ちょっと暢気  
にも聞こえるけど、その表情は真剣だ。きっと親世代から色々聞か  
されてるからだろう。

それも自分たち人間が魔物に対抗する術が少ないことをわかつて  
いるからこそ、のこと。

大抵は町の外で撃退されるけど、そういうことが出来ないこともありますから油断はできない。

これは町全体が積み重ねてきた歴史もある。

「じゃー、次行くぞー」

町行く人とすれ違ひながら、歩く。

ただ、年少五歳の少年少女が数名混じつているわけで、休憩を挟みつつだ。

一度目の休憩も、二度目の休憩もわかりやすいようにと街道へ向かう東の大通り、馬を休める水場の近くで取った。

他の町からやつてきた商人やら、これから町を出て行こうとする人たちが集まつたその場所はそこそこ騒がしい。

馬を預かる厩もいくつか建つていて、僕はそこで頭のてっぺんが一階の天井に届こうかという大きさの馬を見上げていた。

日本では見たことがない大きさの馬である。しかも頭のてっぺんには天を突くような一本の角が生えているし、目つきも鋭い。

魔物が普通に闊歩する世界なわけだし、それに合わせた進化なんだろうけど。

前世の記憶が甦るまでは普通だと思っていた光景でも、今こうして見てみると違和感ありまくりだ。

「……デカイし、角生えてるし。姿形は馬そのものなんだけど。流石異世界」

そう言つしかない。

「何言つてんの。おまえ」

うつかりぼやいたそれを隣にいたエリクが聞いていたみたいだけど、理解できないだろうから放つておく。

「よし。じゃあ、休憩終わりだ。帰るぞ」

背中側からそんな声が聞こえてきたので、振り返る。同時に点呼も始まつたようなので急いで集合場所に戻ることにした。のだが、不意に服を引っ張られる感触がして足を止めた。

場所は腰の辺り。

見下ろすと五歳程度の少年が困ったよつと立っていた。

うす茶色の髪に少し不安そうな青い目が、僕の視線と合わせる。

「え、ど。なに？」

確かにこの子は……僕と同じ年の少女の弟だったはず。

「おー、どうしたダシト」

立ち止まつた僕に気付いたエリクが振り返る。状況がすぐわかつたのか、僕と僕の服を掴んだ少年を見るなり戻つてくる。

「なんだよ。こいつユファの弟じやん。どうした？」

「わかんない。今から聞くところ」

僕はそう言つてしゃがみ込む。目線が同じ高さになつたところで、尋ねてみた。

「どうしたの？」

すると少年は泣きそうな顔になつて。

「あのね。ユファおねえちゃんが、さつきのひなんじょにわすれものしたからつてもどつていつちやつたの。すぐもどるから、ついていつたんだけど。もどつてこないの」

と訴えてきた。

「あー。心配になつちやつたんだ？」

「うん。でもさがしこにきたいけど、まつてるようこいわれたの。でも、じけいだんのおじさんたちこなつちやだめつて

「え。なんで？」

「かつてにもどつたのを、しかられるつて。だから、ひみつにしないとだめつて」

「ああ。だからみんな泣きそつとなつてんのか  
エリクが少年の頭をぐしゃぐしゃとなで回した。

僕の顔を見た少年は。

「おねえちゃん、やがしてくれる？」

涙を溜めて懇願してくる。

僕はエリクと顔を見合わせて「どうする？」と目だけで語り合つ。「僕は探しに戻つてもいいけど。キリエさんたちに知らせないでつ

てこいつは……どうだろう

「けどさ。ちょっと行って戻つてくるだけだぞ。それぐらいで叱られるのもなあ。俺はヤダ」

「まあ、エリクはそんなものだうけど。いいよ。僕が捜してくる。適当に『ごまかしとい』

「え、だいじょぶか。おまえ」

「平氣だよ。僕は前の僕じゃないんだし。エリクも叱られたいなら一緒に来れば?」

「……行かねえ

どうせすぐ戻つてくるんだろ。とエリクはぼやくと僕を追い払う

真似事をしてくれた。

といふことはこれで確定か。

「え、と。じゃあ、僕がちょっと行って捜してくるからエリクはこの子と待機。言い訳は適当に考えておいて。じゃ、ようじへ

馬車が行き交う中、僕は一人に軽く手を振つてすぐ近くの路地に入る。

この近辺は自分たちの庭のようなものなので、大体の方角さえわかつていれば迷うこともない。とはいっても、町の東側は町が大きくなる度に外壁が増築されていったため、少し入り組んでいる。撤去されるはずだった部分が様々な理由で残つたままつたりするのだが、それが路地を迷路のように感じさせた。奥へ奥へと進む度、人の気配がなくなつていき。

それまでの狭さが嘘のように突然開けた場所に出くわす。

家が一軒建てられる大きさの広場だ。元々外壁が撤去されていれば家が建つ予定だったらしいが、撤去されずに残つてしまつたために地下壕を掘つただけに留まつたとのこと。

それが百年ほど前。詳しくは知らない。

入り口は外壁沿いにあり、地上部分は普通に草が生えただけの地面なので普段は子どもたちの遊び場になつていた。

警戒など必要な、子どもたちの庭。

思えば、これが間違いだつたのだと僕はすぐに後悔することにな  
る。

「ハハ、かな？」

地下壕への扉に手をかける。と。  
リイン。

背後から小さな鈴の音が聞こえた。

同時に。

### 【風散り】

甘い花の香りと、微かに誰かの声がした。

ひやははは。ざまあみやがれ。これであいつも大人しく……  
なつてもらわなければ困るよ。ぼくたちに敵わないと知  
つてもらわないと。

そうですよ。これで俺たちが堂々とこの町歩けるよつにな  
るんです！

がしゃん、ぼすつ、がちやん。

随分と耳障りな音に気付いて目を開けた僕は。

「…………？」

まったく何も見えない状態でることに気が付いた。

真っ暗。ほんとに何もない。まさしく闇。

えー、僕夢見てる？と思つたのはきっと間違いじゃないはず。  
だつて、頭ぼーっとしてたしね。

鼻の奥には甘い花の香りが残つてたし、そのまままた目を開じて  
しまつたわけだけども。

一度目に目が覚めた時はそういうわけにもいかなかつた。  
自分の目を疑つたよ。だつて目が覚めたはずなのに、夢と同じ状  
況だつたから。

いや、実際には紛れもない現実だつたんですけどね。  
というわけで、現在の状況確認をば。

一、何も見えない。目を開けても閉じても真っ暗闇です。

一、「ほこりっぽいし、ものすげくカビ臭い。しかもなんだかわからぬ匂いも混ざってる。

三、「どうかで水がぴちゃぴちゃ言ひてる。

四、体に時々震えが来るくらいには寒い。

四番田を感じたときに、僕はなんどこんな所に寝転がっているのか不思議だつたんだけど。

「……どうだ、ここ？」

「え、と。たぶん、地下?」

五、どうやら先客がいらっしゃったみたいです。

「よかつた。目が覚めたんだね」

女の子の声がしてゐるんだけど。って、あれ?

僕はふと、寝転がつている頭が柔らかくて温かいものの上に乗つていることに気がついた。

いかんせん真っ暗闇なので状況がよくわからなかつたが、女の子の声には聞き覚えがある。

「コフア、ちゃん?」

「うん」

即答をありがとう。知つてゐる人でよかつた。といつか、今僕の頭が乗つてゐるのはもしかしなくてもコフアちゃんの膝、だよね? 確認するまでもなく頭の上から振つてきた声は彼女のものなのが、頭の下にある女の子の膝という事実が僕を混乱させていた。

「え、と。なんでこんなことに?」

僕としてはそれは、コフアちゃんの膝の上にびびつて僕の頭があるのか、の質問だったのだけれど。

「「めんね、ダットくん。わたしのせいで」

「え、ちょ。コファちゃん？ 話が見えないんだけど」

暗闇で表情が見えないせいだろうか。見事に見当違ひの返答が戻ってきた。

まあ、彼女の語ったそれが真つ暗な場所にいる理由に繋がるものだつた少しさは冷静になられましたが。

コファちゃんが落ち込んだ様子だつたので、とりあえず僕は体を起こして現状の把握に努めることに。

えーっと。確か。

「僕、コファちゃんの弟にコファちゃんが地下壕に忘れ物したって聞いて探しに来たんだよ。それで地下壕の入り口のところまで行つたんだけど」

その後の記憶がすっぽり抜けているんだよね。困ったことこのどつしてこんなところでコファちゃんの膝枕にお世話になつていたのやら、皆田見当が付かない。

首を傾げたところで暗闇が怖いのかコファちゃんに手を握られた。安心させるように手を握り返せば、コファちゃんは「それ、違う」と声を出した。

「わたしそんなことあの子に言つてない」

怪訝そうに返してくるコファちゃん。

「ええ？ でも」

僕とエリクが弟くんから聞いたのは間違いないのに。

「リオが、そう言つたの？」

「そうだけど……」

コファちゃんは弟にそんなこと言つていらないといつ。だとすれば一体何故かの少年はあんなことを言つたのだろう。首を傾げる僕に。

「じゃあ、やっぱあいつだ」

心当たりがあるらしく、コファちゃんが唸つた。

「ギド・ルヴェール。あの人だよ。絶対そう。気絶してたダットくんを連れてきたのもあの人とその仲間だったもの」

「ええ？」

思いもよらない名前が飛び出してきて、僕の顔は苦く歪んだ。

幸い暗闇の中でコファちゃんに見せることもなかつたが、嫌悪感とこうかなんとこうか、呆れにも似た感情が湧き上がる。

思い浮かんだのはエリクと同じ赤い髪。田つきがいかにも荒んでいますと言わんばかりの少年。

ちなみに僕やコファちゃんより三つ年上で、しかも弱い者いじめが大好きで、柄の悪い連中とも付き合ことがあるという噂の大人でも手こずるタイプの人間である。

取り巻きも何人かいて、そいつらと一緒に僕にも何度も絡んできたことがあるけど、そういう時は大抵ライナが対処してくれていた。エリクとは違う意味で彼女とは犬猿の仲な間柄だ。

「あの問題児が……？」

ギドは元々、ライナのことを敵視していた。そのライナに守られる僕のことも、いつも蔑んだ目で見ていた気がする。

その始まりは確か、何年か前にギドが僕に絡んできてそれをライナがケガをしながらもボコボコにしたことだ。

ギドは体格がよくて、ライナはどうやらかといふと細身。

その体格差があつて負けたという事実はある少年には屈辱的だったろう。

しかもその後も彼女によつて軽くあしらわれることが多く、ギドの怒りは募る一方だつたはず。

そこにきて、僕がライナから避けられるというこの状態。もし、いつも僕にべつたりだつたライナが僕から離れたことで、彼らが行動を起こしたのだとしたら。

「うわあ……ヤバイ」

いろんな意味でヤバイ。

ライナのことだから、知恵を働かせてどうにかしようとするとどうけど。きっと彼女は怒り狂つてギドを殴り飛ばすだろ。そう。魔法を使ってでも。

まだ僕を友だちだと思ってくれていれば、だけど。でも、そうだとすれば。

僕は手を握りしめているコファちゃんの方向を見る。

「……もし、僕の考えることが当たりなら。謝らないといけないのは僕の方だよ」

彼女にはなんら関係ないはずだ。むしろこちらがコファちゃんを巻き込んだことになるのだから。

そう思つてのことだつたのだが。

「ううん。それはわたしの方だよ」

コファちゃんは強く否定した。そして次に続いたのは予想外の言葉だ。

「あのね。少し前にあの人があの人に彼女になれつて言つてきたの」「ええっ！」

地下の石畳に反射して、思つた以上に声が響いた。慌てて余つている方の手で口を押さえるが、遅い。

「ごめん、と謝るとコファちゃんは『いいよ』と笑つて許してくれた。

「そんな気なかつたから断つたもん。そうしたらあとで恥をかかされたつて怒つてて。学校からの帰りとか、しつこくてずっと逃げたの。それで今日その時のこと急に謝りたいからつて言われてね。取り巻きの人たちに連れられて路地に入つてしまはへしたら、甘い香りがしたの。そしたら急に眠くなつて」

なるほど。それでついて行つたらこんな状況になつた。というわけか。納得した。

でも軽率だよ。コファちゃん。

あの手の連中はそんなにあつさり引いてはくれないものなのに。流石に子ども相手にそつまつのは厳しいかな、と喉元のところで止めておいたけど。

僕も人のこと言えないし。

コファちゃんの弟はきっと彼らの仲間に言い含められてたんだろ

うな。だから「じけいだんのおじさんたちにはいつちやだめ」だつたんだ。彼が実際のところどこまで知つていてそう言つたのかは謎だけど。

ここから脱出する望みはそのコファちゃんの弟とエリクだけど、ここがどこなのかわからない以上、期待しない方がよさそうだ。

それにしても。

甘い香り。

それを聞いて僕は、ここに来る直前のこと思い出していた。あの甘い香りを感じた直後に、僕は意識をなくしている。そのことからわかるのはあれが眠り薬の類のものということだった。

あいつたものは普通大人の手で管理されているものだから、普通の十三歳の少年が簡単に手に入れられるはずもない。いつたいどこで手に入れたのやら。

柄の良くない大人たちとも繋がりがあるともないとも噂があるから、そのあたりからかもしだれないが。

「僕も、地下壕のところで甘い匂いを感じたよ」

「そう、なの？でも、おかしいよ。ダットくんは関係ないのに」  
コファちゃんは心底不思議そうにしていたけれど。

「そうでもないよ」

僕はそう言つて笑う。

「コファちゃんの言うことも間違いないと思うけど。今回このことは僕も多分関係してる。あのギドって子は、何度も僕に絡んでこようとしてたけど大抵はライナに阻まれてたからね。因縁があるんだよ。だからライナが僕と離れてる今が良い機会だと思ったんじやないかな。僕を楽にいじめられるし、それでライナにも報復できる。ずいぶんと浅はかだけど」

よほど腹に据えかねるものがあつたのだろうが、この行動はあからざまで幼稚すぎる。

ただの子ども同士の喧嘩であればどうということはなかつた。だが、このことが周りの大人に知られれば、何かしらの処罰が彼

らには「えられるはずだ。それぐらいは容易に思いつくだろう」

「え、と。ダットくん。前とちょっと変わった？」

戸惑つたようにコファちゃんが尋ねてくる。いうじう展開はもう何度目になるだろう。仕方のないことだとわかつていいけれど、胸の奥が痛くなる。

教室の中で奇異の視線を浴びることはもう慣れた。というか、前世の記憶が戻る以前も似たような視線を向けられる事はあったのだけれど。

「気持ち悪い？」

「え。そんなことないよ」

意外なことに、速攻で否定された。

「ちょっとびっくりしたけど。今ダットくんがいてくれてるから泣かずにするんだよ。わたし」

コファちゃんはそう言つと僕の方へ体を寄せてきた。

「ああ。なるほど。この状態だからこそ、彼女はそう言えるのか。

「真っ暗はきらい。こわいから。でも、ダットくんだいて一人じゃないから。大丈夫」

健気だなあ。と思いながら、僕は改めてコファちゃんの手を握り返した。

「それは僕も同じだよ。一人で放り込まれていたら……きっと混乱して喰いてたと思うし」

状況もわからず、誘拐？ 人さら？ 僕もしかしてどこかに売られるの？ と不安に悶えていたはずだ。

実際は単に悪ガキの悪戯 というには度が過ぎるものだとは知らずに。

これは確実にトラウマの対象範囲内だらう。

「蹴り倒してえ」

想像ではなく現実的に、報復も兼ねて同じ日に遭わせてやるうが。無理だと思つけど。

イライラと見えない空間を睨みつける。

そんな僕の不穏な空氣に気がついたらしきユファちゃんが戸惑つたように「ダットくん？」と声をかけてくる。

あ、しまった。不安にさせたかも？

「ああ、なんでもないよ。ちょっとこっこを出た後にあいつをビックしてやるうかと考えただけだから」

「…………ダットくん。こわいよ」

思い切り声に不機嫌さが出ていたようだ。ちょっと反省。けどまあ、僕が実際にどうこうすることはおそらくない。きっと周りの人たちによつて成敗されることになるだろうから。

それにつまでも暗い思考に囚われているのもあまりよくない。

「それにしても、こっこ？」

僕は気を取り直してユファちゃんに尋ねてみる。

ユファちゃんもそれでほつとしたのか、繋がれた手から緊張が抜けた。

「地下、つていうはさつき聞いたけど……」

暗闇なのでよくわからないが、水が滴る音が聞こえる。

そう遠くない場所のようなので行つてみようかとも思ったものの、この暗闇ではどこになにがあるかわからない。明かりがないと危険だろう。

最もそれも光を生み出す【照明】という初歩的な魔法が使えれば、の話で、生憎と今の僕は【魔素】を集めることすら出来ていない状態。もちろん【呪文】も記憶していないからそれは無理だし、ユファちゃんは魔法を使う素質を持たないようなので、頼めないし。

「どこの地下壕、なのかな」

「うつん。違うみたい。えっと。見えないからわからないと思つけど。たぶん牢屋？」

「は？」

「自警団の事務所にあるのとよく似てたよ。あそこと違つて地下だし、光も入つてこないけど。たしか、あの人がダットくん連れてきた時にずいぶん昔に作られたものだつて話してた。あと、ここでた

くさん人が死んだんだぞ……って」

最後に彼女が震えながら付け加えたひとことに僕は唸つた。

どう考へてもそれは脅し文句だ。

実際に人が死んだことがあるのかもしないけど。それだと後にこう付け加えてそうだ。

「もしかして、ちゃんと埋葬されてない人間もいるから【グラン・ヴ・ディール】が出るかもって言われたりしなかつた?」「

【グラン・ヴ・ディール】という言葉を口にした時点でユファちゃんの肩が跳ねたけど、それも仕方ない。

「……言われた」

素直に認めるに、彼女はまた僕の方に肩を寄せる。正直に言つと僕もそれは願つたり叶つたりだつたりした。

【グラン・ヴ・ディール】とはこの国で使われている古い言葉で【実体なき死をもたらす者】の意味を持つ。恨み辛みを残したまま死んだ者や、まともに埋葬されることがなかつた者が大地に還れずに【魔素】を纏つた存在とされており、要するに……日本で言つ幽靈のような魔物だ。

存在を保つためには人間の【生氣】が必要で、人間を襲う。時に人間の体を乗つ取り、それを操るという。

僕が父さんに疑われた【魔物憑き】とは正にこの【グラン・ヴ・ディール】が大元である。

「……最悪」

聞かなければよかつた。

子どもたちに対する戒めとして話されることもあるソレは、否応なく恐怖を植え付けられる。

ぐすつ、とすぐ横で微かな鳴き声がして僕はキレた。

「やつぱりあいつ、一発ぶつ飛ばしとか」

こちらの年齢が十歳であることなど、既に吹つ飛んでいた。体の大きさも明らかに負けるが、関係ない。

向こうは遊び半分かもしれないが、これから先少なくともユファ

ちゃんは暗闇に恐怖を覚えることだろう。

僕だつてこの先しばらくはうなされそうだ。

それを、そうしてしまったことを。僕は許したくない。

コファちゃんと繋いでいる方の手を怒りにまかせて握り込んだ  
その時だつた。

『ふむ。心地よき想いじやの』

暗闇の一点に突如、青白い光が浮かぶ。

僕もコファちゃんもその唐突な現象にぎょっと目を見開いた。

『怒りや恨み。それは良き感情よ。我らを引き寄せ、力を与える』  
声と共にぼんやりとその光は広がつてしまい、やがて一つの形を取  
る。

途端、体中の皮膚の上を電流のような怖気が走つた。

コファちゃんがガタガタと体を震わせ始め、僕もまた強張つた体  
で青白い光の固まりを呆然と見つめる。

『くくく。大人しく眠つておつたといつに。わざわざ贅を用意しよ  
うとは人は愚かぞ。あのまま封を解かねば我らは完全に力を失い、  
消え失せたであらうに』

形を成したそれは、愉快そうに笑う。

ただし、それは声を聞くからこそわかるもの。

骸骨にぼろぼろのローブとマントとを羽織つただけの存在に表情  
は存在しなかつた。

## 噂をすれば影

噂をすれば、影がある。

こんなところで日本のことわざもじを思に出でなくていいだ  
らう、と場違なことを考えながら、僕はコフアちゃんを背にして  
目の前のそれを睨みつける。

ていうか、よりもよって「」でそれに遭遇しようとは。

『小僧よ。その氣概は認めるが、そのおなごの』とき顔ではいささ  
か頼りないので。守るための力も有してはおらぬだらう。逃げ場もな  
い。我らに抗うは愚かぞ』

「……【グラン・ヴ・ディール】

「の世界に生きる全てのものにとつての天敵。

【実体なき死をもたらす者】。

『ふむ。我らが名をそつ呼ぶか。間違いではないが、いわとか芸が  
なくはないものか』

かたかたときこぢなく、ソレが腕を組む。

その行為は人間臭いのだが、あくまでも魔物。人間側からしてみ  
れば害を為すものでしかないし、おまけに実体がない存在であるの  
で武具が通じないときた。魔法に通じていれば別だらうが、残念な  
がら僕もユニアちゃんもその手段を執ることが出来ない。

逃げなければ、ということが脳裏に浮かんでいるが、青白い光を  
放つ【グラン・ヴ・ディール】により浮かび上がった室内は正に牢  
獄。

地上へ向かっている階段があるのは見えたものの、それは仕切ら  
れた柵の向こう側。強いては【グラン・ヴ・ディール】を超えた先  
だ。

ただでさえ肌寒かつた空間が、さらりと冷えたよつて感じられた。

「い、や。たす、けて」

ユファちゃんが絶望からか、僕にすがりつく。

それは、僕も同じだ。と頭の中だけで返事をして、握った手を握り返す。

元気づけたいのは山々だったが、残念なことに僕にも余裕はなく、逃げ出す算段をつけようとは思うものの、それよりも先に両親や他の大人たちに聞かされた話ばかりが頭を過ぎた。

【グラン・ヴ・ディール】の糧。生きた人間の【生氣】のことを。

『主らの恐怖を感じる。恐れ、おののいておるな。良き事よ。死とは恐ろしきもの。我らはまさにそれを具現化した存在であるのだか

ら』

【グラン・ヴ・ディール】はそう言つて僕らの元へ動き出す。地面などまるでないように水平に、だ。

背後には壁しかない。逃げられない。ギリギリまで後ずさりして、ユファちゃんを隠すようにすることしか考えられなかつた。

心臓がばくばくと音を立てる。

よりもよつて。と僕は歯がみする。

どうして、初めて遭遇する魔物がコレなんだろうか。

どうして、僕はまだ魔法を使えないんだろうか。

完全な無力状態でのこの遭遇は紛れもなく……即死フワグ全開だ。

「ぐ、る、なつ！」

みつともないと感じる余裕もない。

おぞましいと感じる魔物相手に、片腕を振つて遠ざけようとする。物質的な攻撃は無意味。それを知つていて、けれどせざるを得ない。

『足搔くは人のさだめ。それもまた美味よ。されど小僧。我らに触

れるは軽率ぞ

愉快、と言わんばかりに【グラン・ヴ・ディール】は振り回す僕の手に自らの体を触れさせた。

い。

途端。

「……っ！」

ざわり、と全身が鳴った。

【グラン・ヴ・ディール】に触れた手から、何かがじつそりと抜けた。そんな感覚があつて、僕は体中の力が失われたことを知る。する、と重力に従つて手も、足も、体さえも床へ向かって崩れ落ちた。

「ダットくん！」

からうじて、と言ひべきか。背後のユファちゃんが力を失つた僕の体を支えてくれたので、床に転がる事態だけは避けられた。

だからといつてそれで状況が好転するわけでもなかつたんだけど。

「……ユファ、ちゃん。に、げ」

こんな台詞は死亡フラグに定番だし、実際に無駄なんだろう。それでもここで足搔くことは、やめられない。やめたくない。

その思いを持てる人間だからこそ、彼女にもそうしてほしいの願うのは傲慢だろうか。

「だめ。ダットくん。ヤダ。死んじゃ、やだ」

ボロボロとこぼれる涙。それが僕の体の上に落ちていく。ぎゅつと強く抱きしめられて、僕はその暖かさに切なくなつた。そこで悟る。

多分もう、彼女は逃げないだろう。そして逃げられない。

死んでほしくないと言いながら、そこから動かない。誰かが死ぬという事実に直面して、思考がそれを否定して、それ以外考えられなくなつていてるんだなつ。

死が間近に迫つているからだろうか。それもそれで、仕方ないことだと頭のどこかで冷静な声がした。

僕にとつての二度目の死。

一度目は氣が付いたら終わっていた。

一度目は、それを与える死神がすぐそこにいてカウントダウンを始めている。

せめてもの救いは、すぐ側に暖かな誰かがいてくれることかもしない。一緒に死ぬ予定の彼女は……嫌かもしれないけれど。

「『』めん。ね

そう口にすると、ユファちゃんは必死に頭を横に振った。

「ちが、いや。ダットくん。だめ」

泣いている。涙をこぼして、僕が死ぬことを否定して。その姿に思い浮かんだのは母のこと。

……また、泣かせるのか。

心配をかけて、気が付いたら涙を浮かべる彼女が、息子の死を悲しまないわけがない。

せめてひとこと謝りたいけれど、それはもう無理だらう。生を諦めた僕に死を与えるはずの死神。彼の者はもうすぐそこで『げに珍しき者に出会うたわ』

何か考え込んでいた。

「……？」

骸骨の頭の部分は僕たちの方を向いておらず、ただそこで漂っている。

僕たちに死をもたらすはずだった【グラン・ヴ・ディール】の動きの変化。それが何を示すのか。この時の僕は全く気がついていかつた。

青白く、不気味に浮かび上がる【グラン・ヴ・ディール】が動くまで、そこからはほんの数秒。

『くくく。我らとて異端なる亡者の徒。なれど、我ら以上に理解できぬ者がいようとは』

ずい、と僕に触れる寸前にまで骸骨の顔を寄せた【グラン・ヴ・ディール】にユファちゃんがひつ、と声を上げて氣を失う。僕を支えていた力が抜けて、一人揃つて床に倒れる。

【グラン・ヴ・ディール】がそれを見て、また笑った。嘲笑と取れるその笑いに、僕の頬は吊り上がった。

「殺す、なら、殺せ」

既に逃げられる状態ではない。それがわかっているからの言葉だつたのだが。

『それではつまらぬよ。【二重】<sup>ふたえ</sup>の者』

青白い光がそうして僕らの側から遠ざかる。

そして

『そなたは、今殺すに惜しい

僕は呆然とそれを聞いた。

「どういう、意味、だ」

『くくく。知りたいか。ならば、知れ』

【グラン・ヴ・ディール】の指の骨が、投げ出された僕の手を指示示す。それは、先ほど【グラン・ヴ・ディール】に触れた手だった。

『触れてわかったのだ。そなたは我らと似て非なるもの。【二重】<sup>ふたえ</sup>に重なりし異なる色を持ちし者。それ故の異端。それ故の力。我ら

はそれを見たいのだ。そして知りたい。されどそなたは未だ未熟。よって今はそなたを生かすことにしたのよ。いずれ、刈り取るため

にのう』

【グラン・ヴ・ディール】に触れた手に熱がこもる。

『既に印は付いた。それが証よ』

それは冷たく突き刺すような熱で、見れば手の甲に青白い光が宿つていた。

『それは我らを示すもの。近くあればそなたを導く。故に我らは行こう。そなたが我らの背に届くまで、彼の地にて死を喰らい漂う者となろうではないか』

かかか、と高らかに笑い、【グラン・ヴ・ディール】は僕に背を向けた。

『愉快、愉快。故にそこな娘も生かしてやろうぞ。印も付けぬ。今、我らが望むはそなたと心地よき墮ちし御靈のみよ。最早只人には興味がない。くくく。成長せしそなたの御靈。それを刈るのが楽しみよ』

くくく。かかか。

耳障りな哄笑が地下の狭い空間に鳴り響いた。

それを最後に青白い光に包まれた骸骨の姿がゆっくりと小さくな  
る。

徐々に暗闇に包まれていく視界。

僕の意識はそれに同化するように、遠くなつていった。

## 刻まれた印、その言葉の意味

目蓋の外の明るさ。

ふとそれに気が付いて、僕は目蓋を開いた。

「ん……」

急速に開けていく視界にぼうっとする頭はついていけない。

石の天井を見上げて「あれ?」と首を傾げる。

似ているけれど、違う。

僕は重い頭を左右に振って、自分の居場所を確かめた。寝ている場所はベッドの上。けれどその寝心地はいつも使っている自分のものよりやや堅い。さらには薬の匂いが染みついており、全てが白に染められていた。

それが、自分が寝ているものともう一つ左側にあり、そこには茶色の髪の少女が一人目を閉じ横たわっていた。

「ユフアちゃん」

その寝顔を見て、僕の頭は急激に冴えていった。

脳裏に浮かんだのは、暗闇の中で出会った【実体なき死をもたらす者】。

ぞくり、と背筋に悪寒が走った。

現在いるその場所のことさえ忘れて、起きあがりかける。だが、思つたように力が入らない。

両肘を立てた時点で目が回り、枕の上に頭が逆戻りすることとなつた。

「うーー

眩暈が落ち着くまで、数秒。仕方なく僕はそのままの状態でユフアちゃんの様子を窺うこととした。

あれからどれぐらい経過したのかわからないが、現在は昼間のよ

うで、その光の中で彼女を見る限り顔色は正常。胸の当たりが規則的に上下しているのがかるうじて確認できた。

何故かろうじて、かといふと。同じ色の髪の女性が僕に背を向けてベッドに向かい、うつ伏せになつていたからだ。眠つているようで顔が見えないが、体格からしてコファちゃんの母親だろう。僕が眩暈で倒れたときに結構な音がしたのに、目を覚ましていないところを見ると、余程疲れているかも知れない。

そして。僕はその反対側、木で作られた棚と並べられている瓶とおぼしきものを見て。

「あー、ここ。バスク先生の診療所か」

何度か来たことがあるこの場所の記憶を探り当てた。

「……そつか。よかつた」

僕は大きく息を吐く。

何がどうなつたのか、ここでようやく推察できるようになつていった。そうして今がが太陽が昇つている昼間であることも安堵した。明るいし、暖かい。

僕は光が差し込む窓の方へ左手を伸ばす。太陽の光。それ自体には届かない。それでも反射による温もりは充分に感じ取れる。自分たちを包み込んでいた暗闇は取り払われたのだと、僕はようやく実感出来た氣でいたのだけれど。

不意に、左手の甲に青白い光が灯る。と同時に、左手から全身に向かつて刺すような痛みが走つた。

次の瞬間。

青白い光は手の甲に船の碇に似た形を象り、ぼつ、と炎のようにな燃え上がつた。

「……っ！？」

あつという間にそれは消え去つたのだが、左手の甲には青白い光が象つたものの形そのままの痣が刻まれていた。

僕の耳に、今はもう聞こえないはずの【グラン・ヴ・ディール】の声が甦る。

『くくく。知りたいか。ならば、知れ』

『そなたは我らと似て非なるもの。【一<sup>ふたえ</sup>重】に重なりし異なる色を持つし者。それ故の異端。それ故の力。我らはそれを見たいのだ。そして知りたい。されどそなたは未だ未熟。よつて今はそなたを生かすことにしたのよ。いずれ、刈り取るためにのう』

『既に印は付いた。それが証よ』

暗闇が、僕の後ろからやつてきて包み込んでいく。そんな気がした。

太陽の光があろうが、その暗闇は光を飲み込み、僕を飲み込み、さらに大きくなつていぐ。

温まつたはずの体が、青白い光によつて熱を奪われたとでも言えぱいいだらうか。

暗闇の中で感じた冷たさが甦つてきて、僕は冷え切つた自分の体を抱きかかえることになった。

『それは我らを示すもの。近くあればそなたを導く』

あの魔物との出会い、会話が再生されていく。

その答えは、僕がある【グラン・ヴ・ディール】に今も、そしてこれから先も囚われ続けるということ。

死を逃れた安堵はある。けれど、それは単に先送りされたに過ぎないことであるのは明らかで。いずれは死を与えられるという恐怖に変わりはない。

全身を刺すような痛みを感じて僕は小さくつづくまつた。

「なんだって、僕がこんな目に……」

前世の記憶を取り戻してからとこゝもの、イベント由白押しすぎ

やしないだろうか。

前世に、魔法に、幼馴染みに、魔物遭遇。更には、死亡フラグの立った左手の印。

僕が望んでいたのは、こんな山あり谷ありの波瀾万丈な人生じゃなく、平凡で平穀な普通の生活だったはずなのに。RPGじゃあるまいし、あんまりだ。

どうして、前世の記憶なんて甦つたんだ。

どうして、【橋本誠也】の死をそのままそつとじておいてくれなかつたんだ。

どうして、【ダット】がこんな日に遭わされる！

「う……ううう」

いつそのこと、発狂できていたのならまだよかつたのかもしれない。

幼い少年のまま、未熟な精神のままなら、そう出来ていたかもしれない。

でも、僕は子どもの体の中に大人の思考を併せ持つている。だからこそ

「ふざけるなあっ！」

沸々と湧き上がってきたのは、怒りだった。

それは、恐怖を克服するための逃げ場所でもある。

目を閉じれば、あの暗闇が。青白い光が甦つてしまつ。

触れた手から【生氣】を奪われるあの感触が、つい先ほど起つたばかりだと、そう錯覚させてしまう。

思い出したくないことだつたが、思い出さずにはいられないほど闇の中での出来事は強烈だつたし、恐怖を呼び起こした。

だけど、だからつてそこで大人しくしていられるほど……僕は弱くない。

そう信じたくて、【生氣】を失い、冷たくなつている体を温めたくて、叫んだのだと思つ。

「つー？」

僕の叫びに反応して、コファちゃんのお母さんが飛び起きる気配がした。

更に。

「ダット！」

遠くから近くへやつてくる耳慣れた声。

はつと顔を上げると、鮮やかな金色の渦が視界に飛び込んできた。笑みではなくて、必死さを覗かせるその人は。

「……かあ、さん」

「ダット！」

僕が彼女を呼ぶなり、その瞳に涙が浮かぶ。

ああ。これで何度目になるんだろう。

あの後頭部をぶつけた事件からずっと泣かせ続けているようではどういう顔をしていいかもわからない。

「ごめん。また、泣かせちゃった」

情けないこと、他の言葉が浮かばなかつた。

そう言つしかなくて、目を伏せた僕に母さんは笑う。

「無事なら、いいの」

頬にそつと暖かな手が当たられて、僕は。

「……うん」

その優しくて身を委ねるよつとして、目を開じるのだった。

僕が目覚めたといつ知らせはすぐさま自警団事務所に伝わつたらしい。

母さんが付きつきりで、僕に薬草入りのスープを飲ませている最中に自警団の団長さんがやつてきた。

正直、薬草入りスープは不味いので助かつた。と思つていたら、

その後ろから父さんまで現れて「まずはそれを飲め」と強制されてしまった。

つまらないものである。

涙が出ていたほど美味しくないスープをぱりぱりにか完食。

その「」優美に甘い果実を剥く母さんの隣に、団長さんは立っていた。

「すまないが、君には聞きたいことが山ほどある。起き抜けで悪いんだが、答えてもらえるか?」

いつもどおり構えた印象の団長さんの顔は、どこか疲れて見える。

僕が頷くと、彼は隣で寝静まっているコフアちゃんを氣の毒そうに見つめた。

白警団の仕事に関わることだから、ヒコフアちゃんのお母さんには席を外してもらっている。だがそれは建前で、田代覚める度に恐怖に怯えるコフアちゃんを見続けた彼女の心を思つての計らいだったようだ。

それなら母さんも。とも思つただけど。彼女は頑としてそれを聞き入れなかつたのでそのまま側にいる。

あまり聞かせたくない内容、なんだけどな。

「彼女は君よりも先に目が覚めたんだがね。錯乱していく、断片的にしか情報をもらえなかつたんだ。それでもこんどもない事態だといつ認識は持つことが出来たんだが」「

「……どこまで、聞いたんですか?」

「【グラン・ヴ・デイール】」

団長がその名称を呟いた途端、母さんがびくんと震えた。ホラ、言わんこっちゃない。

父さんがその後ろで、母さんの肩を優しく撫でて落ち着かせる。

「あれが出たと聞いた。少ないが、町中でも田撃者がいる」

「それ、頭が骸骨の青白っぽいやつですか?」

「そうだ。聞いた話では笑い声を上げながら去つていつたらしい。

君が遭遇したのはそいつか？」「

団長さんは僕の様子を注意深く窺つて見えた。  
きっと、どこかおかしなところがないかを探つているんだ。」

「そうです」

僕は頷いて、あの【グラン・ヴ・ディール】に触れられた左手を  
右手で覆う。

「本當なら、僕たちはアレに遭遇した時点で死んでました。でも、  
あいつは」

僕に触れた途端、態度を変えた。

その理由も、僕に語つてみせた。

これをこのまま話していいものか、僕は迷っていた。

「ダツト」

包丁と果実を手放した母さんの手が、僕の両手に重ねられる。  
冷たく冷え切っている僕の手とは違う、温かい手。

「言いたくないのなら、言わなくてもいいの」

優しい母さんだからこそその言葉だったが。

「いや、話してもらわなくては困る」

自警団の団長としての立場からだらうか。彼はぱつたり母さんの  
思いやりを切り捨てた。

「そんなん

母さんが立ち上がった拍子に金色の波が僕の目の前で踊る。  
でも、それを止めたのは父さんで。

「キーラ」

母さんの肩を掴んで、自分の方に向に引き寄せた。

「ガリオ、どうして……」

「すまないキーラ。だがこれがこの町を守る自警団としての務めな  
んだ。だから」

父親としてのジレンマもあるはずだが、父さんはちゃんと自分の  
務めを理解していた。

僕一人よりも、町を守ることの方を優先したのだ。

父さんと母さんの間で、複雑な視線のやり取りが行われる。その最中。

「大丈夫だから」

僕は母さんを見上げて笑つて見せた。

「だから、ちゃんと側にいて」

それは、息子から母へのお願いで。

「……ダット」

潤む瞳をそのままに、彼女はそつと僕を抱きしめてくれた。人前だから恥ずかしい気もするけど、この際それに甘える。人肌の暖かさを得て、僕は団長さんを見上げた。

「僕はあの【グラン・ヴ・ディール】に触れた【半死人】です」

## 課せられたものの決断

実体を持たない魔物【グラン・ヴ・ディール】。

彼らは【魔素】を纏い、形を成しているとも言われているが、その実、生物の【生氣】を糧として存在している。

それはこの世界に生きる者であれば、幼い頃に聞かされる恐ろしい警告だ。

彼らに物質的な攻撃方法は通用しない。

魔法だけが彼らに抗うための手段であり、それが出来なければ逃げろというのが定石である。

そして捕まれば最後、彼らに触れられた者は例外なく【生氣】を奪われ死に至る。

稀にすぐには死なない例もあるようだが、生者の証を奪われたのだ。そうなつた者にはもう、未来はない。肉体は温かみを失い、精神を病み、幾ばくかの年月を経て心の臓は停止する。

故に人はそうなつた者たちのことを【半死人】と呼ぶのだが。僕が告げた事実に団長さんは驚かなかつた。そして父さんも、少しだけ表情を険しくしたけれどそれだけだ。

その中で。

「……違う」

母さんだけが、僕の言葉に過剰反応を示した。

「違う、わよね？」

【生氣】を失い、冷え切つた僕の体を支える手に力がこもる。

違う、そんなことはない。認められない。

そんな気持ちが伝わってくるため、嫌でもわかる。彼らは僕が【半死人】となつたであろうことに気が付いていたのだと。

それもそのはず。今現在も僕の体は冷たいまま、心臓の鼓動も弱々しくしか感じられない。

診療所にいる時点で医者にはそれら全てを診られているだろうし、あれからどれぐらいの時間が経過したのは知らないが、この両親が【グラント・ヴ・ディール】のことを聞いて、こうなった僕とその関連を疑わないわけはない。

「じめん。母さん」

これ以上、泣かせたくないのに僕は母さんを慰められない。その現実に僕は苦笑する。

「違わないんだ。僕はあいつに触れた。そして【生氣】を奪われて、でも生き残った。あの【グラント・ヴ・ディール】の気まぐれでね」「ダット！」

お願いだから、そんなことは言わないで。  
そのひとことに全てが込められていた。

けれどこれは純然たる事実であり、そして少しだけ違っていた。

「大丈夫だよ母さん。僕はまだ当分死れない。【半死人】ではあるけど、あいつの目的が果たされるまでは生かされ続ける」

おそらく

僕の予想が正しければ、あの【グラント・ヴ・ディール】が残した左手の【印】はそういうものだ。

あいつの言う力を手にするその時まで、僕は生きることになるだろ。

「【グラント・ヴ・ディール】は、僕に興味を持っていた。ううん。僕というか、僕が持つある力と言った方がいいかもしない  
あまり、思い出したくないあの光景。

【グラント・ヴ・ディール】はお気に入りの玩具を見つけたと言わんばかりに愉しげだった。

「お前の、持つ、力？」

「うん。残念ながら僕にその自覚はないんだけど。あいつは僕に触ることで、僕に何かそういうものがあるっていうことに気がついたみたいなんだ。あいつはそれを手にした僕を刈りたいと言っていた」

「 とこつことは、」

「 ここまで言えば、あとは直すと答えは見えてくる。僕が頷くと、父さんも団長さんも押し黙つた。

そうするしかなかつたのかもしれない。

「 僕の左手には、あいつの印が付けられてる。あいつの言つ力がなんのかはわからないけど、僕がそれを手にしたら、きっとあいつは現れる。だから、それまでは僕も生きることが出来ると思つ。町に関してはなんとも言えないけど。何もせずに去つたのであれば、町の住人には興味がなかつたってことじゃないかな」

僕という標的を見つけたことで、【グラン・ヴ・ディール】は満足しているように見えた。だからこそ、コファちゃんを見逃すなどということをしたのだ。

隣に設置されたベッドの上で静かな寝息を立てる少女を見て、僕はシーツを握りしめる。

「 ダット。彼女は……？」

父さんが釣られてか、コファちゃんの様子を窺う。声色から、彼女が僕と同じ状況に置かれているのではないかという心配をしてくるのだとわかつた。

バスク先生が診てくれているから彼女が僕とは違つことを知つているはず

そう考えたが、もし僕が気を失つた後に【グラン・ヴ・ディール】が戻つてきていたとしたら。ということに思い当たつた。

けれど、彼女の血色は良いようだつたし、あの時の【グラン・ヴ・ディール】の様子からしてそれは考えにくい。あの言葉が信用できるのならば、だが。

「 彼女の体温は？」

触れられていなければ、正常のはずだ。

「 バスク先生は大丈夫だと言つていたんだが……」

父さんは言い淀んだ。

そこで僕は最初に彼女が錯乱していたという話を思い出す。

コファちゃんは、あの暗闇の中、恐怖の対象となる存在に遭遇し、極限状態の中で僕の【生氣】が奪われる様を叩撃し、そして触れる寸前まで近づかれた。

まともな子どもの精神では耐えられないのも頷ける。けれど。

「バスク先生の診断で間違つてないよ。コファちゃんはあいつには触れてない」

少なくとも、身体的には問題ないはずだ。

もし、先にあいつが彼女に触れていたら違つていただろうけれど。それを考えた自分にぞつとして、唇を噛んだ。

「そうか。ならいい」

父さんはそう言つと、笑みを浮かべる。

「よく、彼女を守つたな」

「……褒めてくれるんだ？」

むしろ、コファちゃんが錯乱していると聞いて「守れなかつた」と感じているといひなのに。

「当たり前だ」

彼は父親の顔をして嬉しそうに頷いた。

「お前は、彼女の命を自分の命を張つて助けた。それは要するに女を守れる男になつたつてことだわ。褒めるに決まつてんだろうが。お前はオレの自慢の息子だよ」

特に照れた様子もなくそれを言えてしまえるのは、やはりこの国が日本と違うからだろうか。

言われた方としては、物凄く恥ずかしいんですけど。

「う、あ。ありがとう。父さん」

あまり顔色が良くないう類に熱が集まる。

【生氣】を奪われても、いつも時には熱を感じられるところこれがわかつて少し嬉しい。

父さんに褒められることも、もちろんのことだ。

母さんが僕と父さんのやり取りを見て、さすがに僕を抱く手に力

を込める。

「そうね。あなたはユファちゃんを救つたのよね」

少しだけ穏やかになつた母さんの表情に胸をなで下ろして、僕はただ一人何も言わない団長さんを見上げた。

団長さんの口元は引き結ばれていて、表情も硬い。僕たち親子の傍目から見たら恥ずかしいだろう光景を堪えているのかにも見えたが、目はそう言つていなかつた。

何か重要なことを考えている。そんな田だ。

「団長さん？」

声をかけると彼はゆっくりと僕に視線を合わせた。

「まだ、他にも聞くことがあるんですね？」

「……ある、というか。あつた、といつべきか」

団長さんはそう言つと深く息をついて頭を搔いた。

「君たちふたりが閉じこめられた経緯や、その犯人のことも、と思つたんだが、君の話の内容が思つた以上に深刻なのでね。領主さまに取り急ぎ報告する必要がありそうだ」

「団長……」

父さんが領主といひ言葉に反応した。表情には驚きと不安。その両方が表れている。

「すまない。ガリオ。これは私一人の采配で決めていいことではない。君の息子の急激な性格の変化も、この件がなければ多少奇妙でも「そういうこともある」で済んでいただろうが……」

意図したことではなくとも【グララン・ヴ・ディール】が出現し、僕に興味を示して印を残したことは無視できない。

つまりはそういうことなのだ。

「これまで【グララン・ヴ・ディール】が意図的に誰かを生かし、刈ると宣言したことなど聞いたことがない。搜せばあるのかも知れないが、だとしてもこの状況は放置しておけることでもないだろ。手遅れになる前に、何か手を考えるべきだ。それはお前でもわかるだろう」

「……一人の子どもの命よりも、大勢の命が大事、と。そういうことですか」

「そこまでは言つていない。お前の息子が大事だという思いも理解している。だが、自警団の持つ役割を忘れてくれるな。つまりはそういうことだ」

団長さんと父さんの間に緊張が走る。

団長さんの言つていることは至極まともだ。そして父さんが思うことも、人としては間違つていない。

「できるだけ君たちには配慮しよう。ただ、過度の期待はしてくれんな」

団長さんはそう告げると診療所の病室から去つていった。  
父さんは追わない。といつより追えないといつのが正しいだらうか。

自警団員から見れば、団長さんの決断は間違いじゃない。組織に属する人間として、制服を着てこの場にいる以上、父さんは自警団員として振る舞うしかないのだ。

「ガリオ」

母さんが父さんの腕にそつと触れる。

「父さん」

僕が呼ぶと、父さんが振り返る。

「すまん。ダシット」

これからのことと思つてか、父さんの体は震えていた。泣いているように見えるが、瞳には涙の欠片も見られない。

「お前を、守つてやれないかもしれない」

「うん」

そんなことは、団長さんに真実を告げるときに気が付いていた。ただ。

「僕こそ、変な息子でごめんね」

両親の子どもとして生まれてきたのに、こんなところで一人に辛い思いをさせることを申し訳なく思つ。

そして。

もう、ここにいてはいけない。

そんな思いが、僕の胸の内に生まれていた。

## 幼馴染み、襲来（2）

僕が目覚めたのは、あの避難誘導訓練の日から二日後の昼だったらしい。

団長さんが去った後、僕は父さんから事のあらましを全て聞いた。そして、その内容は僕の全身から血の氣を引かせるに充分なものだつたと言える。

まず、事の起こり。

これは、僕があの場所で想像したのとさほど変わらないものだつたらしい。

ギド・ル・ヴェール。

ライナとは犬猿の仲の少年が、最近僕とライナが離ればなれになつて生活しているのを発見、観察して報復の機会を窺つていたとのこと。

それと共にユファちゃんに対してもフラれた腹いせをしようと東区の封鎖区域　古くて脆くなつており、建て替えが検討された建物のある場所　で見つけた地下牢を利用することにしたそうだ。

計画としては、避難誘導訓練を使ってまずユファちゃんに「謝りたい」と誘拐。彼女の弟に「忘れ物をしたから取りに戻つた。自警団の人には怒られるから内緒」と吹き込み不安を煽らせ、まずエリクを僕から引き離し、隔離。その後僕にもそれを探しに行かせるよう、し向ける。というものだつたらしい。が、僕の性格が以前とは変化してたことが原因で行動順が逆になつてしまつた。僕のみが眠らされてユファちゃんと一緒にその地下牢に放り込まれた。

ちなみにあの甘い匂いは思った通り眠り薬だつたようで、入手先

は、ギドの知り合いの柄が悪い連中だったとか。そいつらも今回の件で捕まつた。

それはともかく。

当初の予定とは違つたものの、ライナをやりこめるには僕一人が人質にいれば問題ない、と判断したようだ。

戻つてこない僕を心配したエリクとライナで手分けしての捜索中、ほくほく顔の彼らがライナに接触。僕のことを盾にして暴行を加えようとしたらしい。が、ライナがそんなことで屈服するはずもなく。「要はあんたたちを叩きのめして、ダットの居場所を吐かせねばいいだけでしょ！」

と手持ちの魔法を駆使して、抵抗。

相手にも天才と呼ばれる魔法使いの少年がいて、一進一退の攻防を繰り広げたとか。

その話を聞いたときは、僕の顔はきっと呆けていたに違いない。だつてそれ、もう子どもの喧嘩じゃなくないか？

そう思つたのは僕だけではなかつたらしい。この話を聞いた全員が似たような反応を返したそうだ。

そして、その時点でのライナと少年たちの攻防は学校や自警団に所属する魔法使いたちに知られることとなつた。魔法の気配に聴い数人が慌てて現場に急行。しかし。

彼らがその現場にたどり着いた時には全てが終わつてしまつていたそうだ。

現場は、静かなものだつたという。

子どもたちはただ呆然と宙を見上げ、氣を失つている者もいた。何があつたと問いつめる大人たちに、一人の子どもはこう言つた

そうだ。

【グラン・ヴ・ディール】が出た、と。

そこからは自警団だけではない、町全体が大騒ぎになつた。

【グラン・ヴ・ディール】を見たという子どもたちは全員保護。事情を聞いて、そこで僕とユファちゃんが古い地下牢に閉じ込められているということを知り救出。

町のあちらこちらで【グラン・ヴ・ディール】が出たという情報が交錯し、今に至つたことだつた。

それで「ライナは?」と尋ねてみると彼女は無事だという返答が戻ってきてほつとする。が、途中でエリクが駆けつけて参戦したとかしないとかいう話が追加されると僕は頭を抱えくなつた。

つまりは二人とも【グラン・ヴ・ディール】遭遇したということ

で。

……危ない。危なすぎる。

冷え切つた体が更に冷えた氣がしてたまらなかつた。  
そして。最も、僕が気にかかつたのはこの後の話で。

「ギド・ル・ヴェールが消えた」

諸悪の根源とも言える首謀者の消失。

【グラン・ヴ・ディール】に包み込まれるようにして、彼の存在はその場から消えてしまつたそうだ。

それが何を意味するのか僕は考えたくなくて、ベッドの上に沈み込むしか出来なかつた。

そんなことを聞いた翌日のこと。

束の間の平穏を診療所のベッドの上で過ごしていた僕の耳に、届いたのは診療所にあるまじき騒音だった。

がたんつ。ばたばたばたばた。

枕を背もたれに見立て、相変わらずの青空を覗かせる窓をぼうつと診ていた僕は、唐突に勢いよくやつてきたそれに目を見張る。最初は銀色。

「ダット!」

次に、赤。

「ば、ライナつ。ここ診療所

」

瞬時に視界が塞がれ、衝撃を覚えたと思つた。

どたーん！

床に叩き付けられました。  
何がどうなつたかといふと。

一、ライナがベッドの上に座つてた僕に追突。

二、勢いで僕が後ろに倒れ込んだ。

三、それがベッドの端で。

四、勢いを押さえ込めなかつた僕ごと床に墜落。

とまあ、こんな感じ。

はつきり言おう。

体力やら力やら、生氣やらなくしてゐる人間にしてることじやない。  
さらに言つなら、落ちるときに一回転して僕が下でライナが上。  
体格も現時点では彼女の方が優位に立つてゐるから当然重い。

「あつ、ごめんっ」

謝る前にだけ、と言いたい所なんだがね。お嬢さん。

下から睨み上げると、ライナはすぐさまぱつと立ち上がつた。

「大丈夫？」

手を貸してもらえるのは非情にありがたい。  
僕はライナが出した右手を掴んで。

「ひやっ！」

振り払われた。

……嫌がらせか。このやうひ。

いや、原因はわかつてゐけど。いつもあからさまにやられると凹

んでしまうわけで。

「『』、ごめん」

僕の表情に気付いたんだろうライナが俯く。

「いや、いいよ。それ、多分普通の反応だから

今度は自分一人の力で立ち上がって、僕はベッドに座り直す。と。

「普通じゃないよ！」

ライナに怒鳴られた。しかも。

「なんでダットはそうなの？ なんでそりやつて当たり前に普通じやないって言えるのよ！」

ほっぺたをぐにーっと伸ばされました。

痛い。

「ひよっ、はいあ。ふはっ」

「このバカっ。どれだけあたしが心配したと思つてるの…！」

全くの容赦なし。痛がる僕のほっぺたを縦に横にと伸びるだけ伸びしまくる。

痛い、千切れる。わかつたからつ。

「はいあっ、ひはっ。ほほ、ひふひおうひょはひよっ…」

そう。ここは診療所。

ちなみに隣のベッドにはユファちゃんが寝てるんですけどつ！

誰か大人がいれば止めてくれたんだろうけど。

何故か都合良くウチの両親とユファちゃんの両親は一旦自宅に帰

つて不在だったりする。

つまり止める人間がいな……

「このアホが！」

ゴン、という衝撃と共に頬からライナの指が外れた。っていうか、

最後のぴんつて引っ張られたから今までより痛かったんですけど。

「くううううつ！」

ふと見れば、ライナは二つに分けた髪の真ん中あたりを抑えて蹲

つている。

そして。

「……ここ、診療所だつての」

常識人的発言をしてくださつたのは、あきれ顔のエリクだつた。

「あつ」

そうか。と僕は赤くなつた両頬を抑えながらエリクを見る。病室に入ってきたのは一人だつた。と今更思い返して嘆息した。

## あらためまして幼馴染み（2）

大騒ぎした割に、ユファちゃんが目が覚まさなかつたのは幸いだつた。

ユファちゃんが錯乱している。ところは本当のようだ、田を覚ますたびに泣く、喚く、を繰り返す。

僕もそれを横で見ていたけど、これでも最初よりはマシになつたそうだ。

「……ユファ。大丈夫なの？」

彼女が眠る姿をそつと見やつて、頭に一つのこぶを作ったライナは不安そうに呟く。

ちなみに増えたこぶの原因はエリクに続き、騒ぎに気が付いたこの診療所の主であるバスク先生によるもの。拳骨を落とされたライナはいささか不服そうだったが、騒いだのは事実なので黙つていたけれど。

と、それはどうでもよくて。

「バスク先生は体の方はなんともないって言つてたよ。ただ……あれだけ怖い思いしたら、ね」

今日の昼にも一度目を覚ました時はひとしきり泣いて、僕を見つけると大人しくなつてそのまま眠つてしまつた。

……こういうの、日本でなんていつたつけ。

PTSDとかなんとか。

詳しくは覚えてないけど。

「ダットは平気なわけ？」

ライナが僕を窺うように首を傾げる。

心配してそう言つてくれているのだろうけれど、あまり思い出しあくはないので別の話題を振つてみた。

「起きてからずっと、三食薬草スープだつてこと以外は大丈夫」  
それにつまく乗つてくれたのはエリクで「うげえ」嫌そうな顔になつた。二の顔は多分飲んだことがあるという証だろ？。

「オレはもう、あれだけは食いたくねえ」

「子どもにあんな不味いもの飲ませよつと思ひ」と自体が間違つて  
る気がするんだよね」

「あれは食べ物じゃない」

うん。それには僕も同意する。

二の薬草スープ。栄養満点でかなり効くという評判もある。が。  
苦いわ、不味いわ、口当たり最悪というマイナス面が大きすぎて子  
どもはもちろんのこと、大人も不味いと評判だつた。

「だよね。僕ももう遠慮したい。でも母さんが、一掬いも残すな。  
つて顔で見張つて。毎食泣きそづ」

「うわあ。それ最悪だろ。どんな『一モンだよ……』

二人して感慨深く頷いていると、ライナが呆れたようにため息を  
吐くのが聞こえた。

「ガキなんだから」

とは言いつつ、彼女の顔は二の顔ほつとしているように見える。

「十歳は子どもでしょ」

そう言えば、何か言いたそうな顔をしていたけど。諦めたように  
またため息を吐かれた。

子どもが子どもらしい態度を取つて何が悪い。

まあ、僕の中身は……置いておいて。

体が子どもなんだからそういうことにしてもいいよね。

「……でも、冗談は抜きにしても僕は平気。ライナたちもアレに遭  
つたつて聞いたけど。その様子だと大丈夫そうだね」

一部、平氣では居られなかつた人間も隣のベッドにいるわけだけ  
れど。

アレ、と口に出すとエリクもライナも一瞬びくりと肩を震わせた。  
む。意外とトラウマになつてているのだろうか。エリクはばつが悪

そうに視線を逸らしたし、ライナもむすつと歯を硬く引き結んで俯いてしまった。

しました。せっかく笑い話で逸らしたのに、わざわざ引き戻しちゃつた？

なんて思った矢先。

「ごめんね。ダット」

ライナがいきなり謝罪してきた。

「あたしがバカだったの。ダットがこんな田にあったのは、あたしのせい。あたしが……ダットから離れなかつたら、ダットはこんな風になることなんてなかつたのに」

こんな風、というのは僕が【半死人】になってしまった件だろう。だが、僕からしてみればそれはライナのせいじゃなくて、僕やコファちゃんを地下牢に閉じ込めたギドが悪いだけの話だ。

「それはライナが責任を感じる事じゃないよ。元凶はギドだし」まあその、ギドも行方不明だということだし。話を聞いての予想だけど、多分生きてはいないだろ？

子どもの復讐劇。その結末としては最悪と言つていいので、それをいい気味と笑うのは憚られるのだが。

彼についてはその罪もろとも既に裁かれたのだと捉えることも出来る。

「ライナは僕について当たり前の反応を示しただけ。っていうが、むしろびっくりなのはエリクの方だよ」

両親だつて最初は戸惑つたし、【魔物憑き】だとか疑われたりしたのにさ。大事にされているのはわかっているのだけれど、正直今でもちやんと受け止めもらひえているかの自信はない。

「え、オレ？」

「あの説明で簡単に信じてくれちゃうのが不思議だよ。疑問とかなかつたわけ？」

エリクに話を振ると、彼はきょとんとして。

「嘘だつたのか？」

質問に質問を返す形になつてきた。

単純というか、なんというか。だからと言つて騙されやすいわけでもないんだけど。悪意には結構敏感だつたりする。お人好しだけど。

「いや、嘘は言つてないけど。エリクらしいなあ。と思つて」

「……？」

頭で考えるよりも先に直感で行動する典型的な例なので、僕みた  
い特殊な人間にはちょっとありがたいかもしれない。

逆に困るのは、ライナのように疑い始めると確認しなければ納得  
しないタイプだ。

彼女が僕に謝ろうとする理由はわかる。

だけど、それも突き詰めたら僕が原因に違いない。

「ライナ」

彼女の名を呼んで、目を合わせる。

「元々は僕のせいだから、自分を責めないように。謝るなら僕の方が先だよ。【グラン・ヴ・ディール】を起こしたのは僕だし」

地下牢を見つけて僕たちを放り込んだのはギドたちだけ。きっと  
かけも多分彼らだろうけど。最後の一押しをしたのはきっと僕だから。  
【グラン・ヴ・ディール】を世に放つてしまつた責任は取らなければいけない。

「ごめん。ライナ。怖い思い、させて」

左手に残された印に右手を重ね、僕はライナに頭を下げた。

「違う。ダットのせいじゃない！」

ライナがベッドに手をついて、前のめりになる。その顔は必死で、  
泣きそうだった。

「あたし、ダットを守れなかつた。ずっとずっと守らなきやつて思  
つてたのに。守れなかつた。約束、したのに」

誰と、という言葉は出なかつた。でも、知つている。

ずっとずっと以前のことだ。ライナが、エリクと。そして僕が一  
人と出会つた頃の約束。

周囲と溶け込めずにつましいかなくて、引きしもつかけた【ダット（僕）】にライナが言つた言葉。

『ダットをこわいものから、まもつてあげる。やへやへ、ね』

エリクも巻き込んで、ライナは強く固く誓つていた。

「こめんなさい」

それが限界だつたんだろう。ライナの目からぽろぽろと涙がこぼれはじめた。

うわあ。異世界で女の子泣かせたの一人目……いや、三人目？

「ちょ、ライナ。待つて」

慌てる僕をよそに、ライナがベッドの上に乗り上げてきて。

「守るから。今度は絶対、守るから。あんな奴に、ダットの命を取らせたりしないから」

ぎゅう、と力いっぱい抱きしめられました。

ええ！？ またこのシチュエーション？

冷たくなつてしまつた僕の体には心地良い暖かさではあるんだけど。

でも、ちょ。ぐるし……

「あたし、強くなる。たくさん勉強して、ダットを守れるようになる。だから。それまで待つて。絶対、強くなつて帰つてくるから。窒息寸前の僕だつたけど、その台詞に込められた何かは感じ取れた。

それはライナが離れ、僕の肩を掴んだ状態で、合つた目からも見て取れた。

「ライナ。何、する気？」

何故だか嫌な予感がして、僕は思わず傍観者に徹していたエリクにも視線で確認を取つてしまつた。

そのエリクも。

「オレも、強くなる。強くならなきゃいけないんだ」

なんて拳を握っていて、僕は思わず頭を抱えた。

一体何がどうあって、こうなっているんだろうか。

「ちょっと待った！」

僕が理解できるように説明してほしい。

強引に、一人に全部の事情を聞き出した僕が彼らに猛反対するのはこの後すぐのことだった。

## 起りつつある未来と望み

夢を、見た。

銀色に輝く髪が踊り、赤い髪が跳ねて、そして……全てが紅の海に沈む夢。

その夢の中で、二人は必死に誰かの名前を呼んでいて。

僕はそんな彼らに手を伸ばして

『届かないことに絶望する。

その耳に残るのは、いつか聞いた嘲笑。

ククク、力力力。と青白い光が、倒れ伏した彼らを包み込む。

やめる。

僕が叫んだ。

やめる。彼らは、僕の、大切な

『なればこそ』

耳元でその声は囁く。

『我らはそなとの再びの邂逅を望むのだ』

背後から襲い来る怖気は、僕に極寒の地にいるかのような錯覚を覚えさせた。

伸びた手が、ひやりとした感覚に包み込まれる。

青白い光に包まれた、ボロボロのローブから覗く、骨だけの手。

『そなとの力、目覚めさせるに必要であらば……かまわぬ。彼の者らにも印を付けるは一興よ』

ふわり、と重力などないようソレは僕の前に在った。

前世、日本では理科や医学的によく見てきたもののはずの骸骨の顔。

それなのに、実際目の前にあることを感じる今までにない恐怖。根本的に、僕たちとは違うと感じ取れてしまつその存在。生きとし生けるもの全てにとつての天敵。

【生氣】を糧とする亡者と言われる魔物【グラン・ヴ・ディール】が、言つ。

『生きよ』

それはおそらく、かの魔物の有り様からすれば矛盾する言葉だつたろう。

滑稽にも思えるが、だからこそ【グラン・ヴ・ディール】の言つそれは重く僕の心に響いたのかもしれない。

例えそれが……僕が持つという力目当てだとしても。

『それが人というもの。否。生き物というものよ。生きて、我らに示すがよい。強き心を我に刈らせよ。そなたの力を我らに見せよ』ぼうつ、と差し出さなかつた方の手が【グラン・ヴ・ディール】と同じ色に光る。

『それこそが、我らが望み。我らが宿願。それが成されねば、かの光景は真となるわぞ』

すうつと、【グラン・ヴ・ディール】の姿が横にずれた。

そして田の前に広がる、紅の海。

そこに倒れる、銀と赤とそして……黒に金。

……といふ、さん。かあ、さん。

声にならない声が、追加された一人を呼ぶ。いやだ。やめる。こんなのはもういい

『我らは待つ。【二重】<sup>ふたえ</sup>の者よ。時満ちるまで 待つてあるわ』

青白い光が、薄れていく。

だが、目の前にある光景は消えてくれない。

そして近づけない。

ただただ眼前で、誰も動かないままに静かにそこにあるだけだった。

なんて。

そんな夢を見てしまったのは、きっとあの一人の話を聞いてしま

つたからだろ？。

僕は寝汗でぐつしょりの衣服で額を拭いながら、診療所の天井を見上げる。

窓の外は、まだ暗い。ただし、僕のいる診療所のベッドが置かれたこの空間は【魔道具】の明かりで照らされている。

理由は情けない事ながら、暗闇が怖いからだ。

月明かりや星明かりがあるとはいえ、夜は暗い。その暗さはともすれば、あの【グラン・ヴ・ディール】に出会った場所を思い起させてしまう。

それは、僕だけではなく隣で静かに眠っているコファちゃんにも言えることだつたらしい。

僕はまだ見ていなけれど、明かりがないと彼女は恐怖で泣き叫ぶそうだ。

僕もだけど、彼女にとつてもあの出来事は強烈なトラウマになっているのだと。たつた今見た夢で照明されてしまった。

最悪だ。

いや、それよりも最悪なのは……昼間聞いた幼馴染みたちの会話かもしけれない。

【グラン・ヴ・ディール】に遭遇してしまった彼らは、よりもよって僕を守ると宣言してしまった。

それを目の前で聞いた僕は慌てて止めたわけだけれど、結果は惨敗。

元々押しの強いライナに僕が敵うわけもなく、エリクもまた一度決めたら一直線なので、説得は通用しなかった。

そもそもいつ何処で出没するかもわからない相手にどうするつもりなんだろう、という突っ込みさえも、彼らは無視した。

子どもの思いこみほど恐ろしいものは、ない。

おそらく止めても無駄だろ？。

一度はそれで納得した振りはするだろ？けど、いざれば目的の為に邁進する。

その気持ちは嬉しいと思わないでもなかつたが……

「あんな風になつて欲しくないから、止めたのに

単なる夢だと一笑するのは簡単だ。

けれど、妙に現実味があつたのは何故なのか。

その答えはすでに、そこにある。

左手の手の甲。【グラン・ヴ・ディール】に触れた印が、淡く青白く光っていた。

だから、なんだろうか。

僕は光を隠すように右手を重ねて握り込む。

この印は、僕と【グラン・ヴ・ディール】を繋げるもの。だとしたら。

僕の状態を、【グラン・ヴ・ディール】が知ることが出来たなら？  
僕が【グラン・ヴ・ディール】の望みに添う行動を起こすように促すことも出来るのではないか。

……考えすぎ、なのかも知れない。

それならいい。

けれど、嫌な予感が拭えない。

【グラン・ヴ・ディール】は神出鬼没な魔物だ。現れるまで、どこにいるのかわからない。実際はまだ側にいて、僕を見ているとしたら……

考えれば、考えるほどに、心は追いつめられていく。

そして、辿り着く答えはひとつだけ。

夢で見たように、自分の力を求めて【グラン・ヴ・ディール】の望む対峙をする以外に方法はない。

相手の望むままにというのは腹が立つが、いずれにせよ、僕の命は【グラン・ヴ・ディール】に握られているのだ。

だったら。

「出来るだけのことを、するだけだ」

夢を、現実にしないように。

みんなを、守れるよう。

僕の内に秘められているといつ力を強く望んで、僕は目蓋を閉じた。

## 起つゝつむ未来と望み（後書き）

うつかりミスにて、話を追加。

次は閑話で「ライナの日記」

ジョン・シスの日、三日

家に帰つたら、おとうさんのがいきなり中身が白紙の本とペンと一緒に  
ノクをくれた。

どうやら誕生日のお祝いものだつたらしく。

王都では、今こうこうのに『日記』を書くのが流行りなんだつて。  
でも、紙はすぐ高価なものでうちはそんなにお金もちじゃない  
のに。って言つたら『そのうちお前が養つてくれるんだから』つて  
ニヤニヤ笑つて言われた。

どうやら、期待されているみたい。

うれしいけど。ちょっとフクザツ。

とりあえず、今日は一回だしお父さんこありがとうつて書いて  
おくことにする。

おとうさん。ありがと。

ジョン・シスの日、八日

雨と雷が鳴つてた。

こういう日、ダットはよくぼーっと外を見てる。

いつもはちょっと頼りない感じがするんだけど、この一時はち  
ょつと大人びて見えるから不思議。

でも授業中はやめた方がいいと懲り。先生に叱られ、あたふ  
たしてた。

やつぱり頼りない。

サイスの日、十一日

またバカにからまれた。取り巻きがたくさんいるバカ。力ばっかり自慢してるバカ。

バカは昔からだけど、いい加減うつとうしい。

ケンカをすると、ダットが悲しそうな顔になるから出来るだけしない。でも、手を出されるとイラッとする。そういうときは黙らせる。

向こうの方が人数多いし、力も強い。体の大きさが違うもの。仕方ない。

だつたら、それなりのやり方をするだけ。

バカは先生が苦手。というより、大人が苦手? よくわからないけど。

こういうときは、先生を呼ぶと面白いように逃げていく。学校でからんでくるの、やめねばいいのに。

ルガーの月 十五日

また一つ魔法を見えた。

【疾風走行】。

初心者には魔導具を使つても制御がむずかしいらしいけど、コツを覚えたら簡単だった。

バカの取り巻きが対抗して【風壁】使つて邪魔してこようとしたけど、逆にその壁を登つて一回転して着地してやつた。

周りはあたしの華麗な着地に拍手喝采。バカの取り巻きは悔しそうにしてた。

ざまあみる。

ルガーの月 二十日

いつも通り学校に行くのにお調子者とダットを誘いに行つたら、キーラおばさんに「今日は行けない」って言われた。

理由を聞いたら頭を打つて何日か安静にしてなくちゃいけないんだって。

ちょっとおばさんの様子がおかしかったように思ひながら……なんだろう?

### ルガ一の月 二十一日

ダットがおかしくなつた。

おみまいに行つたらダットがダットじやなくなつてた。

記憶喪失であんな風になるの?

嫌だ。信じられない。あんなのダットじやない。  
あんな大人みたいな目……ダットじやない!

### ルガ一の月 二十五日

ダットが学校に来るよになつた。

いつもみたいに迎えに行きたかったけど、行けなかつた。

いつもわたしを窺うように見て柔らかに笑つてたのに、今のダットが見せるのは全然知らない大人みたいな笑い方。

話すときも全然違う。

たどたどしく「おはよう、ライナ」って言つてたダットはいなくなつてた。

書庫で声をかけられたけど、それでも違和感があつて駄目だった。

絶対おかしい。

ダットは記憶喪失のせいだつて言つてたけど、あれはダットじゃない。

もしかしたら……(この後は書いてインクで線を引いて消してある)

ルガ一の月 二十七日

あたしが、バカだつた。死んじやいたい。

どうしてあんなことに

(字が歪んで、水が染みた跡がある)

ルガ一の日 二十八日

あたしは (書きかけて終わつてゐる)

ルガ一の月 二十九日

お父さんとお母さんが心配してくれてゐるのは知つてゐる。でも、落ち着かない。

だつてあればあたしのせいだから。

どうしてダットがあんな目に遭わないといけないんだろう。

……本当は書きたくないけど。でも、忘れちゃいけないことだから書くことにする。

あのバカが、ダットを誘拐してあたしを呼び出した。

三対一で対決つて、どれだけ卑怯なんだろう。その周りも子分で固めて逃げられないようにしてたし。だけど、その時は全部まとめて潰せばいいと思つてた。

力では敵わないから、魔法を使った。

向こうも使つたけど、全力で吹つ飛ばした。

ちょっとつきつくて、途中でエリクが飛び込んできたのは助かつたけど。

それで自分たちが不利になつたつてわかつたんだろうと思つ。バカが吠えた。

そうしたら……脇間に、青い光がバカの前に現れた。ボロボロの布を来たガイコツ。

見ただけでぞつとした。生きていなつてわかつたから。

【グラン・ヴ・ディール】。

すぐにその魔物の名前が思い浮かんだ。

思わず【火矢】の魔法を放つたけど、届かなかつた。というより弾かれた。

魔物はあたしを見て笑つた。顔に表情なんてなかつたのに、笑つたんだ。

『かの【二重】<sup>ふたえ</sup>に連なる者か』って。

魔物と話せるなんて驚いたけど、でも、こいつは言った。  
その人に、印を付けていざれ刈り取ると。

エリクが間に立ってくれたけど、【グラン・ヴ・ディール】はそれにも楽しそうにこう答えたんだ。

『いずれ、相まみえるかもしぬな』って。

そして楽しそうにバカを見て。何か話して。消えた。

バカは……ギド・ルヴェールはいなくなつた。

何がどうなつてるのわからなくて。すぐに大人の人が来ててくれたんだけど。

その後に知つたんだ。

古い地下牢に閉じ込められたダットと、ユファが【グラン・ヴ・ディール】と出会つたんだ、って。

助け出されて目が覚めたユファちゃんは【グラン・ヴ・ディール】に遭つたつて泣き叫んでたらしい。

そしてダットは……目を覚まさなかつた。

今日の朝、学校に行く前にお見舞いに行つたら、まだ眠つたままだつた。

キーラおばさんがずっと付いてたみたいだけじゅく心配してた。手を握つたら冷たかった。

ずっと、こうなんだつておばさんは泣きそつだつた。  
ごめんなさい。あたしたもつとしつかりダットを見ていればよかつたのに。

帰るとき、ダットの左手がちょっと青白く光つてたように見えた。  
気のせい、かな？

ルガーの月 三十日  
ダットが目を覚ましたって聞いて、行つてみた。  
ちゃんとベッドの上に座つてたのを見たら、飛びついちゃった。  
で、怒られた。

エリクに一発。バスク先生に一発。痛かつた。っていうか、エリク。今度覚えてなさいよ。

でも、それでわかつたことがある。

昨日見たと思った青白い光。あれは、気のせいじゃなかった。  
ダットの左手。そこには前にはなかつた【印】があつたから。  
ダットは隠したがつてたけど、でもあたしたちも【グラン・ヴ・ディール】から少しだけ聞いたもの。『いずれは刈り取る』って。  
そんなの、駄目。絶対に許さない。

ダットには反対されたけど、もう決めたもの。

今度は絶対にダットを守る。

ずっと前にした約束。絶対に今度は守るからね。

ファーリの月 二日

【グラン・ヴ・ディール】が出たことで、王都から調査隊が来た。  
町の人たちに話を聞いて、あたしの所にも聞きに来た。  
ダットの所にも、多分行つたんだろうな。すじく偉そだつたけど。  
ど。

知つてることだけ、全部話した。  
何日かはいるんだって。

町の空気がなんだか嫌な感じになつてゐる。

自警団の調査ではあの魔物はもういないって確認されたみたいだけど、あのバカ。ギドはまだ見つからない。

【グラン・ヴ・ディール】と一緒に消えちゃったんだもの。みんなきっともうわかってる。

ギドはもう……

そうだ。ダットの叔母さん。

ショリナ先生も半分は自警団に所属してるから、ここ数日はギドと自警団にいたみたい。

今日、やつと学校で見かけた。

ちょっと疲れてるみたいだつたけど、でも声をかけてもつと上の魔法を教えてほしいって頼んでみた。

もつと強くなつて、ダットを守れるようになりたいから。理由を聞かれて、それを言つたら「危ないから、黙田」って言われちゃつた。

でも、あたしだつて本気だもの。

ダットの命をあんな魔物にあげたくないもの。

そう言つたら、ショリナ先生は「おひじばりへ待つて」だつて。どういう意味、なんだろう。

そういうえば、エリクが自警団で「剣を教えてほしい」とて通い始めたみたい。

魔法が使えないからしかたないんだけど、【グラン・ヴ・ディール】つて魔法しか通じないのにどうする気なんだろう。

でも、エリクの方が先に動き始めててちょっと悔しい。

だから、【魔法基礎読本】の魔法を残り全部覚えることにした。きつとやつしたら、ショリナ先生もあたしが本気だつてわかつてくれる。

ファーリの月 六日

王都からの調査隊が帰ったあと。ダットがバスク先生の診療所から家に戻った。

自分で歩けるみたいだけど、顔色はよくないってシェリナ先生が言つてた。

書庫で忙しく【グラン・ヴ・ディール】に関する本を集めてるのを見た。

【半死人】になつた人についてなんとか出来ないか調べてるんだつて。

あたしも手伝いたかったけど「本が難しいから無理」って言われた。

ファーリの月 十日

エリクのやつ。自警団に通い始めてから、授業中寝てばっかりみたい。

隣の教室からよくビュート先生の怒る声がしてる。

あたしは……【魔法基礎読本】の魔法を全部使えるようになつた。つて言つても使えるだけだけど。

放課後も自主的に訓練場で練習をせてもらつてたんだもん。

明日はシェリナ先生にそれを言つて、ちゃんと次の魔法を教えてもらわなくちゃ。

ファーリの月 十一日

シェリナ先生が落ち込んでた。

書庫の中には【半死人】を助けられるようなものがなかつたんだつて。

王都の魔法学校時代の友だちにも調べてもらひよつてお願いしたから、そつちに期待するつて。

……どうにか出来るといいのに。

ダットはあんまり動いたり出来ないらしくて、まだ学校に来ない。【半死人】になつた人はそんな感じで、寝たきりになることが多みたい。

そう思うとぞつとした。

落ち込んでるシェリナ先生に【魔法基礎読本】の魔法は全部覚えたって言つたら驚かれた。

でも、次の魔法はまだ駄目だつて言われた。  
やつぱり「もう少し、待つてほしい」だつて。  
なんで駄目なんだろう。

ファーリの月 十四日

授業中にぐーすか寝てたエリクがいよいよ先生たちに呼び出された。

「勉強する気がないなら来るな」って言われたみたい。  
うん。その通りよね。

でも、自警団の剣を教わってる人から「学校はちゃんと行け」とも言われてたんですつて。

……エリク。バカよね。

先生たちと自警団の人とで話し合つることになつたつて言つたわ。

どうするのかしら。

あ、学校からの帰り。たまたまユファのお母さんと会つた。  
ユファはちょっと落ち着いたみたい。でも暗いところは怖がるから、夜も明かりを灯す【魔道具】がないと眠れないつて言つてた。  
ちょっとかわいそつ。

ダットを救えるかもしない。

シェリナ先生に会いに書庫に行つたら、知らない男の人と話して  
る最中だった。あとで聞いたら、王都の魔法学校時代の友だちなん  
だって。

【半死人】を治す手がかりがあつたみたい。

本当に、治せたらいいのに。

そうそう。エリクは話し合いの結果、自警団に行くのが一日おき  
になった。

自主練習は毎日するつて意気込んでいたけど。

これで授業中寝なくなるのか疑問な気もする。

ダットにそれを話したら、危ないことはしないで欲しつて怒ら  
れた。

でも、ダットを守れるように強くなりたくてはじめたことだもん。  
あたしも、エリクも絶対にあきらめないからね。

強くなるもん。

ファーリの月 十八日

魔法の授業で、昨日シェリナ先生と話していた男の人が参加して  
た。

名前はルーク・ファロイ。【魔導具】や【魔道具】の研究者なん  
だって。

魔法をそれぞれ披露したら、褒められた。

「君なら王都の魔法学校にも行けるよ」だつて。

行けるなら、早く行きたい。早く行つて、ダットを守れるようにな  
りたいよ。

ファーリの月 二十一日

ダットが、カーライルを出て行くかもしない。

ショリナ先生は【半死人】を治すためには行かないといけないところがあるんだって言つてたけど。

大人たちの、ダットについての噂がすごく嫌。

呪われてるだと、ダットがいたら町が滅ぶんじゃないとか。ほんと、やだ。

シェリナ先生は本氣で心配してるので、噂のせいでダットがカライルにいられなくなってるよう聞こえる。でも、ダットがいなくなるのはもつと嫌。だから、もしダットが町を出ることになつてもあたしだけは絶対に味方でいるからね。

エウイーラの月 十日

ダットが、カライルを出て行くことになった。

【半死人】を治す研究をしている人に連絡が取れて、その人の所に行かないといけないんだって。

場所は……北のラグドリア帝国。

外国なんて遠すぎるよ。

それに、今のダットが旅なんて出来るかな。

キーラおばさんもだいぶ疲れてるみたいだし。すごく、心配だよ。

エウイーラの月 十五日

明日。ダットが、カライルを出て行く。

おじさんと、おばさんと、それからシェリナ先生が一緒に行くんだって。

あたしも一緒に行きたいけど、でも決めたんだもん。ダットを守れるくらいに強くなるって。絶対。絶対に追いかけるから。待つてね。



體話 「ライナの日記」（後編）

これにて、カーライル編終了。

## 大人の都合、子供もの言い分

もうすぐ、冬が来る。

全てが整つたと連絡が来たのは、例年ならばそろそろ雪が降り始めようかという頃だった。

カーライルでそうなのだから、そこから北のラグドリアではもう雪が積もっている所もあるかもしない。

この世界は比較的温暖な気候ではあるようだが、それでも僕が元いた世界とそれほど変わることはない。

北に行けば行くほど寒くなるし、南は暖かくなる。

赤道と呼ばれるものがあるのかどうだかまではわからなかつたけれど、季節感もおおむね日本にいたときと変わりないようだつた。

一年の数え方も月の満ち欠けに合わせて十一の月に分類される。と言つても、これはラグドリア帝国とそこから分離したジードリクス王国に伝わる月の数え方であつて他の国ではまた違つらしくとは傭兵をしていたことのある父さんの弁だ。

それはともかくとして。

「寒くは、ない？ 大丈夫？」

いつも通り不安げな顔なのは相変わらずな金髪碧眼美女の母さんだつた。ここ一ヶ月半で立て続けに起こつた事件のせいか、少しやつれて見える。

僕の前世の記憶が戻つたことに始まり、【グラン・ヴ・ディール】出現騒動、そしてその為の引っ越し。

元々僕について心配し通しだった彼女がこれらのことによつて、余計に心労を溜め込んでしまつたのは明らかだつた。

「大丈夫。平氣」

薄暗い雲に覆われた空の下。これでもかといふくらい厚着をさせられた僕が頷くと母さんは、いつものよつよつと僕を抱きしめた。

「それならいいわ」

まだ朝の時間帯だといふこともあって、ほつと吐き出された息は白い。

旅に必要な最低限の荷物 着替えと食料と口用品 を入れたバッグを背負つて、僕は出てきたばかりの家を見上げた。

石造りの一軒家。

僕が昨日までの十年間を過ごした生家。

必要なもの以外の品物は、全てこの中に残してある。そう。次にこの家を使う人の為に。

色々な思い出がある住み慣れた家を離れるのは寂しいけれど、もう僕には無用のものだ。

「姉さん。ダット」

声をかけられて振り向けば、そこには僕や母さんと似たような格好のシェリナ叔母さんが立っていた。

「馬車はもう準備出来てるわ。義兄さんは自警団?」

「ええ。最後の挨拶に行つてくるさうよ。馬車のところで待ち合わせなの」

「そう。じゃあ、先に行く?」

「……ええ」

最後の母さんの返事は、家を見上げてのものだ。

彼女もまた、この家に強い思いを抱いていたのかもしれない。それを壊したのは、他ならぬ息子の僕だったわけだけれど。あれから。

僕が【グラン・ヴ・ディール】と遭遇してから約一月半。

【半死人】となつたことであまり動くことの出来ない僕が出来るることは少なかつたけれど、その代わりに僕の周囲は、日まぐるしく動き始めていた。

領主さまへの報告、王都からの調査隊の事情聴取、町の人たちに生まれた疑惑。

詳しいことは聞いていないけれど、ライナやエリクは物凄く怒っていた。

「まるで【グラン・ヴ・ディール】が出たのがダットのせいだって言われてるみたいで腹が立つわっ」

「元々【魔物憑き】だつたんじゃねーかつて言つバカも居たしなあ」

「なんて話も見舞いに来るとしていた。

そういう噂もあって、というわけではないようだったが、シェリナ叔母さんは早々に手を打つてくれていたみたいだ。

魔法学校時代の友だちに手紙を送つて【半死人】を治す手がかりを搜すように頼んでいたらしい。

叔母さん自身も自分のテリトリーである書庫で調べてくれていたみたいだ。そこでは結局手がかりはなかつたようだが、一月ほど前に王都から魔法学校時代の友だちが直接訪ねてきた。

それは家族にとつて希望に繋がるもので、クリークス家がカーライルを出て行くことになった直接の原因だった。

ショリナ叔母さんはその知らせを受けるや否や早々に手紙を書いて、その二十日後に返事が来た。

そして決まつた行き先は。

「ラグドリア帝国。か」

よもや、隣町どころかジードリクス王国を離れることになるとは誰も思つてなかつたことだらう。

僕もまさか、そなるとは思つていなかつた。

ラグドリア帝国の国土はジードリクス王国の十倍以上。その分、病の研究に努める学者も多いらしく、【グラン・ヴ・ディール】や【半死人】を専門にしている者もいるという。

手紙の返事にはその研究をしている医者に、話をつけておく。といつ皿も記されていたようだ。

一般庶民の伝手にしては出来過ぎ感もあるのだが、このあたりは

魔法学校時代の友だち（貴族含む）の伝手というのが一つ。【半死人】自分が珍しいので、すぐに田に留まつたというのがもう一つの理由らしい。

それにしては……叔母さんが手紙の主に対しての好意が物凄く気になつたけど。

そんなことを考えているうちに。

「ダット！」

見慣れた銀色の髪が、ふわりと現れて僕ははつと田を見張る。

「ライナ」

僕よりも軽装ではあるけれど、冬用の厚着をした少女が「間に合つたー」と息を吐く。

その後ろには、しつかりと赤い髪の少年がくつついでいたが。「停車場の方にもう行つてるかと思った……」

「うん。今からだよ」

少し息を乱している一人にそつ答えて、僕は笑う。

ライナとエリク。

この二人とも今日でお別れだ。

「ライナちゃん。エイリクスくん」

一人に気付いた姉妹がこちらを向く。

「おはようございます。キーラおばさん。ショリナ先生

「おはよう。ライナちゃん。エリクくん」

「見送りに来てくれたの？ ありがとう」

姉妹の会話は中断したのか、終わつたのか。

二人はお互に顔を見合わせると僕に「そろそろ行きましょうか」と声をかけた。

ひとまずの目的地はジードリクス王国の王都。

そこへ行く東門から出る馬車に乗るために、少し歩かなければならぬ。

促されるままに、歩き出した僕の隣をライナとエリクが固めた。

「ホントに、行くんだな」

ぼそり、と呟いたエリクに。

「これでダットが治るんだつたら、いいじゃない」  
ライナが不満げに口を尖らせる。

どちらも理解はしていても、納得していないという表情だ。  
それもそのはず。

二人は背後のクリークス家だった家が空っぽであることの意味を  
知っているからだ。

「みんな、勝手よ。全部ダットのせいにして。ダットが町にいられ  
ないようにするなんて」

「……だよなあ。都合のいいことばっかりしか言わねーし  
彼らの言いたいことは、僕にだつてわからないでもない。  
けれど、人は自分の目の前にある不安を排除して安定を求めるも  
のだ。

【グラン・ヴ・ディール】を思い起こさせる【半死人】は町の人  
々にとつて忌むべきもの。ある意味で穢れを背負つた不浄の存在だ。  
それとは別に、僕が【グラン・ヴ・ディール】に印を付けられて  
いるということは一部の人間しか知らないことではあるが、そのこ  
ともまた僕という不安定要素を排斥という方向へ向かわせたのかも  
しぬなかつた。

だから

「そんなものだと思うけどなあ」

と僕は肩を竦める。

「そりや、僕だってそういう田で見られるのは嫌だけど。怖いもの  
を遠ざけたいと思うのって普通のことだよ」

人間は目に見えないこと。自分の理解できないものを恐怖するよ  
うに出来ているのだから。

それに、誰にも面と向かつて町を出て行けなんて言つていなし。  
僕を忌避する、そういう空気があつたのは確かだうけれど、それ  
だけだ。

僕たちがカーライルを出て行くのは紛れもなく僕たち自身の意志

だし、本当は……自分が独り立ちできる年齢であつたなら一人で町を出ていただろ？」

それなら父さんや母さんはこの町で、思い出のたくさんあるあの家で過ごさせていただろう。

【グラン・ヴ・ディール】の田舎は僕といつ存在なわけだし、嫌な目線で見られたり追い出されるように町を去るのは寂しく感じたかもしねり。

だけど、それよりもなによりも。僕が辛いと感じているのは、今、両親を。特に母さんを巻き込んでしまったことだ。

父さんは元傭兵で、國を転々としてきた経験カーライルがあるから心配はしない。シェリナ叔母さんだって何年も地元を離れて生活してきた人だ。これから行くラグドリア帝国の目的地にも、魔法学校時代の知り合いがいると言つ。

でも、母さんは違う。

生まれてからずっとカーライルで暮らしてきた、この場所以外を知らない人だ。

知らない土地、知らない人たちに囲まれて暮らす苦労を、心身共に疲労した状態の彼女に強いてしまうことになる。

心の強い人ではあるけれど、それがふとした瞬間に途切れたら、と思うと怖い。

そんな状態だからこそ、和気藹々の別れ、とはいかない。

「ダツトって、時々すごいよね」

しんみりした空氣の中で、ライナが感嘆とした声をあげた。

「なんでそんな風に全部受け止めちゃうかなあ。もつところ……えーっと。理不尽？ なことがあつたら怒つてもいいと思うわ」

やや呆れた声色が混ざっているのは良いことなのか、どうなのか。「いつも仕方ないとか。あきらめた顔してるじゃない。なにもかも知つたような顔で怒らないし」

「え、そうだっけ？」

「そうよ。それが自分だからって顔してるし。ちょっと腹立つ。だ

から、いつもあたしが代わりに怒つてるんじゃない」「

「……で、それに俺が巻き込まれるんだよなあ」

じと、とエリクの半眼がライナに向く。

「は？ 何言つてるのよ。半分はあなたのせいでしょう」

「大抵はお前が余計なこと言つからだろーがつ」

僕を真ん中に置いて左右で睨み合いが始まる。

おかしい。ちょっとしんみりしてたはずなのに。

「できれば、僕を挟んではやめてほしいなあ」

どっちもどっちだ。という感想は思わず浮かんだ苦笑いに消されて出てこなかつた。

またね。

東門の前には、様々な職業の人々が集まっている。

領主の元で働く役人、町の警護を担う自警団、馬車や馬を預かる廐業<sup>ひまや</sup>、他の町からの商人、その商人に雇われている傭兵など、いくつもの職業の人々が行き交っていた。

特に、ここで重要視されているのは町と町を行き来する際の護衛。つまりは傭兵だ。

王都に近ければ危険度は減るが、ここはジードリクス王国の最西端の町。町自体は外壁に守られているが、その外側はまだまだ魔物の領域と言つていい。

町と町の往復する際、五回に一度という確率で魔物と遭遇出来てしまふ。これも町の東側の話で、西の皆方向になると三回に一度となるのだ。

大抵は魔法を使わずともなんとかなるレベルの知能の低い魔物だったが、稀に魔法がなければ対処しづらい魔物もいるため、油断はならない。

だからこそ、傭兵という職業に就く人は少なくなかつた。父さんも元はそんな傭兵の一人で、町を出るということは傭兵に戻ることもある。

剣や防具を揃えなければと町を出ることに決まってからあちこち歩き回っていた。

そして、今回僕らが町を出るために用意した移動手段は荷馬車。カーライル近くで採つて長持ちするように加工した山菜や稀少な薬草、獸毛などを隣町へ運ぶ輸送手段である。

人間のみを運搬する馬車というのは王都にしかないため、町と町

を移動しようと思つたらば」「つた荷馬車などに便乗するしかない。

僕は次々を荷が積まれる幌付きの馬車に目をやつた。

事前に聞いた話だと、人を乗せるように作つていなければ…り揺れるらしい。

前世では乗り物酔いなどといつ目にあつたことはないけれど…現状、丈夫と言える体ではないので少々不安だつた。

その前方。

「やつぱ、近くで見るとでかいよなあ」

馬車に繋がれた一本角の馬に興味津々なエリクは首が痛くならぬのかと思うくらいに真上を見上げている。

「乗りたい？」

騎馬としても使われることは、西の砦へ向かつ防衛兵を見ているので知つてゐる。だが、この世界の馬は気性が荒い上にその扱いも難しく、慣らすのにかなりの時間が必要とも聞く。

「そりやな」

田の前の馬は、見事な栗毛だった。それをつらやましく見上げながら。

「自警団の団長とか、領主さまが乗つてゐるの見たことあるだろ。かっこいいじゃん」

エリクは田を輝かせてゐる。

そこに茶々を入れたのは定番のライナで。

「……ばっかねえ。いくらカツコよくても、エリクじゅ様にならないうわよ」

鼻で笑つていた。

「あれは、自警団の団長や領主をまだからこやカツコいの。エリクみたいなバカじや、馬に舐められておしまいよ」

「なんだとー。じゃあ、お前乗れるのかよ」

「あら。あたしはもちろん乗せてもらつ側でしょ。自分の乗るのもいいかもしけないけど、カツコい男の人の腕に抱き上げられた方

が素敵だもの」

「はあ！？ バカじやねえ？ なーに夢見ちゃつてんの。気持ち悪い  
い」

「何よ。そういうヒリクこそ、自分がどんなに間抜け面してるか自  
覚したら？」

なんなんだろ？。これは。

もうすぐ僕はここを去るといつのこと、いつもの『』とく始まつてしまつた少年少女の言い合ひに頭を抱える。

「相変わらずねえ」

苦笑いを浮かべて隣に立つたのは母さんだった。

「ダット。体調は大丈夫？」

「うん。平気」

「じゃあ、こっちに来て。見送りに来てくれた人がいるから  
眼前で繰り広げられる舌戦は、いつものことだし放つておいても  
問題ないだろ？」

そのうち勝手に収まる。

「わかった」

そう返事をして向かつたのは荷馬車の後方。  
ショリナ叔母さんが見送りの人たちに挨拶をしていくすぐ近くに、  
彼女はいた。

茶色の髪の少し疲れた顔をした僕と同じ年の少女。

「ユファ、ちゃん」

あれから、ゆっくりではあるが、彼女の状態は改善したのだと聞  
かされてはいた。

けれど、正気の状態で面と向かつて会つのはあの時から数えてこ  
れが初めてになる。

お母さんに付き添われたユファちゃんは伏し目がちの視線を僕に  
向け。

「ダット、くん」

ほつとしたように小さく笑う。

「やつと、会えた」

彼女はそう言って僕の手を取る。

【生氣】を奪われた僕の手は冷たいだつて、コフアちゃんは構わず両手で僕の手を握りしめた。

「お礼、言わないといけないって。思つてたの。でも、なかなか言えなくて。ごめんなさい」

「……そんな」と

「ありがとう」

夜、あまり眠れていないのである。

目の人間に隈が出来ていた。

それを思つと、その感謝の言葉も申し訳なく思つただけれど。

「体、良くなるといいね」

心の底からそう言つてみるとわかるので、否認すむことも出来ない。そうしてしまつたら、彼女の心を踏みこじるくなってしまつう。

「うん。ありがとう」

純粹に僕を心配してくれている。それは確かに、その言葉も嬉しい。

「ダットくん」

気が付くと、コフアちゃんのお母さんが彼女の手の上に手を重ねていた。

「わたしからもお礼を言わなくちゃ。本当にありがとうございます」お祈りしているわ。キーラさんも

僕と、母さん、二人に視線を送つて、コフアちゃんのお母さんは微笑む。

「すまん。待たせた」

「遅くなりました！」

ぞうぞうと屈強な男たちが大勢でやってきたのはそんな時だ。

声と足音が聞こえてきた方向を見れば。

「うわあ

困り顔の父さんを先頭にして、十人を超える自警団の制服を着た団員が背後に続いていた。

正直、ちょっと怖い。

というか、何事？

他の見送りの人間も、そうでなく東門で活動している人たちも、皆その集団に注目する。

父さんは僕と母さんに「すまん」と田配せすると、団員に振り返つた。

「もういいだろ？　ここまで来たんだぞ。さっさと仕事に戻れ」

「とは言つても副団長」

「あんな。もうオレは副団長じやない。ヤルクに引き継いだだろ？」

呆れたように嘆息する父さんと、団員たちは「そうですが」と反論した。

「そのヤルク副団長が、しつかり見送つて来いつて言つたんですよ」「そうつす。そう命令があつたんつすよ」

「おれたちだけじゃなくて、本当は他の奴らも來たがつてました」「そうですよ。本当は団長も見送りに來たかったはずです」

「せつかくくじ引きで当たり引き当てたのに酷いなあ」

「あ、バカ。それ言つなって……」

と、ここまで来て団員同士で揉め始めたので、僕や他の人々は呆然とその様子を眺めるしかなかつた。

「随分、慕われてるわね」

母さんが楽しそうに笑うと。

「そのようだ」

父さんの嘆息が聞こえてくる。

「こら、お前たち。出発が遅れるだろ？」「

別れ惜しいが、暁を知らせる鐘が鳴る前にはカーライルを出なければ、ひとまずの目的地である一つ先の町へ日が暮れる前にたどり着けない。

それも、途中魔物に遭遇すれば予定が狂う可能性があるのだ。それを知っている父さんが騒ぎ出した団員たちの中に割つて入つてひとまずの騒動は終わりを見せた。

「準備は出来ましたか？」

收拾がついた頃を見計らつてやつてきたのは人の良さそうな茶色の髪の青年だ。

カーライルで代々商家を営んでおり、今回父さんとシェリナ叔母さんが護衛に付くことで、ダットたちを王都まで送つてくれるこになつていてる。

「すまん。サリム。騒がしくした。時間は大丈夫か？」

「ええ。大丈夫ですよ。ガリオ副団長に直々に護衛して頂けるのはとてもありがたいことですから。父に話したら喜んで「護衛してもらえ」と

「……あまり、買いかぶられるのも困るんだが」

普段自宅で見るのとは違う困惑した表情を浮かべた父さんはひげ面を引っ搔いて唸る。

そんな父さんを見たサリムさんはにこりと微笑んで。

「では、出発しましょうか」

僕と母さん、そしてシェリナ叔母さんを促した。

すでに自分たちの荷物は馬車の中に入れてある。あとは自分たちが乗り込むだけだ。

まず、母さんが荷を積むときを使つた台を上り、僕がその次、そして愛用の剣を手にした父さんが乗つて台が取り除かれた。

シェリナ叔母さんは御者台でサリムさんと一緒にらしい。

本当は父さんが御者台に行く予定だったようだが。父さんの熊みたいな体格じや、御者台に一人は厳しかつたみたいだ。

「ダット！」

口喧嘩を終えたらしいエリクとライナが、やや上方になつた荷馬車上の僕を見上げる。

「絶対、追いかけるから」

「連絡しろよ」

絶対にこれを最後にしない。

その決意が込められた瞳が向けられて、僕は嬉しく思つと同時に不安にもなった。

「本当は……やめて欲しいんだけどな。一人が危ない目に遭うのは嬉しくない」

「それを言つなら、あたしだって同じよ」

「お前が嫌だつつても、無駄だぞ」

とうに分かり切つた返答ではあった。

「ダットは、あたしたちの大切なともだち。弟よ。姉のあたしが守るのは当然でしょ」

「げー。ライナが姉ちゃんつて。おい。なんだよ。にらむなよ」

「エリクはいらない。あっち行つたら?」

「つて、おまつ。約束はどうした!」

「あんた魔法使えないでしょ。役立たずつ」

「ひでつ。おま、そりやねーよつ」

もう、彼らを止められない。それがわかっているから。周囲の温かな視線もなんのその。

「エリク、ライナ！」

精一杯の大声で、一人の間に割つてはいる。

しん、と静まりかえつた東門で、僕は一人にこう告げた。

「ありがとう。またね」

ぽかん、と目を丸くしたエリクとライナ。

それを合図とするかのように「行きますよ」と荷馬車の前方からサリムさんの声がした。

むち打つ音がして、荷馬車ががたんと揺れる。

それを機に我に返つた二人が遠ざかる馬車に向かつて歩き出す。

「ダット。あたし……絶対に、絶対に強くなるから。待つて!」

「また、ダット。絶対だぞ！ 死ぬなよ！」

その声に重なるようにして、父さんを呼ぶ声、母さんに手を振る

人たちが遠ざかっていく。

見慣れた町の風景が消えたのは、東門を抜けてからしばらく経つた頃だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0544x/>

---

闇色の二重奏

2011年11月8日21時09分発行